

百の恋はざわめく

大岡俊彦

恋愛小説×百人一首。

この小説は、そんなコンセプトで書かれた百本の短篇／掌編集です。

現代（や遙か未来）を舞台にしていますが、人が人を好きという思いや、切なさや喜びは、どんなに時代が変わっても案外同じものですよ。

人は、千年前と同じ恋をしてる。

## 序章 春夏秋冬

# 1	道央のダルメシアン	4
# 2	レーザービーム	7
# 3	四十九日のレッスン	11
# 4	白菊	18

## 第一章 春のうららか

### 第一節 早春

# 5	闇の中の梅	21	# 9	ジャガー	28
# 6	港町行方知らず	22	# 10	フェリー付き場	30
# 7	肌寒い花見	24	# 11	最前線	31
# 8	棒の上のサンクチュアリ	25	# 12	二百年の孤独	32

### 第二節 仲春

# 13	カンニングペーパー	35	# 17	ヘッドライト	43
# 14	伝説のプリマドンナ	37	# 18	吹雪の記憶	43
# 15	女将さん女将さん	38	# 19	静かな春	45
# 16	紫いろの朝	41	# 20	国境のパン屋さん	46

### 第三節 晩春

# 21	耳の赤い店員さん	49	# 25	大坂ダッシュ	55
# 22	髪を切る	51	# 26	桜のような一ヶ月	57
# 23	玉千切る	52	# 27	八重の花	58
# 24	カナリア	54	# 28	満開のあとに	62

第二章 夏の熱情

第一節 初夏

# 29	不如帰 <small>ほととぎす</small> ……………	64	# 33	七十二時間のパラダイス……………	71
# 30	おとうちゃんが消えた……………	67	# 34	血を浴びた女……………	73
# 31	ドブジャンプ……………	68	# 35	その汗は誰のもの……………	73
# 32	蜃気楼……………	69	# 36	海底の君……………	74

第二節 盛夏

# 37	ロックよ、静かに明けよ……………	76	# 41	まぼろし団地……………	82
# 38	推しの目線……………	77	# 42	天狗の花嫁……………	86
# 39	キャンプファイヤー！……………	79	# 43	カズから君へ……………	88
# 40	並木道の青……………	80	# 44	命綱……………	89

第三節 晩夏

# 45	小指の入ってるタコ焼き屋……………	91	# 49	転向……………	97
# 46	内緒の出張……………	93	# 50	先輩の手口……………	99
# 47	みをつくし会見……………	94	# 51	プール付き……………	100
# 48	海の上の遊園地……………	95	# 52	なにもない海……………	103

第三章 秋は人恋しき

第一節 初秋

# 53	奥の山に踏み分けて……………	105	# 57	或る喫茶店で……………	113
# 54	尾ける……………	108	# 58	暗くなるまで待つ……………	114
# 55	修羅シテイ……………	110	# 59	リス……………	115
# 56	夜行バスと月……………	111	# 60	帰り道……………	116

第二節 仲秋

# 61	鳴き声……………	118	# 65	一人の旅……………	122
# 62	岬エッジ……………	119	# 66	背面プロポーズ……………	124
# 63	扉越しの攻防……………	120	# 67	神の一手……………	126
# 64	嵐の子……………	122	# 68	プレイボーイ、プレイガール……………	128

終章 ひとめぐりの春  
 # 101 東京のダルメシアン……………199

# 96	生れ変っても……………176	# 100	軍艦島の魔女……………183
# 95	監視カメラ……………174	# 99	松山で待つ……………181
# 94	天気予報、曇り……………173	# 98	パーティーナイト……………178
# 93	長い夜……………171	# 97	何チョコ……………177

第三節 晩冬

# 88	区間最速……………160	# 92	人生受付嬢……………168
# 87	無音……………159	# 91	隙間風の夜……………166
# 86	橋の上……………157	# 90	泥棒猫……………164
# 85	スタック……………156	# 89	プライド……………162

第二節 厳冬

# 80	ガラス越しの体温……………148	# 84	ホワイトクリスマス……………155
# 79	第九節……………147	# 83	白の朝……………153
# 78	向い風の競技者……………145	# 82	ポテト食え……………151
# 77	霊安室で寝る女……………144	# 81	ボディブロー……………149

第四章 冬の底

第一節 初冬

# 72	三日月に飛ぶ……………135	# 76	最も遠い二人……………140
# 71	憧れのクリーニング屋さん……………133	# 75	Y字路……………139
# 70	初体験……………132	# 74	新作ダンス……………138
# 69	猫になった二人……………130	# 73	もみじのような手……………136

第三節 晩秋

第一話 道央のダルメシアン

孝太郎こうたろうの話をしようと思う。

東京から北海道にやって来た、転校生だ。

「流石東京」って第一印象で思った。ネットもあれば通販もあるこの二十一世紀、正直、東京も北海道も大した差なんてないと思ってたんだよね。でも彼を見て、ウチら田舎者なんだってはっきり分ってしまった。髪形？ 着こなし方？ 着崩し方？ 何もかも違った。ほんとに同じ制服？ 違う生地なんじゃないの？ なんか光り輝いてない？

全女子がほーっとなってるのを意にも介さず、彼はひとつ空いた席にすっと座った。その座り方すら優雅で、まるでドラマみたいで。

「お前、家同じ方向だろ。一緒に帰ってやれ」

と先生に指さされ、私は全女子の嫉妬を浴びた。

白い道を二人で帰った。

市街地こそ雪かきがきちんとされているが、この辺りは街道以外は人力の雪かきだ。人が踏み固めた白い獣道を私たちは歩く。

「道央どうおうって何？」

ふと看板を見た孝太郎は尋ねた。

「道路中央？」

「ちがうちがう。北海道ってすごい大きいでしょ？」

「北海道はでっかいどう」

「はい。えー、旭川あさひがわから札幌まで、ちなみに車で三時間です。東京静岡くらいの距離あん

のよ?」

「嘘でしょ」

孝太郎は立ち止まった。頭の中に地図を浮かべたのだろう。

「道央、道北、道東、道南って区分けしないと広すぎるの。天気も気温も全然違うし」

「はえー」

歩き始めた孝太郎に、私は正直笑ってしまった。

「何笑ってんだよ、光子」

私は光子という古風な名前があまり好きではないのだが、孝太郎が言う特別な響きを帯びる。だからこの名前、嫌いじゃなくなった。

「だってその歩き方っつらないよ!」

私はけらけら笑った。彼の歩き方は明らかに初心者のものである。

「マンガかよ! そのへっぴり腰!」

「うっせえな! こんな大量の雪見たことねえし!」

『ねえし』の『ね』のタイミングで、孝太郎は派手にすっ転んだ。彼の素敵な制服のズボンが雪まみれになる。白に黒の点々が、ダルメシアンの斑模様みたいだった。

「これで道民の仲間入りだね!」

彼はバタバタと払って、ダルメシアンを制服から追い出した。彼の制服が輝いて見えたのは、一度も雪を吸ってなかったからだろうか。いや、多分恋してるからだ、私が。

「じゃあ、道民とやらの歩き方見せてみるよ」

口を尖らせた彼に、私はつつ、と歩いて見せた。理屈では、靴底を平らにして踏みしめるようにすると滑りにくい。でもそんなのづくに応用編に入っているので、傍目にはすたすたと歩いているようにしか見えない。彼は私の真似をしてもう一度転び、制服にもう一頭のダルメシアンを飼う破目になった。

「まあ徐々に慣れて? そのうち、こんなことも出来るようになるし」

私はバレエの恰好ポースをしてみた。

「なにそれ」

私は目を伏せて、ターンしたり白鳥の湖の一節をやって見せたりした。あとに聞いた話では「女神かと思った」そうだ。なんでその場ですぐに言わないのよ、と文句を言ったら、マジ惚れたので、と顔を赤くしてのろけて見せた。

その三週間後、孝太郎の方から告白してきて、私たちはつき合うことになった。

「やっと孝太郎の嫌いな冬も終わるねー」

私たちは相変わらず白い道を歩く。すっかり孝太郎は深い雪に慣れて、変なポーズも出来るようになってる。四ヶ月くらいかかっただろうか。それが私たちの積み重ねてきた時間だと思いと、誇らしくて愛おしい。

「てか長エよ北海道の冬。東京はもう桜の開花宣言だつてさ」

「でも空気が緩んでるのは分るっしょ」

「うん。あの痛い空気はだいぶどっか行つて、きらきらした空気になっている気がする」

白の世界はまだ春には遠い。でも細かい所はもう冬じゃない、そんな季節。

「その土手」

私たちの高校は川沿いの鉄橋のたもとにある。私はその真白な土手を指した。

「もうすぐ露臺<sup>ふきのとう</sup>が一面に生えるよ。おひたしにしても、天婦羅にしても美味しいの」

「ハア？ 道民って川に生えてる草食うの？」

「草は食べないわよ。露臺が美味しいの」

「何、弁当の現地調達？」

「そんなわけないでしょ。でも東京のスーパーより絶対美味しいよ！」

次の朝、私は早起きして孝太郎より先回りした。露臺を沢山ゲットして、びっくりさせようと思ったのだ。

吐く息は白いけど、閉じこもっていた空気がのびをしはじめている。雪はかき氷みたいで、ぎくぎくと足から返ってくる。目には白いけど、この重たい雪は溶けては凍りを繰り返してとても固いのだ。それが地熱で下から溶けて、土と氷の間に川が出来る。つまり北海道の春は、最初に土と氷の間にやって来る。

「あつた！」

小さな露臺が顔を出していた。私は沢山沢山、おいしい所を選んで摘んだ。

大きくカーブする土手の向こうから、孝太郎がやって来た。私は彼の元へ思わず走りだす。両手一杯に春を乗せて。

「おういー！」

じゃりっ。油断した。溶けかけた氷に足を取られ、私は正面からすっ転んでしまったのだ。山盛りの露臺は白い土手に散らばり、彼はげらげらと笑ってそれを拾った。

「あははは。なんだよ。道民は雪の上でダンスできるんじゃないのかよ！」

孝太郎は爆笑しながら、ダルメシアンになった私の制服を払った。

君のために春の野に出て、若菜を摘んだよ  
私の袖に雪がふって、きれいだった

君がため 春の野に出でて 若菜つむ

我が衣手に 雪はふりつつ

光孝天皇(歌番号十五)

## 第二話 レーザービーム

「山のそばの病院に幽霊が出る」って、オレ達の間で噂になった。

その病院は山を切り開いた場所にあつて、ちよつと奥まつていつも暗い。正体を確かめようぜ、とオレは白川と妙田を誘った。

「幽霊退治したら、敷地内通り抜けて塾まで近道出来るぜ！」

塾のある火曜日、オレ達はバットを持って集まった。噂では四階の窓に女の子が立って、こつちを見ているというが……

「なんだ、リアル人間じゃん」

オレ達は拍子抜けした。どう見ても人間で、オレは彼女に手を振った。彼女も微笑んで手を振り返して来た。ただ肌の色が抜けるように白く、窓で透けているようにも見えるから、幽霊と言われるのも分る気がした。

「じゃ、この道通って塾まで行けるよな！」

白川と妙田は走ってゆく。オレも走った。それから火曜日は、病院の脇をショートカットして、フェンスを潜るルートを走る日になった。

ある火曜日。オレ一人遅刻しそうになってダッシュしていると、紙飛行機が飛んできた。四階のあの子が飛ばしたらしい。

『いつも走ってるね！』ってキレイな字で書いてあった。

ランドセルから筆箱を出して、鉛筆で返事を書いた。

『塾マジで遅刻しそうなんだよ！(笑)』

紙飛行機を折って、それを四階まで飛ばせる自信はない。オレは石を拾ってその紙を包



み、石ごと窓に投げた。窓を割らないように、下投げでそつと……届かねえ、もうちよい力を入れて……四回目にやっとその手紙は届いた。

彼女は包みを開けて——そして笑った。

「やべ遅刻だ！」

火曜日は、だから、塾の日じゃなくて、彼女と手紙を交わす日になったんだ。

紙飛行機が飛んできて、オレが返事を書いて石を投げて——最近はうまくなって来たんだぜ？ 下投げで四回に一回から、上投げで二回に一回入るようになって来た。

——彼女の名前は桃<sup>もも</sup>持<sup>も</sup>恵<sup>え</sup>。

——オレの名前は統<sup>おさむ</sup>。

オレと同じ小学校五年生。入院して結構長い。退屈で窓の外を見てたら、猛烈ダッシュしてるオレがうらやましくなったこと。オレは遅刻する確率が半々ぐらいなこと。彼女の趣味は読書で、オレの趣味はゲーム。

大声出して話す手もあったけど、他の人に迷惑かなと思って、ずっと手紙でやり取りしてた。何よりオレ、彼女のキレイな字が好きだったんだ。

彼女の手術の日が近づいてきて、とても怖がっていることが字から伝わってきた。大丈夫だ、オレはそう言うけどそれだけじゃ無責任だ。だから「願掛けをする」って言った。

『願掛け？』

まだ二回に一回しか、四階の窓に手紙を投げられない。『三回連続、窓に一発で入れる。そしたら手術は成功、退院。全力ダッシュ出来る体になる』——そう書いて約束した。

なるべく遠くだけじゃだめだ。なるべく正確に投げるんだ。空缶に一発で当てる。三回連続で当てる。なんなら五回連続。オレは毎日毎日夜まで川原で石を投げ続けた。川原には無限に石がある。オレはその全部を、投げたことがある。

火曜日が来た。

一発目、成功。『ホントに三回連続行けるの？』『まかせとけ！』

二発目も成功。『やった！』『あと一回！』

空缶より窓の方が大きい。行けるだろ。だが油断するなよ……

三発目。

『おねがい！』と書かれた紙に、オレは『絶対手術は成功する』と書いた。深呼吸して三発目を投げ、そして彼女の最高の笑顔をゲットしたんだ。

次の火曜、彼女の病室にあがってみようと思った。花を買えばよかったと病院に入ってから気づいたけど、後戻りはカッコ悪いから進む。418。病院の見取り図と距離感で、そこだと確信する。

だけど418号室には誰もいなかった。

「退院した」と、看護婦さんに教えてもらった。

「そうか、手術、成功したんだ」と、オレは強がった。

塾へ向かう道で振り向いた。病院の屋上では、たくさんの白いシートが干されていた。そのどれかに彼女は憂鬱のまま寝ていて、それはなくなったんだと思った。

そのなびく白が、オレの初恋。

\* \* \*

私の初恋の人の手紙は、今でもたくさん石と一緒に、机の中に大切にしまっている。いつも走って、いつも私を置き去りにしそうに速くて。いつも元気な文字で、彼の性格をよく表していた。元気になったよって言いたくて、火曜日のたびに病院まで行って待っていたけど、そのうちに家が引越してしまって、彼には一度も再会できなかった。

高校生になったある夏の日、テレビを見た私は驚いてスマホを落としてしまった。

甲子園。野球。

真っ黒に日焼けした彼が、青い野球帽を被っている。

甲高い音。相手がボールを打った。彼は走る。ボールを拾い、キャッチャーまで矢のように投げた。

「レーザービーム！」

アナウンサーが叫んだ。ほんとのレーザービームのようだった。まっすぐに白い球が飛んでいく。私の病室の窓に飛んできたくしゃくしゃの手紙よりも、速く、速く、まっすぐに。あれからもっともっと、もっと鍛えたんだ。

「大阪へはどうやったら行けるの？」

母にお金を借りた。今すぐ飛んで行きたかった。次の試合まで待つ日々がとても長かった。火曜日が終わって、次の火曜日を待つ気持ちだった。訳が分からなくて、屋上でトランペットを延々吹いた。

私は昔幽霊と間違えられる程肌が白かった。最初幽霊だって思ったって手紙にも書いて

あった。元気になったよ。手術は成功したんだ。でもスポーツは医者に止められたので、肺活量を鍛えて吹奏楽部をやっている。

夏の夕日の屋上。吹ける曲を全部吹く。全部、彼に届いて。

\* \* \*

ちつくしよう。結局、一回戦勝てただけだったかあ。

甲子園、もう一回来れるかなあ。あーあ、白川と妙田、泣いてるよ。吐くまで練習頑張ったもんな。でも課題も見えたら？ 俺たちはスタミナがない。もつと走りこむぞ？ え？ やっぱ土をスパイクに詰めるの？ いるそれ？ オレも記念にやっつくかなあ。

——その時オレは、フェンスの向こうに知ってる顔を見た。

その制服は知らない学校。でも顔は知ってる。

「桃持恵……ちゃん……？」

彼女はその場で手紙を書いて、紙飛行機をつくった。

やっぱ彼女だ！ 彼女だよ！

空に白い紙飛行機が飛んできた。彼女の名前と電話番号が書いてあった。同じ字だ。初恋の字だ！ どうしよう、この手紙、投げ返すわけにはいかない。マネージャーからペンを奪った。スパイクだ。オレは自分の電話番号をスパイクに書いた。

甲子園のバックホームに比べりゃ、病院の窓に比べりゃ全然近いぜ。オレのレーザービーム舐めんなよ！

オレの電話番号を書いたスパイクが、スローモーションで飛んでいく。

緑のスコアボードと白い入道雲が、山の病院で干されたシャツに見えた。どんなブラスバンドより、どんな応援団より大きな声でオレは叫んだ。

「退院おめでとう！」

春が過ぎて夏が来たんだぜ

真っ白な衣を干してる香具山を見よ

春過ぎて 夏来にけらし 白妙の

衣ほすてふ 天の香具山

持統天皇（二）

第三話 四十九日のレッスン

地図を切り抜き、スクラップブックにまとめて貼りつける。一平は、今まで登った山の写真を整理していた。ようやく先月分まで終わった頃、チャイムが鳴った。

ロンドンからの海外便——彼宛ではなく業美宛だった。ものものしくビニールでぐるぐる巻きになっている。

「またお前、性懲りもなく買いやがったな！ いくらするんだよこれ！」

『ごめんごめん！ やっと届いたかー！ 長かったなー！』

業美は愛おしそうにその新顔を見つめた。スクラップ用のハサミで、一平は何重もの梱包を切り裂いてゆく。

中から出てきたのは銀色の中古カメラ。金属の匂いがほのかにした。

「これとこれとこれは……一体何が違うんだよ業美！」

一平はリビングの棚を見た。その中には沢山の銀色のカメラが置いてあり、一平にとって業美のコレクションはどれも同じに見えた。だがカメラに詳しい者が見れば、それはライカというドイツのメーカー製で、レンズがf1・4付近の明るいレンズばかりが集められていることが分るだろう。

『f1・2なんだよこのレンズ！ 状態もいいでしょ！ ポケ味重視なの！』

一平はファインダーを覗くが、何も分らなかった。

「……生きてるうちに、届けて欲しかったな」

その金属の塊を、ごとりと遺影の前に置いた。

山程のカメラコレクションの真中には、業美の遺影と骨壺があった。

業美はやっと届いた新入りを触ってみたいと手を伸ばしたが、幽霊の自分は手が透けていて、うまく触れられない。

一平は煙草に火をつけようとしたが、業美に「身体に気をつけて」と言われていたことを思い出しポケットにしまった。

『よしよし！』

業美は煙草を吸わなかった一平の頭を撫でようとしたが、その手も透けた。

「四十九日まではさ、魂がその辺に漂ってるって言うじゃん？」

同期の一平が、学生時代からの恋人であった奥さんを事故で亡くした。ずっと自宅で引

きこもり、会社も休んでいるという。心配した<sup>ありた</sup>在田は、彼を居酒屋に誘ったのだった。

思ったより元気そうだ、と思う。葬儀で泣き叫んでいた姿よりは、だいぶ落ち着いたように見えた。

「うん。知ってる」

一平はハイボールの氷を鳴らして答えた。

「まだ彼女が、部屋でうろろしている気がするんだよね」

隣の席に座った業美は、相槌を打つようにうなづく。

『そうそう。うろろしてるよ？』

「だから彼女がいる体で、俺は業美と会話してるんだ。外でやったら変だけど、家でやる分にはいいでしょ」

大切な人を亡くした者は、まるで生前のその人と暮らすように会話を続けることがあるという。そんなことを在田は聞いたことがあった。

「いつも隣の席だったもんな」

在田は空いている隣の席を指さした。

『在田くん！ 在田くん！』

業美はその席から手を振ったが、もちろん返事はなかった。

祭壇の水を替えて植木鉢に撒き、昨日届いた銀色のカメラを手に取って、一平はファインダーを覗いてみた。

「お前さ……これで何撮ろうとしたの？」

『いろいろ』

「ちよっと借りていい？」

『いいよ、もちろん！』

一平は業美が足しげく通っていた写真館に顔を出した。彼女はここでちよっとした有名な人で、彼女の撮った作品が沢山パネルで飾ってあった。アマチュア写真家としてそこそこの名が通っているとは聞いていたが、実際彼女の写真をこんなにまじまじと見たことはなかった。山登りが趣味の一平は、「お互いの趣味には干渉しないようにしようぜ」という取引で、互いの領域を守ってきたのだ。

彼女が使っていたというフィルムを買ってきたが、まずその装填に戸惑った。

『ホラ！ よく見て！ 表裏上下、一個しか爪のハマるはめ方ないでしょ？』

「(1) (2)」

『そう！ 軽く巻き上げて、カメラの中でフィルムがピンと張られるようにして……』

「……こんなん撮れるの？」

スマホとデジカメしか触ったことのない一平は、ボタン電池と機械式でカメラが動くのが不思議に思えた。

『車だって、電子機器なくても動くでしょ？』

「まあ……そういうえばそうか」

ばしやり。

一平は業美がいなくなった、二人の部屋を撮った。

カメラを提げて歩くのは不思議な気分だった。いつも彼女はそうしていたが、自分がその番になるのは変な感じだ。彼女は散歩の途中「気になる！」と言ったものに走って行ってたが、何が「気になる」のか、一平にはピンと来ない。

そのうち、いつも彼女と過ごした公園までやって来た。

「なんか、撮ってみるか」

『うん！ それがいい！ 私のはじめて撮ったのも、近所の公園だったし！』

一平はベンチや滑り台にカメラを向けて、何枚かシャッターを切ってみた。

『あー、絞りもピントも間違ってる！ ちゃんと測光して！ フィルムの感度100でしよ？ あ、撮る度に巻かないと二重写りになっちゃうよ！』

業美はひとつひとつのミスに突つ込むが、一平は何がどう間違ってるのかすら分らない。

「うん。初日はこんなもんでいいか」

『諦め早すぎ！ 誰も見たことのない滑り台の角度を探すとか、ブランコの裏は見たことないなあとか、この葉っぱの赤が綺麗とか、色々見つけるの！』

「……」

翌々日に上がった写真を見た一平は落ち込んだ。

『ピンボケ、手ぶれ、露出ミス、二重露光、アングルが平凡……』

業美は一々ダメ出しをしつつも、自分が初心者だった頃を思い出して褒めようとした。

『でもこれは色味がいいし、これなんてフツーにいいと思うけど？』

「もういい。俺は写真むいてねえんだ」

一平は煙草を一本だけ吸った。

「入るよ？ いい？」

ずっと開けていない、業美の部屋の扉をノックする。

『もちろん、どうぞ！』

彼女がいたときのままの部屋は、彼女の濃厚な匂いが残っていた。

壁には写真館でも見たパネルがある。コルクボードには二人で写った写真ばかりだ。公園で寝てる一平、本屋で立ち読みする一平、二人で写ってる自撮り、公衆トイレに駆け込む一平の隠し撮り。出てきて変な顔をする一平までが組み写真。

一平は業美の本棚を探した。

「バカでも分る写真入門みたい本、ない？」

『あるよある！ 私が最初に読んだやつ！ 超オススメ！ これこれ！』

業美はその本をつかもうとするも、透けた手でつかめない。だが両手に力を籠めると、少しずつ……

『動いた？ 行ける？ うーん！』

業美は必死で本棚に手をかけ足をかけ、体中の力を使ってその本を動かした。

『ハア……ハア……ハア……死んだのに疲れるのか……』

どさり。

本が落ちた。タイトルに『バカでも分る写真入門』とあった。

「ん？ どつから落ちた？ ……アレ？ あるじゃん！ これだよこれ！」

「あ。このベンチ」

彼女の撮った自分を一平は思い出して、その写真を撮ってみようと思った。

「そう。俺がこう寝てて、彼女はここからきつと撮って……」

業美は、一平の代わりに寝転がる。

『そうそう。そのへん。背景と人物のバランスを考えて。もうちよい前に出たらドンピシヤー！』

ぱしやり。誰もいないベンチの写真を、一平はフィルムに収めた。

本屋。公衆トイレ。駅へ向かう階段。コンビニの前のゴミ箱。遊園地。中華料理屋。銭

湯。一平は彼女が撮った写真を撮り続けた。彼女は何を撮ろうとしてしたのだろう？ そ

れを知りたいと思ったのだ。

業美はそのたびにモデルをやってあげ、一平はそのたびに誰もいないそのフレームで、シャッターを押した。

仕上がりがなんとか予測できるようになった頃、一平は遺影の業美に相談した。

「業美。俺さ、お前を連れてきたい所があるんだよね」

『どい？』

「……あの紅葉、もう一度見に行きたいんだ」

『えっ。あの高尾山たかおさんの？』

人物写真が中心だった業美が、突然風景を撮ってみたいと言い出した。「アンタ山が趣味なんだから、私を山に連れてきなさいよ！」と山初心者の癖に無理難題を言ってきた。

困った一平は「まずは高尾山か」と、東京のピクニック用の小さな山に連れて行った。日帰りで電車で行けるし、丁度紅葉の時期でいい写真が撮れるだろうと思ったのだ。

ところが業美は急に「こっちだー！」って叫び登山道を外れ、二人で遭難しかけた。高尾山で遭難ってあまりにもカッコ悪い。だけどそこで誰も知らない美しい光景を見た。

それまでに写真を撮り過ぎて、フィルムを使い果たしていた業美は悔しかった。命が助かったからいいが山を舐めるなど説教して、そして二人では山に行かなくなった。

「俺、お前の代わりにあの写真撮りたいんだ」

秋の高尾山は行楽客で埋まり、赤や黄色やオレンジに包まれて美しかった。

そこに本格的な装備をした場違いの一平が、登山道から外れたルートを進み始めた。

「えっと……たしかここが最初に道を外れた所だよな？」

業美は記憶にない。一平はスクラップした地図を出し、印を確かめた。

深い藪は鉋で薙ぐ。谷川をジャンプして越える。合皮のブーツは水を通さない。小高い丘は雨で地形が変わっていた。ここを駆け上がって、あそこで一休みした筈だ。

一平は岩に腰かけ、水筒から水を含み、業美に言った。

「業美、そのへんにいる？」

『うん。ちゃんといるよ』

「お前さ、俺のこと本当に好きだったろ？」

『はい。もちろんそうですよ？』



「お前が何を撮ったか、何となく分った気がする。お前、俺を撮ってたんだな」  
『そうですけど？』

「『なんで写真なんか撮るんだ？』って聞いたときにお前は『分んない』って答えたから、俺はずっと分らないものを撮ってるんだって思ってた。でもさ、自分で写真を撮ったら分ったよ」

『何？』

「いとおしいと思った時にシャッターを押すんだ。『愛してる』という代りに」  
『……』

業美は後ろから一平を抱きしめた。孤独に押し潰されている愛しい人の、体に触れられないことが残念で、悔しくて悔しくてたまらなかった。一平は顔をくしゃくしゃにして聞いた。

「お前、なんで死んだの？」

『私だって、死にたくて死んだんじゃないよ！』

二人でしばらく泣いた。風と枯葉の音しか聞こえなかった。

『あっ』

業美が気づいた。その先の右の小道を行けば、あの場所へ辿りつける。だが一平はそれに気づかず歩き出してしまった。

『ちよっと待って！ 一平！ こっちだよ！ こっち！ ここだって！』

どんなに声をかけても一平には聞こえない。業美は枝につかまり、うーんと何度も唸って、1ミリ、2ミリ、4ミリと、ゆっさゆっさと動かしだした。

ぱきっ。

枯枝が折れて落ちる音に、一平は振り返った。

それは、神の用意した奇跡だった。

小川が流れ、自然に落ちた紅葉がレッドカーペットをつくる。赤、赤、赤。川に沈んだ紅、川面の朱、緋、茜。ゆったりしたグラデーションに差す、黄金の斜光。

「誰もこの景色がここにあることを知らない。でも誰も知らなくても、ずっとこれはここに在り続ける。そうお前は言ってたな」

『うん』

「ここに、お前といた」

水に濡れた落葉の匂いが、静けさの中に溶けている。

一平は業美と一緒に、シャツターを押した。

その写真がコンテストで佳作に入り、一平は展覧会に招待されていた。「秘密の場所」とタイトルをつけたそのパネルを、一平と業美は眺めていた。

『私が見つけた場所だよ?』

「俺が撮ったんだぞ?」

『じゃ、二人合作ってことで』

「合作か。悪くない」

そこに、ベレー帽を被った女子大生が話しかけてきた。

「あの、この写真の作者さんと聞いてきたんですが」

「はい。あー、一応、僕です」

「あの、私、写真学科に通ってます。ここってどの辺りか聞いてもいいですか?」

「それは……あー、『秘密の場所』なんで」

「そっか。そうですね。ごめんなさい。ありがとうございました」

彼女を見送る一平に、業美は横から突っ込んだ。

『教えちゃいなさいよ。教えていいから。一平の好みの子だったでしょ? 趣味の共通す

るカメラ女子、いいじゃない。声かけて来なよ』

「いいよ。お前、いるし」

『このバカ!』

業美は一平の頭を思い切りはたいた。一平は誰かに後頭部をはたかれたような気がして、思わず彼女の元へ走り出した。

「あの。やっぱ、教えてもいいですよ。高尾山」

「高尾山? そんな近場に?」

「でも普通じゃ行けない場所にあって……」

残念がる彼女の顔を見て、一平は勇気を出した。

「良かったら、案内してもいいですけど」

ベレー帽の彼女はころころと笑う可愛らしい子だった。それを見て一平も笑っていた。業美は入口の黒い扉にもたれて、その二人を見守っていた。

『覚えててね。泣いてるあなたは、ほんとのあなたじゃないから』  
談笑する二人はちよつと嫉妬するけれど、これでいいのだと思う。

『一平、知ってた？』

業美は一平に話しかける。この声が彼に届かないことも知っている。

『今日が、四十九日目なんだよね』

業美は目一杯背伸びして腕を伸ばして、出来るだけ大きく手を振った。

誰も知らないこの奇跡

龍田川たつたがわがくくり染めされて、唐紅からくれなゐの衣のよう

千早ちはやぶる 神代かみよもきかず 龍田川たつたがわ

唐紅からくれなゐに 水くくるとは

在原業平朝臣ありわらのなりひらあそそん（一七）

#### 第四話 白菊

「ああ。これだよこの感じ。久しぶりだなあ」

柳葉包丁の持ち手は白木で、俺の長年の手指が染みこんでて、まるで自分の皮膚の延長のようだった。重たいが絶妙な重心位置で、動かすと軽い。俺は刃筋を立て、寝かせ、引く真似を試してみた。

刃渡り三十センチはざらりと輝き、一点の曇りもなくこの病室の白い壁を反射し、俺の顔を映している……筈だ。今の俺には見えないから何とも言えない。俺は視力をほとんど失ってしまったからだ。ぼんやりとは見えている。ざらりと輝いてる……筈だ。

「柳葉包丁をもう一度握りたい」

寿司職人の魂である包丁を、俺はずっと触っていないかった。同僚の凡内ぼんないにそう伝えて、ツケ場に置きっぱなしの俺の柳葉を、病室まで持ってきてもらったのだ。

「正恒まさつね。あのさ……」

「包丁と寝るなんて、こいつを初めて買って以来かもな」

俺は笑って言う。彼の憐れむ顔を、声からなんとなく想像できたからだ。

多分俺は、二度と寿司を握れない。

今夜はその物語を、この包丁に聞いてもらおうと思う。

なんとか病で目まいが止まらなくなり、俺はツケ場で倒れて病院に担ぎ込まれた。その時はまだ目は普通に見えていた。なにせ主治医の愛躬<sup>あいきみ</sup>先生の超絶美人ぶりに、俺はひそかにガッツポーズしてた位だからね。

だが先生の努力虚しく、俺の病状は日に日に悪化していった。

「新薬が出来て、被験者を探しているの」

ある日俺は、愛躬先生から相談を持ちかけられた。

「まだ認可は下りてなくて、動物実験をクリアした段階なんだけど、医学の発展に協力してくれたら、と思って」

「このまま行っても、俺は二度とツケ場に出れるほど回復しないですよね？」

「……絶対とは言えないけど……」

「その薬で、回復する確率は？」

「まだ分ってません」

「もし俺が回復したら、先生のポイント上がります？」

「学会に報告できます」

「じゃあやります」

俺は先生のが好きだったからさ、先生の為になれば何でもいいと思ったんだ。

「治ったら、先生に俺の捌いた寿司おごりますよ」

愛してます、そんないきなり言うなんて気恥しいじゃない？ だから俺は、俺の出来る最高のプレゼントを彼女にあげたいと思ったのさ。

でも俺は世間知らずだよなあ。

美人先生なんて、沢山の男に言い寄られてんだろうな、どうせ。そんなこと考えもしなかったよ。

投薬から一週間後、俺の目はどんどん暗くなり、視界がぼやけ、色が少ししか見えなくなっていくた。俺は、先生は白菊のような美しい人だと思っていた。肌も白いし。でもその肌の白と、白衣の白が混濁してしまうようになっていた。

失明。そんな運命が待っているなんて、思いもなかったのさ。

このまま退院するのだろうか。盲人のステッキを貰って、家帰って暮らせるだろうか？ 仕事どうしよう。保険下りるのかな。難病って下りないんだっけ？

それでも俺は先生のことが好きだったから、運命を受け入れようと思ったんだ。握る感触はまだ生きてるから、巻き寿司くらいなら巻けるかも、と彼女に言いに行こうとして、立ち話を聞いてしまったんだよね。

「あの人は私に惚れてるみたいだから、投薬をOKしてくれると思った」って。

——利用したのか？ 俺を？

その白菊のような顔の下で、そんな非道いことを考えてたのか？

「確率は半々くらいと思ってたけど、アンラッキーだった」

とも言ったよな？ なんだそれ？ 俺はパチンコか？

今夜は柳葉と寝る。

お前、初めて俺に握られてどう思った？ それから何匹捌いたかなあ。

朝は冷えこみ、雪が散らついていた。

そればかりは今の俺の目でも分る。無数の白いぼんやりしたものが、視界をゆっくりと下に流れている。霜柱を踏むとさくさくと音が鳴る。雪の匂いって、なんとなくあるよな。

俺は駐車場で、白い車を探した。

愛躬先生の愛車は白だ。だけどこの病院の先生の白い車率は高く、白い車だけで何台もあつた。

複数の白い車から、複数の白衣が降りてきた。

まあどれでもいい。全部をこの柳葉で、捌くよ。

手当たり次第に折るなら折ってやるよ

初霜か白菊か、分らない

心あてに 折らばや折らむ 初霜の

おきまどはせる 白菊の花

おおしこうのみつね  
凡河内躬恒(二一九)

第一章 春のうららか

第一節 早春

第五話 闇の中の梅

梅の香りは、夜になると強くなる。

同窓会に出席した貫治は、酒を冷まそうとロビーに来ていた。そこに梅の生け花があり、香気を辺りに放っている。こっちに酔っちまうよ、と貫治は自動ドアを開け、外で煙草に火をつけた。

三十年ぶりの、地元での同窓会だった。東京の同窓会では会えない奴に会えた。クラスのマドンナは五十でもやっぱり美人で、ずっと行方不明だった奴は今ガーナに知っていることを知った。昼間母校に行ってきた奴らが興奮して語っている。今から行こうぜと騒いでいる。

「貫ちゃん、ここだったの」

真紀がトイレから出てきた。偶然を装って二人きりで話せないかと、貫治は待ち伏せていたのだ。

彼女は貫治にとって親友だった。男の親友より多分大事な親友で、本やCDやビデオを貸し借りした。なんにもない田舎の高校で、ただ黙って生きてるだけじゃ詰まらなくて、小説や映画や音楽で、二人は別の世界へ出かけた。

今どうしてる？ 結婚してるのか？ してるだろうな。俺あの時、お前が好きだったんだぜ。聞けば野暮になることは聞かなかった。その代わり、最近インド映画が来てるぜという話を延々とした。

「貫ちゃんはまだ、『ここじゃないどこか』へ行こうとしてるのね？」

真紀は笑った。ひよこ色のカーディガンが似合ってる。

「なあ。ちよつと抜けて外へ行こうぜ」

「え？」

「幹事の之裕これひろに連絡しとく。二次会はあとで合流すりゃいいよ」

「どこ行くの？」

「うーん、ここじゃないどこか」

真紀は、全然変わってないって笑った。

「貫ちゃん覚えてる？ フェンス超えて高校の外に出た日のこと」

「俺しよつちゆうやってたけど、真紀は一回しか付き合ってくれなかったよな」

「一回で十分よ。大冒険だったわよ」

「じゃまたフェンス越えようぜ」

貫治は自動ドアを開けて、敷居をまたぐようにひよいとジャンプした。真紀は笑って同じことをする。

俺にとつての「ここじゃないどこか」は君だ。そう堂々と言えるだろうか。

外の通りは梅が満開で、甘くて酸っぱくてくらくらした。

人の心はずっと同じでしょうか

ただふるさとの梅は今も咲いて、昔と同じ匂いを漂わせています

人はいさ 心も知らず ふるさとは

花ぞむかしの 香かにほひける

紀貫之きののじらぬき (二五)

## 第六話 港町行方知らず

春休みの補習が休講になったら、忠士あつしが「船が見てえ」と言い出した。

私たちの高校は港がすぐそばで、時々大きな船の着くとき見に行く。

でもいざその船たちを見たら、彼は「詰まらない」と言い出したのだ。

「なんでよ？」

「だってこいつら、鎖に繋がれてるじゃん」と忠士は錨を指した。

「俺、実は船乗りになりたいんだよね」

「こないだ宇宙飛行士って言ってなかったっけ？」

「それでもいい」

「どっちよ」

「どっちでも。鎖なんかに繋がれずに、行ける所まで行きたいんだよね」

「帰れなくなったらどうすんのよ」

「愛璃好を連れてくからOK」

「私も行くのかよ」

「やべ、電池切れそう。充電器持ってる？」

「次行く所を調べようとした忠は私に聞く。」

「あ、じゃあ私が調べるわ」

私もスマホを出したが、ここで面白いことを思いついた。

「ね、今日はスマホなしで過ごさん？」

「どういうこと？」

「コインロッカーにスマホとか鞆とか入れるの。で、手ぶらで好きな所へ行くの」

「ぜってー失敗するやつじゃんそれ。何も分らんで行くの？」

「それはそれで楽しくない？ 行ける所まで行きたいんでしょ？」

ふわふわした。

誰とも繋がってなく、誰の意見とも繋がっていなくて、まるで魂の緒がないみたいだった。

煉瓦通りの服屋をひやかして、思いつきで喫茶店に入り、中華街に迷い込んだ。今何時かも分らなくて、海がきらきらしてるのをずっと見てた。

ふわふわした中で、私たちの手だけが繋がっていた。

由良川の河口を、ゆらゆらと舟がゆく

船頭が梶をなくしたのだ 私の恋の行く末は？

由良の門を わたる舟人 梶をたえ

行く方も知らぬ 恋の道かな

曾禰好忠（四六）



第七話 肌寒い花見

お花見にはやっぱりまだ早いよ、と奈防なおは思った。

昼間は暖かくても夜はコートもマフラーもいる。桜だつて三分咲き。

「あー、まだちよつと早かつたかなあー」

自分が誘つたのに、悪びれもせず先輩の周二しゅうじはくしやりと笑つた。邪気のない、そんな所が好かれるのかも知れないと奈防は思う。

周二は会社の三年先輩で、社内の評判はきわめて悪い。専ら仕事関係ではなく、女関係でだ。彼は社内の人という美人にことごとく手をつけ、社長秘書ともつき合つてすぐに捨てたらしい。社内は既に焼け野原で、外の女を探していると聞く。

「春だし、花見してから帰ろうぜ」

と、残業帰りに周二は奈防を誘つた。最近よく最後まで二人で残っていることが多かった、理由はそんなところだろう。美人でない私は、彼の獲物ではない。

近所の公園の、咲いてもいない桜並木を歩きながら、とりとめのない話をした。部長の悪口、お局様の悪口。桜は枝ばかりで、部長の髪の毛ほどこしか花をつけていなかった。それでも奈防は、この桜並木が永遠に終わらなければいいと思つていた。「もう少し行つたら咲いてるかも」とか言いながら、もっと歩いていたかつた。

周二先輩を好きになつてしまつたのは、いつからだろう。新入社員の時に「気をつけるように」と言われてなるべく近づかないようにしてのに。

「奈防ちゃん、結構しゃべるんだね」

ほら、もう人のことを名前で呼んでる。調子のいい人。

ああ、並木道の終わりがやつてきた。駅に向かつて電車に乗つて、家に帰る時間。

奈防は、終わりの手前で立ち止まつた。

「どうしたの？」

「体、冷えちゃつた」

「マジで？ ごめん誘つた俺が悪かつた。カイロとか買いに行くか」

「あ、熱燗一杯だけ、飲んで帰りたいです」

「え。そう。あれ？ いける口？」

「あと、悪口ばっかじゃなくて、真面目な話もしたいです」

肌寒くて良かったと奈防は思った。満開の桜なら、きっと流されてしまう。

春の夜の夢のように消えてしまうあなたの腕枕に  
体を預けるわけにはいかないの 噂になっちゃう

春の夜の 夢ばかりなる 手枕たまぐらに

かひなく立たむ 名こそ惜しけれ

周防内侍すおうのな（六七）

## 第八話 棒の上のサンクチュアリ

「匡子きょうこの部屋にさ、飛び込んでやるよ」

良房よしかさはポーズをつけておどけた。

「は？ 変態かよ」

私は良房をしばきながら笑う。

隣の家に住んでいる幼馴染の良房は、陸上部に入って最初に部長に言われたのだそうだ。

「お前は百メートル走の才能もマラソンの才能もない」と。それでちよつと泣いたらしい。

「何ならあるんすか」と聞いたたら「棒高跳びの才能」と言われて、二度泣いたそうだ。

「棒高跳びの才能なんてこの世にあるの？」と私が聞いたたら、「お前は陸上の才能がないから、誰もやりたがらない棒高跳びでもやれってこと」と、ひどく落ち込んだ。

だが二年間、それでも腐らなかつた良房を私は本当に尊敬している。彼の努力の賜物か、それとも部長の慧眼で、本当に彼に棒高跳びの才能があったのか、とにかく良房はどんどん伸びて、その白い棒で県大会の記録を飛び越えてしまったのだ。

「大体、棒高跳びなんて何の役に立つんだよ」と、彼は自虐して言う。

「野球やサッカーだってただのゲームじゃん。役に立つ立たないじゃないでしょ」

「いやいや、短距離選手とかだったらさ、ひったくりの犯人とかダッシュで捕まえられるだろ。マラソン選手ならひったくりをどこまででも追っかけられるし、障害物選手ハドなら障害物越えながらひったくりを追えるし、幅跳び選手コシケンなら溝越えてひったくりに迫れるし」

「ひったくり出すぎでしょ」

「そこに棒をたまたま持った俺が居合わせたらどうだ？ タッタタッって走って、棒をみよいーんってやって、何も出来ねえじゃん」

「まず棒持って歩いてないし」

「だろ？ 棒高跳び選手<sup>棒</sup>つてき、扉を超える位しか役に立たねえんだよな。忍者かよ」

「でも凄くない？ あの信号越えられるんでしょ？」

立ち止まった私たちは、黄色が点滅したコンビ二前の信号を見た。

私たちは部活が終わると、どちらからともなく待ち合わせて隣同士の家に戻る。小学校の頃からそうしてきたが、どちらかに彼氏彼女が出来たらこの習慣はなくなるかと思っていた。けどずっと続いている。どちらにも出来なかったからだ。

良房は棒を担ぐ感覚で、数歩歩いて言った。

「うん。まあ、越えられるっしょ」

「そんなこと人間に出来るって凄くない？」

「いやだからそれが何の役に立つのかつつう話よ。たとえば二階の窓が開いてて、そこに飛び込めって言われたら俺多分できるよ？」

「え、凄い」

「俺んちの庭から匡子の部屋にさ、飛び込んでやるよ」

「は？ 変態かよ」

彼は次の記録会について何も話さなかった。プレッシャーがかかっているんだろうか。私は何て声をかけていいのか分からないので、あえてその話題には触れなかった。

「ねえ、大会見に行っていない？」

「恥ずいよ」

「でも私、信号の上の風を見たいんだよね」

「は？ 風なんて吹いてねえし」

「吹いてなくてもいいよ。そこから何が見えるのか、知りたい」

「いやだから、お前んちの窓開けたら見えるべ」

「窓開けたらアンタ飛び込んで来るじゃん」

「行かねえし」

「……見に行ったらプレッシャーになる？」

「なんねえよ。別に記録更新しなかったって、まだ抜かれてねえし。あ、あと」

「？」

「競技場、二階席あるよ」

「二階席？」

「その高さならオレと大体同じ目線だろ」

私は二階席で待つことを想像した。下から良房が、白い棒を極限まで曲げて、彼の目一杯溜めた力を解放しながら飛んで来る。その頂点で浴びる風。私は同じ高さで受け止めることが出来る。なんて素敵な特等席。

「シンデレラシート用意しといて」

「心配しなくてもガラガラだ」

本当にシンデレラシートだった。棒高跳びの選手たちが、私と同じ目線の高さまで飛んで来ててびっくりした。観客席の手すりから下を覗き込んだ。下にふかふかのエアマットが敷いてあったとしても、私は飛び込む勇氣すらない。この高さに人力で来て、そしてほんの数瞬間を浴びて地上に帰って行く。そんな彼らを、私は美しいと思う。

良房の出番が来た。一年の女子たちが、タオルやドリンクを持って控えている。記録を出したら「急に付き人が増えた」って良房は言っていた。それ付き人じゃないよ。目がハートになってるのに全然気づいていない。鈍に過ぎる。

一回目。

スローモーションで、良房は私のところまで飛んできた。

かしやんと言って、バーに触れて落ちてゆく。失格。

二回目。

バーの高さを下げても良かったが、良房はむしろ上げてきた。県大会プラス十センチの高さだ。アンタ今日調子悪いって言ってたじゃん。

良房の足音だけが響く。無音になった。周りも暗くなった気がする。

良房が一瞬で頂点まで来た。毛穴まで見える。彼に風が吹く。ちがう。彼は進んでいて、彼は風の先にいる。

とすん。小さな音を立てて彼はエアマットに沈んだ。水泳の高飛び込みで、入水がうまく行ったときほど音が小さい、って話を思い出した。

ぎゃあああああと一年の女子たちが悲鳴を上げた。県大会記録更新。やるじゃん。

私は良房に親指を立てて祝福した。彼も私を見て親指を立てた。一年の女子たちがタオルで汗を拭いたり、スポーツドリンクを渡したりしている。

だけど私だけのものだ。シンデレラシートで私たちが過ごした、あの短い永遠の瞬間は。

高き山の峰に桜が咲いた

下々の霞よ、騒いでこの桜を霞ませないでくれ

高砂の 尾上の桜 咲きにけり

外山の霞 たたずもあらなむ

権中納言匡房（七三）

## 第九話 ジャガー

「いやホントマジでヤベエ」

大河は、ため息をついて遠くを見る。

「いや意味分んねえし。なんで俺たち動物園まで来てるし」

親友の左人志は渋い顔をしていた。

「いやもう寝ても覚めても豹柄なワケよ。もう居ても立ってもいられなくて豹柄よ。だからリアル豹のリアル豹柄を見に来たってワケよ」

「意味分らん」

「俺家庭教師のバイトしてるって言ったじゃん」

「男子小学生な。女子小学生じゃなくて何よりよ」

「ロリじゃねえよ。ヤベエのはお母さんの方！ 原さんだよ！」

「何が？」

「絶対誘ってる」

「は？」

「彼女、絶対俺のこと誘ってる」

「なんで」

「大学生の肉体が欲しいんだよ。メイクばっちりだし、服毎回豹柄だし」

「豹柄関係なくね？」

「アニマルだろ」

「深読みしすぎだろ」

「スカートめっちゃミニだぜ？ おかしくね？ 小学生の母親だぞ？」

「で」

「しかもわざとスプーン落としてき、拾うわけよ、豹柄が」

「豹柄関係ねえだろ」

「こっからがキモなんだよ！ チラリと見せてくんの、ミニの中のパンツを」

「……ほう」

「それが豹柄なんだよ」

「マジか！」

「ぜってーヤレた。あの時ヤレた」

「次回いつだよ！」

「いや、その次家庭教師行ったら普通の恰好だったんだよ。豹柄でもなくなってたんだよ」

大河は目の前を歩く、檻の中の動物を見た。

「それで豹柄見に動物園来たのかよ？」

「そうだよ。リアル豹柄見てたら落ち着くかなあって思ってたんだけど……」

「けど？」

「落ち着かねえ」

左人志はモヤモヤし続ける大河に言った。

「あのさ」

「何だよ」

「それ、ジャガーだよ。豹はパンサー」

檻の表示には、「ジャガー」とあった。

「……豹とジャガー、違うの？」

——ジャガーの方が大型で、豹とは生息域が異なります。ジャガーは体の模様は斑紋の中に、小さな黒い点があるのが特徴で——

左人志は看板の説明を読んだが、大河の耳にはまるで入らなかった。

陸奥の信夫文知摺柄（複雑なことで知られる）のように

俺が俺でなくなるほど心をぐちゃぐちゃに染めるのは、誰？

陸奥の しのぶもちずり 誰ゆゑに

乱れそめにし われならなくに

河原左大臣（十四）

第十話 フェリー付き場

雨がひどかった。この分では、せつかく咲いた桜も散ってしまう。風もひどかった。桜はこれに耐えられるだろうか。

「次来るまでには散っちゃうかもなあ」と僕は言った。

ワイパーの音が規則的に鳴っていて、彼女は「そうね」とワイパーの合いの手のように答えた。

フェリー付き場までは、彼女が車で送ってくれる。最初は病院から。ここ何年かは、泊まった彼女の家から。もうずっと、それが僕らの習慣だった。

僕は医師だ。本土からこの島に週二回通う、いわゆる離島の通い医である。彼女はこの島のたった一人の看護師。本当は医者になりたかったけどオツムが足りなかったの、と初対面でやらせたらと明るく笑ったのをよく覚えている。

週に二回しか、彼女の住み、働く、この島で会えない。僕らが付き合うまで二年くらいかかったかな。お互いの気持ちを確認合うまで、少しずつ少しずつだったような気がする。島の人は穏やかな人が多いと勝手に思ってたけど、彼女は怒りっぽくて笑い上戸で、頭の回転が速い人だった。僕の診察より早く次の道具を用意していることもある位。やっぱり医者になればよかったのに。でもだとしたら僕らは出会えなかったね。

「来週まで会えないのね」

彼女はひどく不機嫌だ。さつきから喋らないのは、運転に集中しているからではなかったのか。彼女は、テトラポッドに碎ける波しぶきを見て言った。

「フェリー、欠航にならないかな」

それは僕も思っていたことだった。

鞆に、プロポーズの指輪が入っている。渡すタイミングが分らず、ここ一カ月出してはしまいを繰り返して、ずっと先の記念日まで出番が分らない。

「欠航になったらさ」

見せたいものがあるんだけど、と僕は言おうとした。しかし車はそれより先に、フェリー付き場に着いてしまった。狭い島は、車での話も短くなる。

係の人が「時化で船が向こうを出れてない」と教えてくれた。

「照、さつき欠航になったら、とか言ってなかった？」

赤い傘の中で、彼女は僕の目を覗きこんだ。

「遍音に、見せたいものがあるんだ」

彼女が許すなら、この狭い島に住むことになる。

雨も風も、咲き始めた桜を吹き飛ばし続けていた。

天の風よ、雲を飛ばして帰り路を閉じてくれ

天女の姿をもう少し見ていたいのだ

天津風 雲の通ひ路 吹きとちよ

をとめの姿 しばしとどめむ

僧正遍昭(十二)

## 第十一話 最前線

息が切れる。ヒールで走るのは辛い。

ドレスが足にまとわりつく。紫のショールが絡まるので捨てた。

あの信号の左が現場の筈。人だかりが見えた。とにかく全力で走った。

自分は機動隊員だ、と文近さんは言った。

「ガタイが良いね！」と褒めたら、分厚い胸や腕を触らせてくれた。そこでキヤーキヤー言っつけば受けがいい。六本木のキャバクラは昔自衛隊が近くにあったから、筋肉マツチヨのあしらい方は嬢たちの間で伝承されている。でも文近さんは筋肉を褒めても自慢しなかった。ナルシストの為の筋肉じゃないから？ と尋ねたら、表情が柔らかくなり、そして私たちは仲良くなった。侑右奈という源氏名でやってるけど、本名の侑右子で呼んでいいと言ったのに、文近さんは必ず侑右奈さんと私を呼ぶ。真面目な人なのかな。彼の考えていることが分らない。

ベッドで抱かれて分ったのは、彼は律儀な人ってこと。私は筋肉フェチでもなんでもないのだが、この腕にならずと包まれていたいと思った。

でも一回寝ると客は店に来なくなる。そのジnkクスは彼も例外ではなかった。そりやそりやね、私たちは色恋の商売。本気で好きになっちゃ負けなのに。

ずっとお店で彼を待っている。笑顔はつくれるし、お酒もつくれるけれど、ただそれだけ。筋トレするけど何にも使わない筋肉みたい。



ある金曜日、お客さんがスマホを見て「やべえ、生中継してる」って言った。私は中継を見てびっくりした。このビルのすぐ近くだ。立てこもり犯がいるらしい。

「ライフル持ってるって」

私は画面を見て固まった。「機動隊がこれから突入します！」と言われて映った中に、重そうな銀の盾を構えている文近さんがいたからだ。

この筋肉は使うための筋肉なんだ、と文近さんは笑っていた。使うって？ 重たい盾を構えて、突撃すること？ 筋肉でライフルは防げる？

「機動隊員が撃たれました！」とレポーターが叫んだ。

私は思わず席を立ち、ドレスの裾をからげて走り出した。

息が切れる。ヒールで走るのは辛い。脱いだ。赤信号。救急車のランプ。撃たれた人が文近さんかどうか分らない。私が行っても何にもならない。

野次馬は現場の迷惑。そんなの分ってる。でも走った。

私が忘れられるのは構わない

でも大切なあなたの命が、無駄に散るのは許せないのです

忘らるる 身をば思はず 誓ひてし

人の命の 惜しくもあるかな

右近 (三八)

## 第十二話 二百年の孤独

私は人工知能<sup>A</sup>である。

私は軍人である。

つまり私は、軍事AIである。

任務は狙撃手<sup>スナイパー</sup>であり、私は天文学的距離の狙撃の為につくられた。

人類が二つの陣営に別れて、二つの星の間で戦争を始めて、既に千五百年が経過した。

二つの星の間には中立地帯があり、敵の部隊が通る時は武装を解除する。そこを狙撃する任務である。感知されないほどの天文学的距離からだ。

大艦隊の移動には片道四百年かかる。恒星の重力を利用したスイング・バイ航法であればそれが二百年に縮まる。二千年に一度、三つの星の重力バランスがそのスイング・バイに都合のいい配置になる。重力を使う移動である限り古典力学で計算可能で、正確な位置は予言できる。

敵艦隊が出発した。その情報を得て、私は狙撃位置に就くことになった。狙撃ポイントまで百年かけて航行し、それから質量弾を撃つ。弾丸は百年かかる長い軌道を経て、やってきた艦隊の横腹に当たる。この二百年かかる任務は人間には不可能だ。だから軍事AIの出番である。

私を構成する大部分は弾道計算機と、機体や狙撃銃の制御システムである。だが全体を統合する「人格」は、我が軍の軍人のものが使われている。その元人格が徳永とくながという人物の為、私はトクナガと呼ばれている。現場の不測の事態にアドリブで対応したり、言語によるコミュニケーションが可能なので、人間の人格をOSにしたAIは、軍事目的でよく使われた。

他の機械はどうか知らないが、私は人間の人格を移植されている為、「退屈」を覚えることがある。それは人間の自然な反応であることは理解しているし、軍人として訓練された私の元人格、徳永の厳しい自己規律によって、それを耐えるだけの精神力（根性、と彼は言った）は、私に埋め込み済みである。だが二百年の任務が孤独で退屈なのは事実だ。私は私の中の徳永の記憶を探り、映画のように上映して退屈を潰すことにした。

その中でもどうしても気になるのが、謙子のぶこさんの存在だった。

徳永の同期で、とある戦闘で義足になり戦闘員は勇退。のちに徳永の所属する基地に、通信兵として非正規で入った、サンドイッチ好きの快活な女の子。

徳永の記憶のどこを呼び出しても謙子さんは特別輝いていて、徳永が謙子さんを好きであることは明白だった。私には心臓がないが、謙子さんの記憶を再生する度にNo.2の弁の圧が上がる。それを抑えながら私は徳永の記憶を再生することが楽しみであった。

定期的に通信することで、私が生きていて作戦遂行中であることを本部に伝える。いつからか、向こうの通信の中に徳永のメッセージが忍ばせてあることに私は気づいた。

「ようもう一人の俺。俺と記憶が共有されてるんだってな。じゃあお前さんが気になって

ることはひとつだよな？ 『謙子さんとどうなったか？』だ。なんと俺、謙子さんに告白して、付き合うことになったぜ！ ヒヤッホウ！」

姿勢制御弁No. 2、No. 4、及びNo. 12の圧が3倍に上がりそうになり、私はそれを元の水準まで戻すのに3ミリ秒もかかってしまった。揺らぎ範囲だ。航行に支障はない。

それからの定期通信は、徳永のラブストーリー報告となった。飲みに行った、酔った勢いで手を繋いだがノーカウント、そしてついにキスしたこと。だがある日誤解があつて、二人は大喧嘩したらしい。徳永はそのことを愚痴り続けた。五回連続、愚痴であつた。

ここから通信不可能領域に入る。次に通信が出来るのは十五年後だ。

聞しくない、絶対零度の空間を眺める。壁の染みのような小さな点がそれぞれ恒星であり、その中の二つにしか人類は生きていない。そしてその点より小さな宇宙艦隊に向けて、私は百年後に当たる、もっと小さな弾を撃つ。

十五年後、徳永からの私信はなかった。軍を退役して、生きていることだけは後任の人が伝えてくれた。謙子さんとはどうなっただろう。別れたのだろうか？ こちらから知る手段はない。私には徳永の、十五年前までの記憶しかない。記憶から出てくる謙子さんは、いつも快活に笑っている。

出発から百年経った。

私は計画通り所定位置につき、所定の方向に向けて質量弾を斉射した。これはケプラーの面積二乗の法則に従い、百年後の目標地点へ二次曲線を描いて到達する。

私は眠りスリープに入る。着弾確認の少し前に起きる予定だ。

その時、光時差の関係で三十年遅れた業務通信がやって来た。徳永の計報であつた。九十六歳の大往生。喪主は、「奥様の謙子様」とあつた。ラブストーリーは、ハッピーエンドだったようだ。これで私は、百年の眠りにつくことができる。

起動が自動的になされ、私は自分の各部をチェックする。着弾の確認報告をすれば私は空間廃棄である。つまり何もなしで放置ということだ。二百年前の技術でつくられている為、自爆の必要もない。私は軍人であり、私はAIであるから、それは運命であり使命である。

「謙子さん」と、私は音のない真空で呟いた。

闇の中に、針の穴のような点が生まれる。

私は着弾を確認した。

哀れと言ってくれる人は、誰もいそうにない

このまま俺は虚しく死んでゆくのか

あはれとも いふべき人は 思ほえで

身のいたづらに なりぬべきかな

謙徳公（四五）

## 第二節 仲春

### 第十三話 カンニングペーパー

式島くんがその曲を「春の演奏会で弾きたい」って急に言い出して、指導者の立場である私は止めるべきだと直感した。

この難易度は中学生や高校生でも難しい。いわゆる天才クラスじゃないと無理で——と彼に滔々と説明しようとして、その前にまず、「どうしてこれを弾きたいの？」と尋ねた。

「小峰が来るから」

彼はぶつきらぼうに言った。

あ、そうか。指導者としてではなく、人生の先輩として私はピンと来た。

小峰さんは一年ほど前このピアノ教室に通い、あまりにも才能があったので、私が「もつといい先生に習った方がいい」と渡部先生の所に預けた子だ。髪が長くて端正な顔立ちで、ウチにいた頃はよく二人で一緒に帰ってた。

「好きなんですよ？」と喉まで出かかった言葉を私は飲み込んで、私は楽譜を持ってきて彼に見せた。式島くんは空で指を動かしはじめた。あ、ミスった。それは彼も気づき、もう一度トライする。八小節目でまた躓いた。

「出来るの？」と聞く代わりに、「弾きたい？」と私は聞いた。ピアノの指導者としては大したことない私だが、恋のアレコレは指導できるぜ（優秀かどうかは知らないが）。

スピード、正確性、フォルテの連続する力強さ、とてつもない跳躍。

「小峰さんは、初見で最後まで弾いたわよ」

彼にやる気を出させたかった。

「知ってる」

彼はあっさり答えた。

「だからオレも、躓いてもいいから、最後まで弾きたい」

何日も何日も居残った。楽譜を床に並べて、その中を歩いたりもした。私が音大時代にやっていたやり方で、裸足で曲の中を歩くと、その曲のことが分かる気がするのだ。彼もそれをやり、少しずつ曲を「理解」していった。ここは悲しい。ここは楽しい。

そして本番前日。

なんと彼は「楽譜なしで弾きたい」と言い出したのだ。

「無理でしょ」と喉まで出かかった言葉を引っ込め、私は式島くんに尋ねた。「どうして？」と。

彼はぶつきらぼうながら、まっすぐな調子で言った。

「小峰が来るから」

うん。そうだよ。君にこの曲を捧ぐ。私だってそう言われてみたい。

演奏会に来た小峰さんは大人びて見えた。おしやれして、薄化粧をしていたからかも知れない。渡部先生も一緒に来てらして、久しぶりの挨拶をした。

式島くんの演奏が始まった。第一小節も第八小節も間違えなかった。

カンニングペーパーは用意していない。

彼の旅は、最後まで辿りつけるだろうか。

大江山へ生野經由で野道に行くの

目指すは天橋立 まだ踏みもせず、カンペの文も見ず

大江山 いく野の道の 遠ければ

まだふみも見ず 天の橋立

小式部内侍 (六十)

#### 第十四話 伝説のプリマドンナ

そのサーカスには、伝統の芸「山鳥」がある。

山鳥の尾がものすごく長いことからその名がついた。美しい縞模様をついた十メートルほどの布を垂らし、それが一切地面につかないように様々なアクロバットを披露する芸だ。

まずはただ走り、尾が地面につかないことを見せる。飛んで跳ねてでんぐり返し。バレエのターンを何回やっても尾は綺麗に円を描く。その回転は音楽とともにどんどん速くなる。ここで一回目の拍手だ。自転車に乗り、投げられたボールを頭で受け止めたり、自転車で玉乗りする。勿論十メートルの尾は地面につかない。二回目の拍手。

三度目の拍手は、高い梯子を上り、空中ブランコに乗り、向こう側から来たパートナーに向かって飛んだ時。

その「山鳥」を披露するプリマドンナは、元バレリーナの麻利であった。麻利は小柄で美人で、何度回っても体軸が安定し、しかも華があった。きらびやかな衣装でスポットライトの中でポーズを取ると、誰もが息を呑むほど美しかった。

サーカスに常設場はない。地方を巡業して稼ぐのである。長くても滞在は一カ月で、旅がらすのように去ってゆくのが宿命だ。そんなこと分っていた筈なのに、長崎で麻利に男が出来てしまった。寝ても覚めても麻利は、「高稀、高稀」と彼の名を呼んだ。

山鳥の芸はスピードが勝負である。食事は制限し、筋肉の維持も必要だ。サーカス団長は長年の経験から、山鳥の稽古はとくに厳しかった。ある程度のカロリーを使い切り、筋肉にも刺激を与えて維持する必要がある。少しでもさばればたちまち山鳥の尾は地面をこすり、土をつけることになる。

麻利に男が出来て、団長は危険だと感じた。稽古をさぼって男に会いに行き、芸が駄目になった女を沢山見てきたからだ。それゆえ麻利の外出を禁じた。稽古が終わるのは深夜十二時。男に会いに行けば明日の稽古に間に合わない。それは麻利もしぶしぶ承知した。

だが恋する女が我慢できる筈がない。麻利は行動に出た。

「二つほど、縞を縮めてよ」

彼女は衣装係を抱き込んだのだ。山鳥の尾には横縞が入っており、その縞の二つ分を縮めて短くしてくれというのである。それならバレずに済み、練習もさばれ、時間が出来る。口止め料代わりに、麻利は美しい身体を一晚彼に自由にさせた。恋人と会う為なら、麻利

は何でもしたのだ。

团长はそれに気づかなかった。ひらひらと舞う山鳥の尾に騙されていた。

長崎での最終日。前の晩に团长は、全ての小道具を念入りにあらためた。痛んだり、破れたりしていないか確かめる為だ。そして山鳥の尾に、破れとほつれがあることに気づいた。二稿分の端切れは律儀にも衣装箱の底にあり、团长はもう一人いた衣装係を呼んで修繕させた。事情を何も知らない彼は、言いつけ通りもとの尾の長さに縫い直した。

その最終公演。麻利は回転の最中、尾が引きずったような感覚があった。気のせいかと思つて空中ブランコに向かう時にこっそり確認して、土がついているのを見た。だが本番中である。ごまかすしかあるまい。

空中ブランコの相手がこつちを見る。

行くしかない。麻利は自慢の笑顔を客に見せ、自慢のスピードで彼方へ飛んだ。

だがわずかに足りず、山鳥の尾が絡まり落ちた。

プリマドンナを失い、そのサーカス団は解散した。

彼女の美しさと、無残な最期だけが語り草になっている。

山鳥の尾のような、垂れた長い尾のような長い夜を

ずっと一人で眠るのだろうか？

あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の

ながながし夜を ひとりかも寝む

柿本人麻呂(三)

## 第十五話 女将さん女将さん

自分の四股名は源太でござす。

ペーペーの序二段ゆえ、本名の「源太」しか名乗れない。幕下にながれば、本格的に四股名がつき「力士」になれるのでござす。田舎の大きな川の名をとって最上川と名乗りたいのでござす。序の口、序二段、三段目、その上でやつと幕下。その上の十両、前頭でまだテレビに映る最弱クラス。さらなる上の小結、関脇、大関、横綱なんて天上人でござす。朝稽古で先輩たちに転がされ、昼稽古で張り倒され、夜稽古で土まみれ。ちゃんこを

作り、付き人をし、相撲道のすの字も見えないのでごわす。

辛い時はトイレに籠って一人になる。窓から隣の相撲部屋の一杯転がされるのを見て、励みにするのでごわす。そして実はもうひとつ……隣の女将さんが、ふんどしを干している様に遭遇することがあるのでごわす。

女将さんといっても年の頃は二十歳、そんなうら若き乙女が、むくつけき力士共のふんどしを洗い、干し、……ああ、着物の衿から覗く首筋や後れ毛、ちらりと見えるふくらはぎが、たまらんでごわす。もう一度言う。たまらんでごわす。名を七重ななえさんという。美しい名でごわす。嗚呼、女将さん女将さん。

なんとかしてその女将さんと親しくなれないのかと、隣部屋の同期まさはる之春と友達になり、「之春……之春……」と白々しく訪ねると……なんとなんと、女将さんがふんどしを干しに来たではないか！

「あ、こ、こんにちわ」

「どうも」

「隣部屋の源太でごわす。同期の之春に会いに」

「ああ、どうぞ。寄ってって下さいな」

「……ふんどし、毎日洗うのは大変でごわすね」

「冬に比べれば、春は暖かくて楽なものよ」

嗚呼、今日は麗らかな春の日。うぐいすも鳴いていて暖かく、我が世の春でごわす！

「オイ源太」

と、のっそい男がやって来た。

「ウチの女将さんと話がしたければ、裏口でこそそとやってないで、正面玄関から来い」

出たな岩波いわなみ。この男はいけすかない奴で、しかし同期最強なのだから文句も言えない。

幕下まで最速と噂されている男でごわす。

「それとも何か？ 今俺を倒してから女将さんと話すか？」

岩波は挑発的に両手をついた。

「二丁、胸を借りるでごわす」

自分は春の陽気で浮かれていたのごわす。否、女将さんと交わした言葉で、宙に浮いていたのでごわす。四よつに組んだ岩波の、岩のような重さでようやく我に帰った時は、すでに遅し。その一瞬あと、自分は急角度で地面に落とされたのごわす。先輩たちは、自分をかばった優しい角度だったことに、初めて気づいたのでごわす。



女将さんはまっすぐ見てくれなくて、みじめな自分は、「一番、ごつつあんでした」と泥まみれの頭を下げ、ちゃんこの支度に戻るしかなく。

岩波をどうやったら攻略できるか？ 次の春場所で当たるのは確実にござわす。もし岩波を倒せば……女将さんと堂々と話せるのかも知れぬのでござわす。嗚呼、女将さん女将さん。

ついに岩波と、国技館の春場所でまみえる日が来たでござわす。自分が勝てば三段目昇進、奴が勝てば幕下へ。女将さんが見に来ている。嗚呼、女将さん女将さん。

立ち合いのぶつかりは相変わらず岩のようで、目から涙が出たでござわす。下手を外し、上手を取ったはいいけど、重戦車みたいに間合いを潰しに来る。ここで自分は、用意した奥の手を出したのでござわす！ 岩波の突進を上からがぶり、下から両手を極めあげる。プロレスで言う所のフルネルソンホールド、相撲の決まり手八十二手のひとつ、必殺「五輪砕き」！

——だが行司から勝ち名乗りが上がらない。あれ？ これは確か危険技だから決まった瞬間に勝ちでは？ 戸惑う自分の下から岩波は両手を外し、そのまま岩のように硬い諸手突き。肺が潰れるかと思っただでござわす。

かつて「五輪砕き」は極まった瞬間勝ち名乗りを上げられたが、現在では決まり手扱いされていないのだと、先輩は笑いながら教えてくれたのでござわす。

今日もトイレから女将さんのふんどし干しが見えるでござわす。

女将さんは自分の目線に気づいて、こつちを見て叫んだのでござわす。

「今度は、正面からぶつかってきなさい」

そんなこと出来たら、最初からやっつてるでござわす。

相撲道、高くて高すぎる峰でござわす。

烈風岩を打つ だが砕け散る波のように

己だけが砕け散る

風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ

砕けてものを 思ふころかな

みなちのしげゆき  
源 重之（四八）

第十六話 紫いろの朝

源奈がドアを閉める音はいつも大きくて、寝てる俺はいつもびっくりして起こされる。

「死んでたら嫌だなんて。へへへ」

源奈は悪びれもせずいつも笑う。

やれやれと思いつながら、俺は車を発進させる。

彼女はデリバリーヘルスの風俗嬢。俺は彼女をお客さんの家まで届けるドライバーだ。

源奈は人気嬢で、大抵俺は朝まで付き合わされる。俺が運転している間は彼女は寝ていて、彼女が働いている間は俺が寝ている。それを一晚のうちに五、六回やれば仕事はおしまい。でも今夜はフル回転で、夜明けの光が差ししてきた今、八軒目であった。

「飴ちゃんいる？」

源奈は俺にカラフルな飴を、後部座席から差し出した。

「イチゴとブドウとどっち？」

「ブドウ」

包みから出して俺の左手に乗せてくれる。徹夜明けの紫の景色が、ブドウ味になった。

源奈がストレスを受けているとき、飴を欲しがるのを俺は知っている。

嬢を何人か乗せて点々と回ることもよくあるが、女が集まると大抵客の悪口で盛り上がる。やれ痛いだの下手糞だの、本番されそうになって断るの大変だったとか、そのまましちゃったけど金くれなかったとか。そんな中に混じっても、源奈はいつも黙って飴を舐めるだけで、女たちの会話には加わらなかった。

「何故一緒に悪口を言わないの？」

と聞いても黙っていて、

「昌さんが愚痴を聞かされ続けるの、可哀そうだなと思って」

とぼつりと答えたことがある。

今夜のストレスは沢山あったのだろう。バッグからは沢山の飴が出てきた。カラフルで毒々しい色をした飴たちだった。長くやる仕事じゃない。女は次々に入れ替わる。だからどんな女がいたか殆ど覚えていないが、源奈の飴は特に覚えている。

この金曜も、源奈はフル回転だった。毎度俺は待ってる間にウトウトして、源奈は乱暴にドアを閉めて起こす。俺はムツとして源奈はへへへと笑う。俺はそんな関係を楽しんで

いたのかも知れない。

夜中の三時ごろだったろうか、あるマンションの前につけた時、源奈は終わってもいないのに、「飴ちゃんいる？」と俺に飴を出してきた。

「この客、行きたくないの？」

「前なんかあった訳じゃないけど……写真とか、動画とか、撮られたかも知れない」

「なんかあったらケータイ鳴らして。踏み込むから」

「寝ないでね」

「507……507」

五階の端から数えて七番目の部屋。あそこか。俺は缶コーヒーを買ってきて、寝ずの番をする。電気が消えた。間違いなくあの部屋だ。あそこで服を脱いで、あんなことやこんなことをするんだな。

しばらく何もなく、俺はまたウトウトし始めたが、スマホのバイブで跳ね起きた。

507の部屋では、何度もフラッシュが焚かれている。

「ハメ撮り禁止だっつってんだろうが！」

「飴ちゃんいる？」

騒動をまとめ終えて、俺たちは車に乗り込み次へ向かう。彼女はそんな俺にまた飴を渡して来た。

「今日、もう上がれよ。具合悪くなったって店長に言っとくし、危うく警察沙汰だし」

「……仕事だし、大丈夫」

そこから三軒、源奈は仕事をこなして、その度にドアをうるさく開け閉めして、俺が飛び起きるのを見て笑った。

「今日で最後なんだ」

そう言って彼女は、後部座席にかばんの飴を全部ぶちまけた。

淡路島に通う千鳥の鳴く声で目を覚まされ

須磨の関守は幾夜も眠れなかった

淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に

幾夜寝ざめぬ 須磨の関守

源兼昌（七八）

第十七話 ヘッドライト

車のヘッドライトで、俺は作業を続けた。

真夜中、新月の山奥。目撃者はいまい。獣が掘り起こして見つかることもあるから、土中深く埋めねばならない。掘って掘って、それから埋める。大変な重労働だ。

尊みこと。俺の恋人。殺すつもりはなかった。刃物を散らかせたらビビると思ったんだ。「やんなさいよ直行」なおゆきって、何故虚勢を張ったんだ。引っ込みがなくなつたじゃないか。人の争いや戦争って、そうやって起こるんだろうか。一方が自分を大きく見せようとして、もう一方も自分を大きく見せようとして。孔雀の羽の方が、まだ大きさだけで勝ち負けが決まる分平和だろ。だから結果的に孔雀は絶滅せずに生き残った。ハタタリで殺し合う民族は、いつか絶滅して、逆に地球は平和になるかも知れないな。

愛してるよ尊。愛してるから、猪にお前の体を荒らさせない。だから深く、深く掘る。愛してるよ尊。ここに山桜があるだろう？ 桜の下には死体が埋まっている、だから美しく咲くというではないか。俺はお前を見失ったりしない。毎年この山桜が咲く時期は、お前を見失わずに会いに来るよ。

ヘッドライトが俺の身体を、山桜を照らしていた。

なんでこんなことになつたんだろうな。

絶滅すべきじゃないか？

尊を埋め終えた俺は、その山桜の枝で首を吊った。

山桜よ、一緒に愛おしいと思ってくれ

お前より他に俺を理解してくれる者はいない

もろともに あはれと思へ 山桜やまざくら

花よりほかに 知る人もなし 前大僧正行尊さきのだそうじやうぎやうぞん（六六）

第十八話 吹雪の記憶

道翔みちとの事故から三年が経ち、いまだ彼は記憶喪失のままだ。体の機能は戻った。認知機能も問題ない。ただ、事故以前の記憶が彼にない。

忘れもしない北海道、白旗山<sup>しらはたやま</sup>競技場。アルペンスキーの滑降<sup>ダウンスリ</sup>競技は最高時速百四十キロ出ると、頭では分っていた。だが道翔が実際にその速度で転がり、粉雪が円になり螺旋になると、私は叫ぶしかなかった。緑の安全ネットが彼の命を救ったものの、あれがなかったらゴールまで転がる破目だったらしい。左腕は折れ、右脚も折れた。そしてアイスバーンで頭を強打した。

目覚めた時それまでの記憶は一切なくて、事故の記憶どころか、自分がスキーヤーであることも、私の婚約者であることも忘れていた。

私はしばらく「入花<sup>いゝか</sup>」と自分の名前を名札につけて、入院先の彼の元へ通った。顔を合わせるたびに「ごめん、誰だっけ」と申し訳なさそうに聞く彼に、自己紹介する手間を省く為だ。

リハビリをしないと、競技どころか日常生活すらままならなくなる。リハビリ病棟に移ってからの本番だった。毎日毎日彼は悲鳴を上げていた。「こんな苦痛人生で味わったことねえよ！ って言っても人生覚えてないけど！」って冗談を言うまで随分かかった。

私たちは結婚したら暮らそうと言っていた、中古の一軒家に住んでいる。早目の新婚生活ですと御両親には説明した。彼の記憶が仮に戻らなくても、私は彼と結婚したいし、式も挙げたい。このままおだやかに暮らしていけたら、それでいいのかも知れない。道翔には私と出会った時の記憶も、私と旅行した時の記憶も、日々の冗談の記憶も、素敵な言葉の記憶もない。けれど彼ともう一度恋をしようと思って、三年間積み上げてきたのだ。彼は知り合いの所でトラックドライバーをやっていて、もうこのまま記憶が戻らなくてもいいのかも、ふと思うことがある。

ウチの小さな庭には桜が植わってて、それを私たちが気に入って決めたようなものだ。桜餅つくろうぜと彼は言ったが、それも覚えていないらしい。

はらはらと桜が散る。彼はふと立ち、桜の下に歩いて行った。

「どうしたの？」

彼は桜の木の下で直立不動になり、上を見た。花びらが二枚、三枚、彼の顔に落ちる。

「桜が珍しいの？ もう三回目でしょ？ この桜を見るのは」

そこに猛烈な突風が吹いた。

花びらがざーっと舞ったそのとき、私は信じられないものを見た。

桜吹雪の中で、彼は直滑降のポーズを取っていたのだ。

「え？……え？……」

また風が吹く。さっきとは異なる方向に桜吹雪が舞う。彼は向きを変えて、風の方向に直滑降をする。

私はサンダルが脱げるのもいとわず、彼の元へ走った。地面に落ちた花びらを拾い上げ、彼の上から落とす。だめだ。これじゃ普通の雪がはらはらと舞っているだけだ。

花びらを土ごとつかんで、彼に向かって叩きつけた。

百四十キロ。百四十キロで叩きつけるんだ。出来るわけがない。でもやる。

彼の表情が変わり、私に向かって直滑降のポーズを取った。

周りを見渡す。洗濯もの。地面に捨てて、物干し竿を二本彼に持たせる。そのステイックを彼は地面に何度も何度も突き立てる。

「あー！ あー！ あー！」

彼は頭を抱え、私は彼を抱きしめた。辛い記憶だろうか。それとも彼にとって良い記憶だろうか？ 彼は最初のデートの時、いかにスキーが楽しくて素晴らしいか、延々語っていた。こわい。それを制御する。だから楽しいと。

何度も突風が吹き、私たちは百四十キロの猛吹雪の中にいた。

彼が競技に復帰するのは、次の次の冬のことである。

嵐が桜を誘って、庭に雪が降るようだ

庭に降るのではなく、本当は私の時間に降っているのだ

花さそふ 嵐の庭の 雪ならで

ふりゆくものは 我が身なりけり

入道にゅうどう前まへ太政大臣たいていしやうだいじん（九六）

## 第十九話 静かな春

音もなく、桜の花びらが落ち続けていた。

その下で男女が激しく口論していた。

よくある口論と違ったのは、二人とも手話で喧嘩していたことである。激しい表情と激しい手話で、二人は涙を流して口論し続けた。

音もなく、桜の花びらが落ち続けていた。

「認めるわよ！ 私はあんたのことを認めるわよ！」  
我慢しきれず女の方が声を荒げた。男は言葉にならないうめき声をあげて、再び激しい手話を試みた。

音もなく、桜の花びらが落ち続けていた。

その後仲直りして抱き合うまで、音はひとつもしなかった。

こんなに穏やかな光の春の日に

どうして桜だけが、静かにせず散ってゆくのだろう

久かたの 光のどけき 春の日に

静心なく 花の散るらむ

紀友則 (三三三)

## 第二十話 国境のパン屋さん

川があり、ふたつの国を隔てる国境となっていた。

川には橋があり、かつて人々は、こちらとあちらを自由に行き来していた。

だが最近、両岸に国境警備隊なる兵士たちが、銃を持って立つことになった。ふたつの国が緊張関係に入ったからである。

あちら側には黒い森が広がり、こちら側の橋のたもとは「スーニヤのパン屋」と呼ばれる名物店があった。元々は頑固親父の「イニャトラフのパン屋」だったのだが、今や美しい看板娘の名でしか呼ばれていない。

このパン屋は、橋のこちら側だろうがあちら側だろうが、等しくパンを売った。メニューにはふたつの国の言葉が書いてあり、ふたつの国の通貨が使え、なんなら片言の言葉も通じる。頑固親父イニャトラフの方針だったし、それはスーニヤも賛成だった。

カンカンカンカン。

「午後のパンが焼けたよー！」

スーニヤは軒先のフライパンを叩き、人々に宣言する。フライパンを叩くまでもなく、うまそうな小麦の焼ける匂いに、すでにパン屋の前はふたつの国の兵士たちでごった返していた。たとえ国境警備隊だろうと、このパン屋の前ではパンを買う人である。

午後のパンが残り三つになったとき、向こうの国の兵士がやって来て銀貨を二枚出した。

「全部くれ」

「あいよ！ これで今日の分は売り切れだし、銀貨一枚にまけとくよ！」

「いや、いい。お釣りもいらぬ」

「どうして？」

「俺はここを離れるから、最後の思い出にパンを買うんだ」

「じゃ次来たときにお釣りを返すよ。このフライパンの裏に貼りつけとくね！」

兵士は最後に言った。

「もうすぐ戦争が起こる。荷物を畳んで逃げろ」

「戦争？ どことどこが？」

「この川を挟んだ、ふたつの国」

二週間後、戦争が始まった。

数日して、目の前の橋が爆発で落ちた。店は耐えたが、父のイニヤトラフが臆病風に吹かれた。

「スーニヤ、店を畳んで今夜逃げよう」

「『腹減った人みんなに、パンをたらふく食わせる』って父の信念はどうするの？」

「橋が落とされたんだぞ？ もうすぐこの辺も焼け野原になる」

「私はパンを焼くわよ。ひと切れでも欲しいという人がいる限り」

あちら側の黒い森の向こうで、銃撃戦が始まった音が聞こえた。

夜までかかってイニヤトラフは荷造りを終えた。銃撃音はすぐそこだった。

「パーバ、伏せて！ 流れ弾が来る！」

「これだけは縛らせてくれ！」

窓ガラスが割れた。イニヤトラフはうずくまった。腹から血が出ていた。

「パーバ！」

スーニヤは父を担いで家を出た。病院。どれくらいかかるだろう。

畑に敵国の兵士が立っていた。ずぶ濡れで、顔には見覚えがあった。

「戦争だと教えたろ。まだ逃げてなかったのか」

「戦争でもパンは必要でしょう？ ……あなた、お釣りの人ね？」

「心配で、川を渡ってきたんだ」

彼は父を担ぎ、病院まで運んでくれた。父の命は助かりしばらく入院となった。



だが帰り道、事情を知らないこちらの国の兵士が恩人を撃った。

「パー。パを助けてくれたのに！」

スーニヤが両手を広げて立ち塞がり、銃を撃った兵士たちは消えた。

「太腿から血が！」

「病院は勘弁してくれ。また撃たれることになる」

「じゃあ私の店に！」

スーニヤはイニヤトラフが棚の奥にウオツカを隠していることを知っていた。それで傷口を消毒し、焼いたナイフで抉り、鉛玉を出した。包帯できつく縛り、あとは彼の回復力に賭けた。

二日後、スーニヤの店のパンの匂いで、兵士は目を覚ました。

「なんとこの幸せな朝だ」と彼は言った。

「パー。パの命を助けてくれてありがとう。名前も聞いてなかった」

「トクイル」

「トクイル。……異国の響きね」

トクイルは小さなパンをかじった。ぱり、と皮が割れ、帰ってきたと彼は思った。

傷が回復するまで、トクイルはパン焼きを手伝うことになった。

「トクイル、才能あるね。国に帰って戦争が終わったら、二号店出せるよ」

「スーニヤの味は目を瞑っても分る」

戦火の中でもスーニヤは店を開け続け、トクイルは手伝った。

こちらの兵士も向こうの兵士も、憎み合っているわけではない。そんなこと、このパン屋の前では当たり前なのに。

「明日、隊に帰る」

トクイルは軍服に着替えて言った。

「新生活生活みたいで、楽しかったよ」

トクイルは笑う。

「女手一つで心配だ」

「大丈夫。パー。パが退院するし」

「本当は、君が好きだから心配で、隊を抜けて来たんだ」

「えっ」

「君に会いたくて、いつもパンを買いに来てた」

トクイルはそう言ってスーニヤに口づけした。その夜二人は、初めてベッドを共にした。それから何度のライラックの季節が過ぎただろう。

店の前の橋は三回落とされ、三回架け直され、また落とされた。だがスーニヤの焼くパンの為に、川を泳いで買いに来る兵士もいる。スーニヤとイニヤトラフは、彼らの為にパンを焼き続けた。

カンカンカンカン。

「午後のパンが焼けたよー！」

パンが焼ける匂いがすると、銃撃の音が止む。この辺りの常識だ。

トクイルはまだこの店に現れない。

スーニヤの叩くフライパンの裏には、銀貨が一枚貼りついたままだ。

川の瀬の流れは早く、岩にぶつかり滝川は二つに割れてしまった

だがいつか末には、逢いたい

瀬を早み 岩にせかるる 滝川の

われても末に 逢はんとぞ思ふ

崇徳院（七七）

### 第三節 晩春

#### 第二十一話 耳の赤い店員さん

忠は売れない放送作家である。ノートPC一台持って、色々なカフェで企画書や台本を書く遊牧民スタイルだ。近所のカフェの電源席はことごとく忠の頭の中に入っている。

中でも駅北口のファミレスは深夜まで開いてて、ドリンクバー飲み放題で全席電源付き、お茶の種類が豊富なことで忠のお気に入りである。しかしそこに通うのはその為ではなく、

背の高い店員さんの為だった。

深夜のすさんだ時間帯にいる、掃きだめのツルのよう。手足がすらりと長く、まるでモデルさんのようだった。白いブラウスに黒いパンツ、お団子ヘアに赤いヘアゴムが似合っている。胸が小さい所も忠好みだ。彼女を盗み見る為だけに、忠はその店に通い続けた。

ある日、たちの悪いおばちゃん客に彼女は絡まれていた。居酒屋でもないのにハイボールやサワーを大量に頼み、下品な話ばかりしていた。おばちゃんのセックス話など聞きたくねえわ。やれつまみがないだの、やれグラスを下げただの、お姉さん何歳だの。彼女が引っ込み、話し相手のなくなつたおばちゃんは忠にまで絡んで来て、そのパソコンは何とかが難しくてよく分らんとか、呂律の回らない話をしていた。だが彼女らに感謝せざるを得まい。店員さんの名前が、琴岑<sup>ことね</sup>さんという可愛らしい名前であることが分かったからだ。「岑は嶺の昔の字です、山かんむりに今」の説明で漢字まで分った。いい名前だ。

「さつきめちやめちや絡まれてましたね」

会計の時に、忠は琴岑さんに話しかけた。三か月通つて初めて交わした会話であった。

「すいません、うるさかったですか、申し訳ありません」

「いやいやお姉さんのせいじゃないし」

自分が迷惑したことよりもそのことを謝る琴岑さんに、忠は心を射抜かれてしまった。

なんとという丁寧な人なんだろう。

もうひとつ忠がときめいたのは、琴岑さんの耳が真っ赤になったことだった。客に話しかけられ慣れていないのか、そのうぶな所も素敵だった。

彼女はいつもメニューを整えたり机を拭いたり、常に働いていて美しかった。働く女は美しい。誰も見てなくても、俺は見てますよ。彼女に何か持ってきて欲しくて、ポテトやパフェやらをつい頼んでしまう。しかし三回に二回は小太りのおばちゃん店員であった。ところがこの三か月、彼女が店に来なくなった。おばちゃん店員に「琴岑さん辞めたんですか」と聞く訳にも行かず、忠はそのファミレスに行かなくなった。

痩せてえな。忠はだぶついた腹を見て思った。彼女の売り上げに貢献するために食べ過ぎたと思う。走るしかねえか。忠の生活は朝型になった。ただこつこつと走るのは、彼の性格にあっていた。

ある日思い立ち、いつもと違うランニングコースにしよう、知らない住宅街に折れた。

もうすぐ沈む上弦の月が残り、春霞に朧月おぼろつきとなっていた。

ああ。ふと角を曲がろうと思うんじゃないか。忠は自分の気まぐれを後悔した。とあるマンションから帰る琴岑さんを見てしまったからだ。若い男が彼女を見送り、彼女は彼の腕に抱かれて熱烈なキスをしていた。

中年でたるんだ腹。いつまでもOKの出ない台本。夜明けに取り残された月が、まるで世の中から取り残されている自分に見えた。

その月を見る振りをして、忠は走った。

多分彼女は気づいていない。目が合ったとしても、俺が誰かは分らないだろう。

琴岑さんの耳は、興奮しているのか赤く染まっていた。

明け方のつれない別れ以来こっち

夜明け前ほど辛い時間はねえよ

有明ありあけの つれなく見えし 別れより

暁あかつきばかり 憂うれきものはなし

壬生忠岑みぶのただみね(三十)

## 第二十二話 髪を切る

私の自慢は黒髪なの。ヒロインみたいな黒髪ストレートで、キューティクルで輝くの。それが私だと、勝手に思ってたの。

好きになった堀井先輩が、「黒髪ロングがタイプ」って言って、私は心の中で飛び上がったの。他には？ 他には？ と聞きだして、ふわりとしたスカートだとか、食べ物を残さないとか、言葉遣いとか。私は努力して、全部彼好みに変身したの。

だから「沙也河さやか、飲みに行こう」って誘われて有頂天。この場には沢山の黒髪ストレートがいて、堀井先輩は全部を守って彼に抱かれた。幸せだった。

だけど私はすぐに不安になったの。職場には沢山の黒髪ストレートがいて、堀井先輩はとてもモテるから。

彼の為にメイクを変え、服も持ち物も趣味も変え、仕草も言い方も、人生観まで変えたの。女は女優よ。演じるの、彼の最高の女を。

ある朝ベッドで起きて、天井の鏡に写った裸の私達を見たの。私の長い黒髪は二人の体に、腕に絡まり、タコの触手みたいになってて。

私は誰だっけ？

私は服なんだっけ？ 私はメイクなんだっけ？ 私はスカートなんだっけ？

私は女体なんだっけ？

私は、黒髪なんだっけ？

思い余った私は、その場で髪の毛を全部切ったの。

起きた堀井先輩は、「坊主がいる」と驚いてさっさと先に帰ってしまったって、私は私だったものを、しばらく眺めるしかなかったの。

女が髪を切ると、失恋した証拠とか昔は言った。でも私の気分としては「脱皮」の方が近いかも知れない。殻を脱ぎ捨てた感じ。なぜ「殻」かって？ 私を守ってくれてたんじゃないかな。傷つかないようにって。

私はまだ振られたことがない。殻が振られただけ。殻でしか私は恋愛をしていなかったの。中身がいいってどういうことか、私はまだ全然分らない。マッチングアプリで出会った新しい彼氏は、毎日手厳しいことを言ってくる。現実には痛い。

長い黒髪が乱れて絡むほどの今朝

あなたは長くここにはいないんでしょう？

長からむ 心も知らず 黒髪の

乱れて今朝は ものをこそ思へ

待賢門院堀河（八十）

## 第二十三話 玉千切る

世界的ファッションデザイナー、我孫子甲子雄のKINEOブランド。そのスタイリッシュな服たちは、式子の詰まらない日常に一撃の光を与えた。

写真の載っているファッション雑誌は全部切り抜いた。KINEOの直営店にある服は、レイアウトから値段まで全部把握した。バイトの金を積んで、ようやくKINEOのスカートを履けた時、下から突風が吹いたと思った。

服飾専門学校に通い、アパレルでバイトをし、KINEOに就職が決まったときは、崖

から飛び降りてもいいと思った。

我孫子が線を引くところを、色を塗るところをライブで見れる。飢えた獣が松坂牛の解体現場にいるようなものだ。式子は狂ったように凝視し、チーフの重親しげちかさんからキモイと注意された。我孫子は「熱心な証拠」と笑った。我孫子さんいい人。

春のスーパーコレクションの準備を慌たたくやっっているうちに、もう明日が本番となつてしまった。モデルたちの試着フィッティングも全て終わり、服を出す順番オーダーも暗記し、最後のアイロン掛けを誰もいないオフィスでやっていた。

トルソー（胴体だけのマネキン）に掛かった、明日のメインのドレス。怪しく光る紫のグラデーションと複雑なレイヤー構造は、見ているだけでため息が出る。

窓は少し開いていて、暖かな空気がオフィスに吹いた、その深夜二時。

式子はその服を着たくなった。次の発表の頂点の頂点、式子が憧れ続けた世界の最新作。思わず黒真珠のネックレスを取り、首に掛けた。

服とは所詮は糸を編んで裁断し、縫い合わせたものに過ぎない。しかし何故こんなにも人の心を狂わせるのか。式子は全裸になり、自動人形のように紫のドレスを着始めた。

いつから私は我孫子を愛してしまったのだろうか？

熱い。体が熱い。生ぬるく温かい空気よりも、熱い。熱い。

なぜそこでなく、ここに線を引くのか。なぜこのラインではなくそのラインに裁断するのか。式子はそのラインに沿って自分の指を這わせた。それが我孫子の愛撫のように感じられ、式子は思わず吐息を漏らした。複雑なパーツ組みのすべてに指を沿わせ、その度に声をあげた。どんどん指の動きは速くなる。全パーツを触り終え、式子は感極まって首の黒真珠を引き千切り、ドレスを引き裂いた。

「……私は何をやってるんだろう」

式子は全裸のまま床の黒真珠を拾い集めた。

朝まで時間はまだある。直さなければ。式子は全裸でミシンをかけた。

玉よ散れ、魂も散ってしまえ

このままでいると、黙っている心が弱ってしまいそう

玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば

忍ぶることの よわりもぞする

式子内親王しきしなひんのう（八九）

## 第二十四話 カナリア

「カナリア」と呼ばれる患者がいる。

本名は後藤君というらしいが、他の看護師は皆カナリアと呼ぶ。大人しく、小柄で、キノコ頭で青白い顔の青年だ。ひどい自閉症で他人が嫌い。俺は彼の声を聞いたことがない。いつも中庭の桜の下で本を読んでいる。この精神病棟で空が見える唯一の場所だから、その気持ちは分らなくもない。その何がカナリア？ 古参の看護師に尋ねたら、昔の事件を俺に教えてくれた。

昔院長室では立派な金翅鳥をつがいで飼っていたそうだ。ある日一羽が逃げ出し、院内は大パニック。なにせここは精神病棟、色んなタイプの患者さんがいる。大声で騒ぎだす者、シヨックで糞尿を垂れ流す者、泣き叫ぶ者。あらゆる感情が津波のように満ちた。

そのカナリアは中庭に逃げ、本を読んでいた後藤君の頭の上に止まったのだそうだ。それまでの彼の仇名は「石地蔵」。いつもじっとしていたからだ。カナリアは彼を石だと思ったのか、頭の上にはばらく止まっていて、そのうち糞をして飛び去った。「頭にカナリアを乗つけた男」「頭にカナリアの糞を浴びた男」縮めて「カナリア」が、その日から彼の二つ名になった。

ある日、そのカナリアイエローに髪を染めた、パニック症持ちの女性患者が新しく入ってきた。リストカットを繰り返し、拒食症と過食症を繰り返し、薬物にも手を出したらしい。この女性、羽鳥さんは、中庭の「カナリア」を見つけて遊び相手にしたかった。

とはいえ彼はじっと動かず本を読んでいる。「カナリアの隣にカナリア頭の女が座った」と古参の看護師達がざわついた。カナリアは人嫌いであるべく他人を避けたが、彼女だけは嫌がらなかった。膝の上に羽鳥さんが乗っても動じず、看護師達は「カナリアの膝にカナリアが乗った」とまたざわついた。

食事の場で、事件は起きた。

夕食は皆の好物の唐揚げで、テンションが皆上がっていた。羽鳥さんが唐揚げを食べようとしたりするとき、箸でつかみ損ねて落とし、唐揚げはテーブルを転がり、床に落ちた。そのまま廊下まで転がり、タイミングよく入って来た、他の患者さんの足に踏み潰されてしまったのだ。

羽鳥さんは突如奇声を上げ、パニックの発作が起きた。看護師たちは慌てて両脇から彼

女を抑えた。だが思いの外彼女の力は強く、四人がかりでも抑えつけられない。俺はスタンガン式警棒を準備する。出来れば使いたくないが、他に怪我人が出ても困る。

それを収めたのは、他でもないカナリアだった。彼は突然立ち上がると廊下まで歩き、潰れた唐揚げを拾ってむしゃむしゃと食べたのだ。呆気に取られる皆に、彼は一言告げた。

「唐揚げは、無駄になっていない」

羽鳥さんは力が抜けて、子供のよう泣きじゃくった。

俺はあとにも先にも、この時しかカナリアの声を聞いていない。彼らの中に人格があり、自分の頭で考え、哲学や感情があるのだと気づいたのはこの時が初めてだった。それまで俺は、口では患者さんと言いながら、彼らを人間の出来損ないかロボットのようにはしか見ていなかったことを、この一件で反省することになった。

人は激しい。人は優しい。その当たり前のことに、気づいた事件であった。

すっかり葉桜になった木の下で、カナリアが本を読み、隣に羽鳥さんが座っている。

「一緒に退院しようよ」と彼女は誘うが彼は何も答えない。

ホーホケキョと甲高く鶯が鳴いた。

カナリアの頭にまた糞が落ちて来そうになったのを、羽鳥さんが手の平で受け止めた。

人は愛おしい 人は恨めしい

世界のことを思えば思うほど、深く考えてしまう

人も惜し 人も恨めし あぢきなく

世を思ふ故に もの思ふ身は

後鳥羽院（九九）

## 第二十五話 大坂ダツシユ

「3、2、1、ゴー！」

ウチの中学の隣に、「大坂」と呼ばれるクツソ長くてクツソ急な坂がある。

駅を降りると海が見える。その踏切越しに長い一直線の下り坂、「大坂」があり、その向こうに海というロケーションが抜群だ。昔よくテレビがロケに来てたらしい。その大坂の一番下、海沿いにウチの中学がある。行きは海を見ながら坂道を下りればいいが、帰り



はこのクツソ長い坂を登り切らないと帰れない。そして運動部は当然、この坂をダッシュして鍛えることになる。

ほとんどの奴は、この坂を最後までダッシュ出来ない。途中二箇所水平な所があり、「鬼門」と呼ばれている。休みてエ、と思う心臓を鬼が掴むのだ。一年や二年は、だから西門のほうの「小坂」でまずダッシュ。わざわざ大坂ダッシュに挑むのは、一流かバカだけだ。オレは一流ではない。従ってバカである。何故そんな無謀なことをするのか。

丸本まるもとさんに、彼氏がいないと分ったからだ。

バレー部で一緒になった一年の時から、オレは丸本さんが好きだ。レギュラーの壁は厚い。だからせめて大坂チャレンジをクリアしたら、丸本さんに告白しようと思ったのだ。

一日目、第一鬼門で挫折。

二日目、同。

三日目、同。四日目、第二鬼門で挫折。五日目、第一鬼門で挫折に逆戻り。

冬にたった一人で始めたオレの大坂チャレンジは、気づいたら春になっていた。垂直の壁のような道が、熱を持ち始めている。

\* \* \*

出来もしない大坂ダッシュを一人で続けてるバカがいる、と聞いて、駅の踏切の後ろから覗いたら、同じバレー部の然田しかただった。無理でしょあいつの体力で。ウチの部での達成者は、キャプテンと副キャプだけじゃん。小坂で練習すればいいのに、何やってんの？

一週間後、まだやってるのを目撃してビビった。何でそんなに必死なんだよ。

それで、然田がちよつと気になったんだよね。

いつ見てもあいつ大坂に挑んで、そして負けてんの。でもあいつのマジな顔見たら、ちよつと何も言えなくなった。あいつあんな顔する奴だったんだ。

新学期が始まって、「然田がお前に告白しようとしてるらしいぜ」って聞いて、私は吹き出しそうになった。え、「しようとしてる」って何？ 彼は願掛けしてて、それが叶うまで告白しようとしならしい。それって……大坂ダッシュのこと？

今日も私は、踏切に隠れて彼を見ていた。湿気を含んだ海をバックに、バカみたいに彼は走り、バカみたいにへばっていた。

早くここまで来いよ。そしたら知らないふりして、ポカリでもおごってやるのに。

これがかの大坂の関

知る人も知らぬ人も、行ったり来たり別れたり

これやこの 行くも帰るも 別れては

知るも知らぬも 逢坂あふさかの関

蟬丸せみまる(十)

## 第二十六話 桜のような一カ月

「兼人かねと、お前、平梨ひらりのこと好きだろ？」

心臓が破裂するかと思った。そんな簡単にバレるのか？ バレないようにしているのに、無意識でバレバレなのだろうか？

俺の同期は四十人いる。初々しい入社を終え、学生気分を忘れ、スーツを毎日着、これから社会人に、ビジネスマンになるのである。だが会社には新入社員研修というものがあり、社の仕組みや業務の概要を、一カ月かけて座学する。五時半に終わればおじさんサラリーマンたちに混じって同期飲みだ。

同期のリーダー格神盛じんせいは、俺たちは世界征服するぜ、頂点を取るぜ、なんてブチ上げては飲む。東京の一年目の春。何をすればいいか、手持無沙汰な一カ月。

同期の中でも、俺はいつも平梨さんの隣にしようとしてたと思う。女子で一番年上で(留年したと言っていた)、たたずまいも大人びて、餓鬼みたいに騒ぐ同期たちとは一線を画していた。工場見学でも、現場実習でも、彼女と偶然同じ班になった振りをした。どうやったら四十人クラスみたいな場所から、二人きりになれるか分らなかった。

いつもの店の同期飲み会に、珍しく平梨さんが来た。

「平梨さんどうやって飲むのは初めてかも」

「そうかもね。気分変えたいのかな私」

酒も回ったのか、彼女は自分の恋愛の愚痴を始めた。やっぱ彼氏いるよなあ、これくらい美人だなあ、と俺は聞き役に徹していた。

でも彼女がまさか愛人をやっていると思わなくて、一気に酒が冷めた。女子大生の頃か

らサラリーマンと付き合っていて、奥さんと別れてくれないんだって。にも拘わらず、二人で旅行によく行くんだと。あまりにも大人過ぎて、俺は彼女がとても遠い存在に思えた。「行かなきゃいいじゃん」と俺は言っても、「だって好きだし」と平梨さんは笑った。

新人研修は四月で終わった。GWが明ければ四十人は散り散りになり、様々な部署で仮配属だ。勤務地もフロアも異なる同期は、二度と一堂に会することは無い。たった一カ月間のパステルカラーの記憶が、今は遠ざかってゆく。

その後、平梨さんが彼氏と別れたと聞いた。仕事が忙しくなってきた、俺が何者かになろうともがいていた頃だ。

バレないようにしてきたのに、顔に出てしまう  
あの人好きなんでしょと、人に言われる程

しのぶれど 色に出でにけり わが恋は  
ものや思ふと 人の問ふまで  
平兼盛(四十)

## 第二十七話 八重の花

病室の窓の外を眺めて、伊織はため息をついた。

中庭には大きな八重桜が植わって、今年も大ぶりの花を咲かせている。  
今年「も」、である。

長患いであった。子供の頃から付き合い合ってきた病気だ。もう自分は女の盛りを過ぎて、後半に入った気分だ。自分の人生とは何だったんだろう。ソメイヨシノはとくに散って緑の葉をつけている。その中で堂々と咲くこの大ぶりの八重の桜は、「遅咲きでも構わない」と言っているようで、慰みになる。

「御免なさい！」

中庭で、その八重桜を写真に収めようとして、周りが見えていなかった。若い男とぶつかってしまったのだ。伊織の抱えている歩行具を見て、男の方が謝った。

「ごめんなさい、お怪我はないですか！」

「あ……大丈夫です。わたしが八重桜を見てて、よそ見してたのが悪いんです」  
「いや、僕も八重桜を見てて……あ、じゃあ、桜のせいということだ」

伊織は笑った。好みのタイプの青年だ。もう十年若かったら、こんなイケメンと恋が出来たのだろうか。

「僕、えーっと、新しくここに来た看護師なんです！」

青年はぺこりと頭を下げ、伊織の顔をじつと見た。

「？ ……何か」

そういえば男の人の前に出るのに、化粧していないことが伊織は気になった。

「檜伊織さんですよ？ 随分長いこと入院と聞いてますが、お元気そうで」

「今日は桜のおかげで元気なのよ」

「想像よりお元気で良かったです。ではまた」

彼はぺこりと再び頭を下げて走って行った。

翌日、病室にその青年が看護師の恰好でやって来た。伊織は薄化粧をしていた。

「名前、言い忘れました。ひとつの勢いと書いて、「一勢」と言います」

「いい名前ね。苗字は？」

一勢は一瞬戸惑い、制服の名札をちらりと見てから言った。

「<sup>みやこ</sup>宮古。宮古一勢です」

「<sup>みやこ</sup>宮古さん」

「竹下さんのことを詳しく聞いて来いと言われまして、話を伺いに来ました」

「？ 引継ぎかしら」

伊織は病状のことを詳しく話した。

「……そんな長いこと入院されてるんですか。さぞお辛くて、寂しいでしょう」

「痛いのは慣れたけど……寂しいのは慣れないわね」

「大丈夫です！ 僕が話し相手になりますんで！ 人と話してないと、気持ちも塞ぎこんじゃいますからね！」

次の日も一勢は話をしに来た。

女子高時代のこと、大学時代のこと、働き始めたときのこと、子供時代のこと。取り留めもなく伊織は昔語りをした。なぜこんな話を。恥ずかしい。ちょっと好みのイケメンだからって話をしすぎじゃない？ 伊織はふと一勢の左胸を見て、気になった。

「今日は名札を忘れたの？」

一勢はさっと胸を隠した。その時、警備員と看護師たちがぞろぞろと入ってきた。

「あなたね。宮古さんの看護服盗んだの」

警備員が一勢の両脇を抱える。

「えっ？ 何？ 何？」

戸惑う伊織に、チーフの看護師が言った。

「不審者です。彼、ここの看護師じゃないです。ウチの看護服勝手に着てたんです」

「ええ？ ……そうなの？ 一勢くん」

拘束された一勢は笑った。

「服以外に盗まれたものはない筈です。確認してください。僕は泥棒じゃないんで」

「じゃあ何の為にこんなことを？」

一勢は堂々と答えた。

「実は僕、伊織さんに恋してるんです。どうしても会いたくて、看護師のふりをして近づいたんです」

「はあ？ 言い訳も大概にしなさい！」とチーフは怒鳴った。

警備室でこっそり絞られたという一勢は、ようやく病室に顔を出した。

「いやあ参ったなあ、色々。無罪の証明に時間かかっちゃった」

「『私を口説きに来た』のも嘘なんでしょ？ そんな感じの話し方じゃなかったもの」

「……」

コホンと咳払いし、一勢は自分の財布を開けた。

「正体を言います。僕は未来から来ました」

「……はい？」

「身分証明書が未来の日付になってるの、分ります？ それでさっき偽造だ偽造だってなつて大変でした」

『二〇四五年』と、免許証にある。

「僕は未来のあなたの息子なんです、母さん」

「……えええ？」

「二〇四〇年に、ある奇病が流行るんです。特效薬が八重桜から作られることが分ったんですが、未来の日本では、遅咲きの八重桜は不人気で、絶滅しかかってたんです。最後の

一株が死んで、タイムトラベルで過去から持ってこようと計画された。僕が来たのは、この八重桜の枝を折って、未来に持って行く為です」

「……えらく壮大な詐欺ストーリーね」

「信じてもらえなくていいです。僕は若い母さんと話せてよかった。美しく魅力的な女性で良かったです」

「それで最初に会った時、私の顔をじっと見てたの？」

「はい。あと」

「？」

「僕が生まれるってことは、母さんの病気は治るってことです。母さんはこの後退院して、沢山のイケメンと恋をします。遅咲きの人生、ご期待ください」

「遅咲きって」

「なにせ三人子供産みます。全部父親違うけど。母さんはいつも不安な僕らを『安心して』ってなだめてくれました。だから僕も母さんに『安心して』って言いに来たんです」

にわかには信じられない事だらけで、伊織は頭が混乱した。だがひとつだけ信じられることがある。一勢の顔は自分の好みである。この顔に似た男との子供であるとすれば、それは自分がしそうなことであると。

「お父さんには会いに行ったの？」

「勿論。でも二人はまだ出会ってなくて、これから出会います」

「どうやって？」

「それを言っちゃあネタバレでしょ。だいぶヒント出しちゃったけど。じゃ帰ります！」

一勢はぺこりと礼をして、はじめて会った時のように去って行った。

中庭の八重桜は、春の終わりの光の中で、静かに散り始めていた。

一番大ぶりだった枝には折った跡があり、一勢が未来に持って帰ったのだろう。――馬

鹿馬鹿しい。よくできた詐欺話でしょう？

「御免なさい！」

またもぶつかって派手に転がった男は……一勢。ではなくて、彼にとっても良く似た、鼻筋がキリリと通った男だった。

「ほんと御免なさい。怪我はないですか？ 桜に見とれてて、すみません」

思わず伊織は笑ってしまった。ネタバレってこういうことか。

「私もなので、これは桜のせいということだ」  
二人は笑った。

「あ、僕、新しくここに来た看護師なんです！」

いにしへの奈良の都の八重桜は

今日九重に咲き誇っていますよ

いにしへの 奈良の都の 八重桜

今日九重に 匂ひぬるかな

伊勢大輔（六一）

## 第二十八話 満開のあとに

今年の春は長雨が続き、桜も八重桜も桃も、全部散ってしまった。

花びらは地面にピンクの絨毯をつくったが、いずれそれも消えるだろう。春は終わってしまった。それは目の前の風景のことではなく、私の人生のことである。

アイドルグループ「さくら train」の右ウイング、小町として人気を博した。一瞬だけど天下を取ったと思う。東京ドームの割れるような歓声。私たちが歩いてゆくと道を開ける人々。私たちの一挙一動に合わせて動く無限のピンクのサイリウム。あの爆発的な一瞬だけのきらめきは、まさに頂点だった。

グループは解散して伝説となった。一人で女優をやり、下手だと叩かれた。歌に戻れ、いやそもそも小町は歌も下手と、醜い書き込み合いを見て病んだ。ダンスだって下手だし、もう体も動かない。目の下の隈を消したり出来物を消すのは大変だ。声優も、なんとか市の一日市長も、なんとか誘致大使もディナーショーもやった。舞台女優もやり、議員として出馬に担がれた。いよいよセクシーも目を瞑ってやり、「AV堕ち」と散々に叩かれた。ボクシングジムのサンドバッグと私と、どっちが叩かれてるだろう？

あの日秋葉原でスカウトされて二十年。私は一体何をやってきたんだろう。慰み者歴二十年の、ドームの光を一瞬見たことのある、今はただのぼろ雑巾。

電話が鳴り、今の彼氏、小野に呼び出された。

彼は地下アイドル時代からの筋金入りのファンで、私のステージに全て通ったという伝

説者である。私のダンスは完コピで「小町よりうまいファン」としてネットミームになる程だ。東京ドームでも、選挙演説でも、パチンコ屋のAVサイン会でも、彼はいつもフロント席にいた。そんなに好きなら、私で夢が見れるなら、そう思っただけは付き合うことにした。ポンコツの私を彼は丁寧にあえてくれて、それで私は初めて世の中で安心を覚えたように思う。

呼び出されたのは近くの公園で、温かい小雨の残る中、彼は桃色の花びらの絨毯の中に立っていた。彼は両膝で8ビートを刻む。小さく爪先を上げ、左手でリズムを取る。

私たちの解散曲「満開のあとで」。

もうすっかり忘れてしまった私のダンスを、彼は当時の私より、当時の彼よりも上手く踊った。最後のサビが終わり、両手を花を閉じるように閉じて曲は終わった。

「この後、君はなんて言ったか、覚えてるか？」

彼は私に尋ねた。

「その時の言葉がまだぼくの奥底に残ってて、だからぼくは一生君を追っかけるんだ」  
私は首を振った。色んな事があり過ぎて、そんな前のことは何も覚えていない。

「マジで？ いまだに『小町の名言』でググったら出てくるぜ？」

「そうなの？」

「君はこう言ったんだぞ？ 『満開のあとには、夏がやって来るんです』って」

そうして彼は跪き、指輪を差し出した。

「今日で解散十周年だ。ぼくと、続きの夏へ行かないか」

満開のあとには何が来る？ 夏が来る。——あの熱病のような中、私はたしかにそう言ったように思う。そうか。私の春はもう終わったのだ。

指輪を受け取った私は、彼と何度も何度も小雨の中で「満開のあとに」を踊った。

花の色は、虚しく消えてしまった

長雨の間、私がただ眺めていただけで

花の色は うつりにけりな いたづらに

わが身世にふる ながめせしまに

おののこまち  
小野小町（九）



第二章 夏の熱情

第一節 初夏

第二十九話 不如帰ほととぎす

「えー、じゃあ……焼きそば」

「焼きそば？」

「ふつーのでもいいけど、屋台の焼きそば。夏祭りのさ、肉なんてほとんど入ってない、発泡スチロールに入って、キャベツと紅シヨウガだけの、あの安っちいやつ」

「いいね。あれ妙にウマイよね」

「絶対雰囲気代も入ってるよね！」

暗闇の中で、私たちは「帰ったら食べたい物しりとり」を始めた。最初は、熟成ジビエ  
↓【え】エシャロット↓【と】トリュフ↓【ふ】フィナンシエ、みたいなおしやれ縛りだ  
つたのに、どんどん庶民的ソッケルのフードになってきた。

「雄太ゆうたが夏祭りとか言うから、りんご飴アメ食べたくなってきたよ」

「りんご飴いいね。徳沙あつさの舌が着色料で真っ赤に染まるの見てみたい」

「なんでよ」

「エロいじゃん」

「エロいかな？」

暗闇の中で雄太はすけべな顔をした。暗くて見えないけど、私には分る。

まだ雪の残る夏山に登りに行こう、と雄太が誘ってきた。私たちは山岳部だったので、

軽いハイキングみたいな夏山デートのつもりだった。空気は澄んで、都会とは別世界。まだ雪のある空気を吸えてすっきりする。

日帰りで帰る予定だったが、下山時に滑落事故が起きた。

私が瓦礫を踏み、体勢を崩したのだ。雄太がとっさに庇って、二人で転がった。しばらく気絶していたのか、起き上がるともう日暮れだった。

「テントも寝袋もない」

雄太は暮れかかる空を見て言った。

「マグライトはある。どこか折れたり出血は？」

「大丈夫。低体温になるより、歩いて下山した方がいいね」

山の鉄則は「遭難したら登れ」である。登れば登山路＝「人の踏み固めた道」があるからだ。私達人間は獣ほど斜面踏破能力はない。人の通れる道しか通れないのだ。

尾根に戻るまでが大冒険だったが、そのあとは安全な下山道となった。ライトはあるから足元は照らせる。だけど電池をセーブしたい。月明りがあって助かった。深夜から上った下弦の月は、ライトなしでも勇気をくれた。

「あー、昔食べたお菓子で今売ってないやつとか食べたい」

「分るー。昔のサイズのカントリーマームとか」

「あんこが入ってるんだよね実は」

「知ってる！」

なんだろ。夜中じゅう電話して、朝になるような感覚だった。君と出会ってから、何度朝まで話しただろう。

ぼつんと、山小屋の灯りが見えた。

「助かったー！」

「あとは斜面を駆け下りれば、一瞬」

その時雄太は私の後ろにいて、声しか聞こえていなかった。

「ダッシュで行こうぜ、せーの！」

雄太の声で私たちは走り出す。私は元陸上部なので足には自信がある。だけど山男の雄太に抜かされるかも。今度は滑らないように、「下界」に向けて懸命に走った。

「おうーい！」

山小屋の番をしている人が出てきてくれた。そろそろ夜明けだ。暖かいスープが欲しい。

白湯でもいい。焼きそばは……今はいいや。喉つまりそう。まずは眠りたい。

「滑落しましたが、怪我なし。自力下山しました。二名です」

私は状況を伝えたが、山小屋の番人は怪訝な顔をした。

「二名？」

私は振り向いた。さっきまでいた筈の雄太が、いなかった。

「雄太？」

そんな馬鹿な。煙のように雄太が消えた？ 木陰に隠れて、「わっ」とか言うつもり？

「雄太！ 雄太！」

私は今駆け下りてきた斜面を走って登った。

おかしい。雄太はどこにもいなかった。

「私が見たのは、あなた一人で走ってきた姿だったけど？」

「そんな馬鹿な！ 二人でここまで来たんです！」

雄太のいた所には、夜じゅう私たちについてきた、沈みかけの月がいるだけだった。

「滑落したのはどのへんか、分りますか？」

事故の報告をしているうちに、雄太はひよっこり顔を出すだろうと思っていた。小屋に

戻った私は地図を出し、登山路を確認して印をつけた。

搜索へリが出た。

滑落地点に、雄太の遺体が見つかった。

山では不思議なことがあるという。雄太は私を下山させる為に、私を怖がらせない為に、ずっと一緒にいてくれたのだろうか？

幽霊はおどろおどろしくて怖いもの、というイメージがあったのに、今はそんなことを全く思えなくなった。

私は雄太と一緒に下山した。今でもそう思ってる。

ほととぎすが鳴いた方を見ても

明け方の月が残っているだけだった

ほととぎす 鳴きつる方を 眺むれば

ただ有明ありわけの 月ぞのこれる 後徳大寺左大臣ごとくだいじのさだいじん（八一）

第三十話 おとうちゃんが消えた

迷路のような緑の中を、私はさ迷った。

竹林がざわざわと鳴る。細い葉の草いきれの隙間から、初夏の強い光が差ししてくる。篠しの竹たけの迷路、出口はどっちだ。

「おとうちゃんが帰って来ない。心配だから探しに行く」

と母からラインが入って、私は顔が青くなった。上司は私の家の事情をよく理解してくれているから、早退の手続きはスムーズだった。

母は認知症である。軽度だったが、最近「失踪」が増えてきた。「今どこ分らない」は時々あり、最近増えたのは「おとうちゃんが帰って来ない」だ。

父は七年前に他界している。お葬式も出した。それから、母がゆっくりとおかしくなってきたように思う。悲しみを忘れたくて。話し相手がいなくなつて。だからか、時々母は、父が生きていると思うようになったのかも知れない。

背の低い竹のトンネルは迷路だ。ここで母は父を探したのだろうか。母に持たせたGP Sはこの先を示している。——いた。良かった。

後継ぎもないこの辺りの農家は、畑を荒れ放題に置いて千茅ちがやが生え放題だ。白い穂が一面ススキ野のようで、何だか幻想的だった。母はその中で一人座って、見えない父と話し込んでいた。

母さん、あんな顔するんだ。まるで乙女じゃないか。私が子供のころの父の記憶は、とても太い腕。でも病気がちだった晩年は、枯れ枝みたいになってかわいそうだった。今母が会っている父の腕は、遅しくて丸太みたいかな。

風が白い穂を揺らして、大きな緑と白の布の上に二人が乗っているようだった。

母が立った。今日の話は終わったらしい。

「お母さん、帰るわよ」

私は篠竹の影から現れた。そういえば昔遊んでた公園に、夕方ごろ母はそうやって迎えに来たっけ。参月さつき、帰るわよと。

「迎えに来てくれたんだね」

「うん」

私たちは家に向かって歩き出した。母に合わせてゆっくり歩く。かつて母が私に合わせ

てゆっくり歩いたように。

「お父さんと沢山喋れた？」

私が尋ねると、母は目を剥いて私に言うのだ。

「何を言ってるの。お父さんは七年前に死んだじゃない」

これだから困る。彼女は今しゃっきりとしていて、もとの母に戻っているようだった。母は時々、タイムスリップしているのかも知れない。

千茅が浅く生える篠竹の原

忍ぶように我慢していた心が溢れてしまう、あなたが恋しくて

浅茅生の 小野の篠原 しのぶれど

あまりてなどか 人の恋しき

参議等 (三九)

### 第三十一話 ドブジャンプ

田んぼと田んぼを区切る、大きな用水路がある。

蛙が泳ぎ、水草は生え放題、でっかいナマズを見た奴もいるらしい。汚いので通称「ドブ」。大輔たちは、そこでよく小学校帰りに遊んだ。

ある日「ドブの向こうにジャンプして行けるか？」って、誰かが言い出した。

誰もが走るが、ドブの手前でビビッて止まってしまう。無謀な中が飛んで、半分で落ちた。水草まみれで大爆笑だ。

その日からそのゲームは、「ドブジャンプ」と呼ばれるようになった。

大輔はまず、地面にチョークの線を引いて試してみる。要は走り幅跳びだろ？ だが三回やって三回失敗。本番に挑む勇気はない。だが大輔には、挑む理由がある。

連合運動会がもうすぐと聞いたからだ。

連合運動会とは、地域の小学生たちを集めた大規模な運動会である。そこに行けるのは体育の得意な子だけ、つまり選抜者による上級者運動会だ。五十メートル走は八秒切る必要がある。大輔は足が速い方だが七秒台は無理。だけど幅跳びならば？

去年、兄が出た連合運動会について行った。その時同じように姉の応援に来ていた、兼奈という女の子と知り合った。彼女も運動が好きで、来年出たいと言っていた。カバンに小

さな風鈴のストラップがついてて、ずっとちりんちりん鳴っていた。

あの子が来る。俺も行かなければならない。

大輔は自転車道を漕ぎ、二つ学区の向こうの小学校まで行った。フェンス越しに彼女を探す。少し日焼けした、髪長い女の子。笑うと白い歯がきれいで、風鈴のように笑う女の子。カバンにあの時と同じ風鈴ストラップがついていて、ちりんちりん鳴っていた。

まずは地面に引いたあのチョークを超える。最悪爪先だけチョークを超えて、踵は浮かせてもいいんだ。ダッシュ。着地をミスるな、爪先で。ダン。爪先残った、踵も浮いた。チョークを二センチ越えた。いける。いけるぞ。

大輔は本物のドブに向き合った。

牛蛙がぶいぶいと鳴きだした。日没が近づいている。深呼吸。

猛烈ダッシュ、飛べ、ドブを超えコンクリを超えて……ムリ！……

大輔は頭から水草を垂らしたまま家に帰り、母親にひどく叱られた。

明日はあきらめねえ。

大輔は風呂の中で、すりむいた手のひらを舐めた。

湧いて流れる泉川は、瓶原を二つに分ける

姿をいつ見るのだろう？ 恋しい

みかの原 わきて流るる 泉川

いつみきとてか 恋しかるらむ

中納言兼輔（二七）

### 第三十二話 蜃気楼

都会のランチは灼熱地獄だ。木陰も効力がなく、コンクリートの潜熱が私たちを石窯焼きにする。アスファルトから蜃気楼が立っているんじゃないかと思う。

その灼熱ランチから戻った私は、社の裏口から入る。冷房がカチーンと効いてて、ようやく私は正気を取り戻す。守衛さんにIDカードを見せ、門番の許しを得る。

この裏口には搬入エレベーターがあり、ランチ渋滞などの混雑時は、社員はこつちを使う暗黙ルールがある。表玄関の銀のおしゃれエレベーターに比べて、緑のペンキで塗られた武骨なもので、ボタンも昔のミサイル発射スイッチみたいなのだ。

この工場風搬入エレベーターの最大の欠点は、カーゴの中に空調がないことだ。せつかく館内の冷房で冷えた体が、灼熱地獄に戻ってしまう。

今日のランチ帰りはもう一人女子社員がいて、二人で灼熱エレベーターを待っていた。低い機械音とともに到着し、昔ながらのブーというブザー音で扉が上下に開いた（荷物が急に飛び出さない設計だそうだ）。扉が閉まる直前、企画部の宜雄のぶおが駆けこんで来た。私はとっさに「開」ボタンを押し彼を乗せる。

うなる低い音を響かせて、三人を乗せた緑の鉄籠はゆっくりと上昇してゆく。

私は緊張する。宜雄がいるからだ。もう一人の女子社員は私の横にいて、宜雄は私の背後にいる形だ。三人は無言のまま上昇する。

宜雄は女子社員に見えない角度で、私の尻を触ってきた。私は無視して虫を払う牛の尾のように払う。彼女に気づかれぬように、なるべく動作をゆっくりにする。

先週の土曜日、彼と休日出勤が被った。被ったというよりも、つき合ってる私たちは互いに予定を合わせたというべきだろう。

夜誰も会社にいなくて、興奮した私たちは抱き合い、触りあった。宜雄は私を搬入エレベーターに連れていき、この中は空調がない代わりに、監視カメラもないと言った。

鉄の壁と床はひんやり冷たく、しかし体の芯から熱かった。夜にここに来る人はいない筈だが、いつ低いモーター音が動き始めるか分らない。私たちは激しく愛し合った。夜なのに、エレベーター内に昼気楼が立っているように思えた。

再び宜雄は私の尻を触ろうとする。あの夜のことを思い出していることは明らかだ。私は再びばれないように彼の手を払う。

ブー。七階にたどり着き、女子社員は降りてゆく。「閉」と彫られた黒いスイッチを押した私は、扉が閉まると同時に、彼の唇を吸った。

「なんだ嫌われてんのかと思ったよ、能里のぶ」

私だって興奮してるわよ、この昼気楼の立つエレベーター。でも今はここまで。

警備員の焚く火が昼間消えてるのを見ると

どうしても燃えた夜を思い出します

御垣守 衛士の焚く火の 夜は燃え

昼は消えつつ ものをこそ思へ

大中臣能宣(四九)

### 第三十三話 七十二時間のパラダイス

東京はバケツをひっくり返したような雨で、土砂降りかと思いきや弱い雨になり、また豪雨になった。梅雨にしては台風のような雨だ。これからずっと降り続くらしい。

車で雅をピックアップして、高速に乗った。尾行はいない。いても撒いてやるさ。その為のポルシェだ。嵐のような雨を切り裂いて、その向こうに行くんだ。

俺はスーパースターである。

スーパースター道哉は人気グループ「デステイニーSix」のメンバーで、日本中どこへ行っても「俺」がいる。駅、看板、自販機、どの広告にもドラマにも「俺」だらけ。だから嚴重に変装して出かけた。三日間の逃避行の為である。

「三日間ずつと一緒にいられる」と聞いて、雅は助手席ではしゃいでいる。鬼マネージャーに交渉して、ようやくこの三日間を勝ち取ったのだ。雅は売れないときからずつと一緒にいてくれた、この世界でいう「一般人」である。庇ってくれる事務所などない。万が一俺のファンに知られたら、ブスだの死ねだの袋叩きにあう。俺は彼女を守らなくてはならない。高速道路の「俺」の看板たちの下を、俺たちは駆けてゆく。

行き先は、東京から少し離れたリゾートホテル。プライベートが守られて、従業員も口が堅いのが良い。食事もうまく、二人でただ三日間過ごすには最適だった。

「三日間つてのは、二十四かける三の、七十二時間のことだからね？」と彼女は念を押す。「二十七の誕生日のときみたいに途中で帰ったり、二日間つて言いながら途中八時間中抜けした二十九の時みたいなのは許さないからね？」

最上階のスイートルームに到着すると、最高級の食事も酒もどうでもよくて、彼女は「一緒にゲームがしたい」と言い出した。は？ 彼女はてきぱきと持ってきたゲーム機を巨大テレビにつなぎ、昔二人でよくやったゲームを立ち上げたのだ。

「あの時一番あって、今一番ないものが欲しいの。それは『どうでもいい時間』。昔は時間だけが死ぬほどあって、それをどう潰すかで精一杯だったでしょ？ それをやりたい」



やってみれば意外と手が覚えていて、あの時のことが瞬時に思い出された。シャンプー間違えて喧嘩したり、朝まで二人で映画を見ていた。何もしないと焦ってしまって、でも何をやったら夢に近づくのかも分らずに、ただ時間を潰すことだけを目的にした、気絶していた時間。ずっと雨で助かった。いい天気だったら籠るのに後ろめたさがあったかも知れない。それから俺たちはセックスしたり、俺の映画上映会をやったり、またセックスしたりした。

実は俺は、某事務所の看板女優、左野京と結婚させられる。大型カップル誕生のニュース性の為だけにである。向こうの事務所はこの不況にあえていて、キャラクターの転身をしたがっている。ウチの事務所は、別件で向こうに借りがあり、これはその清算でもある——すなわち政略結婚だ。夫婦で保険や家のCMに出て、億単位を動かす計画なのだ。ちなみにその女優はレズビアンで、その偽装の結婚も兼ねている。俺は育ててくれた事務所に恩返しをしなければならぬ。だから雅、お前とは結婚できないんだ。

七十二時間、その話をずっとしようと思っていて出来なかった。

だけど車から降りる彼女を見て、俺は壊れたようにこの説明をした——だから雅、お前とは結婚できないんだ。そう言い終わるまで、彼女はじっと俺の顔を見ていた。

「道哉は私のことを愛してる？」

一言だけ彼女は聞き、俺はうなづいた。

「じゃあ今までと変わらなくていい。日本一のアイドル引退まで待ってる」

彼女はそう言って、振り向かずに家の中に入った。

「愛してない」と言えば、彼女を俺なんか縛り付けずに解放できるのだろうか？ それ  
が二人にとって幸せなんじゃないのか？

雨はまだ降っていた。

俺は事務所まで車を飛ばした。土砂降りの中へ、息を止めて潜ってゆく。

今となってはあなたを諦めると

人づてでなく言う方法がない

今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを

人づてならで 言ふよしもがな

左京大夫道雅（六三）

第三十四話 血を浴びた女

鎌次けんじが好きすぎて、ついに局部を切り取ってしまった。

私の一番愛した鎌次。ついに私だけのものになった。

「倉良々……倉良々……」

と、鎌次の本体は血まみれでか細い息をしている。いや、私にとってはこの両手の中のものが鎌次の本体で、あなたは本体を支える台に過ぎない。台は、本体の使い方が身勝手でしたね。

ああ、夏だからと、お気に入りの白いワンピースを着てくるんじゃないかった。まるで真っ赤なドレス。私は海に入り、頭から浴びた血を洗った。もちろん両手には鎌次の「本体」を持って。

絞って何キロも遠くから、血の匂いを嗅ぎつけるんですってね。

いらつしゃい。パトカーの到着とどちらが早いかしら？

夏の早朝は涼しくて、今日もいい天気。

漁師さん、今日は鮫がかかるかもよ？

世界がずっと変わらなければいいのに

漁師が小舟の綱手つなでを渚なみから引いている、普通の景色が美しい

世の中は 常にもがもな 渚なみこぐ

海人あまの小舟をぶねの 綱手つなでかなしも

鎌倉かまくら右大臣うだいじん (九三)

第三十五話 その汗は誰のもの

人妻と寝てしまった。

酔った勢いはある。でも本当に好きだったんだ。

ずっと好きだった会社の後輩。嘉澄かすみという名前が綺麗で好きで、よくしゃべるショートカットの子。ほどなく彼氏が出来て、俺はずっと相談に乗ってたりした。だけど気づいたら別の男とつき合い始め、それが俺の同期だと知ったときは心底驚いた。そのままトントン拍子で結婚式。二次会には行ったさ。良かったねと言ったら、輝くばかりの笑顔だった。

好きだったんだ。真面目な子で、よく笑って、俺は沢山のことを教えた。その同期と俺が、入れ替わってたのかも知れないのに。

何年かぶりに会社で同じチームになった。久しぶりに色々な話をして、彼女は旦那の悪口ばかりだった。同期の悪口を言うなよとたしなめたが、私にとっては旦那なので、とハツキリしている。そんな所も好きなんだよな。

ある晩飲みに行つて、酒が回り過ぎたのか、俺たちは一線を越えた。暑い夏の夜で、二人ともとても汗をかいた。その汗をお互い舐め合つた。

会社で顔を合わせた彼女は、素知らぬふりをしている。そりやそうだよな。急にイチヤイチヤしてくる訳じゃない。彼女は旦那のものでもないし、俺のものでもない。それは分つてるさ。

彼女は外回りに社を出た。強烈な日差しで、信号待ちでも汗が吹き出る。その汗が彼女の短い髪を貼りつかせている。俺はそれを、二階の会議室から眺めていた。

難波の入江の、芦の「刈根の一節」のような「仮寝の一夜」のために、  
身を尽くしてもあなたを求め続けるべき？

難波江の 芦のかりねの 一夜ゆゑ  
みをつくしてや 恋ひわたるべき 皇嘉門院別当（八八）

### 第三十六話 海底の君

真つ青な海面が、大きくうねっている。

湾内から外海に出ると急に波が高くなり、まるでアップダウンの道を進んでいるような気分になる。

緯度と経度を確認し、白いクルーザーのエンジンが止まった。スキューバのフル装備をした俺は、二時間ほど時間をもらい海の底へとダイブする。

年に一回、夏のこの日の儀式である。この真下に眠る彼女に、会いに行く。

婚約した法子と、世界一周のクルーズ旅に出かけた。俺たちの人生は順風満帆で、この

旅行は新婚旅行のようなものだった。

だが爆発事故があった。

豪華客船は横腹に穴が開き、救助へりも救助船も到着する前に、あっという間に沈んだ。彼女は泳げなかった。俺は彼女を担いだ、入ってきた鉄砲水に流されて気絶し、気づいたら海の上だった。

彼女の遺体は回収されていない。船も引き上げられなかった。海底が深すぎて、サルベージ出来なかったからだ。俺は一人で働いた。会社をつくり沢山儲けた。いつかこの船を引き上げる資金を貯める為にだ。その決意を新たにする、これは真夏の儀式である。

少しずつ水圧に体を慣らしながら、下へ下へと潜ってゆく。静かで深い青の世界。魚たちが泳いでいる。貝や珊瑚が貼りつき、もはや海の一部になりかかっているぼろぼろの巨大船が見えてきた。ここを訪れるのは魚だけだろう。年に一回の俺を除いては。

二人でタイタニックごっこをした舳先がある。夜中誰にもバレないようにセックスした左舷の手すりもある。あんなに生々しかったことが、少しづつ海の一部になってゆく。いつか船内に入り、彼女の遺体を探したい。だが今の俺は船の周りをゆっくりと一周するだけの潜水レベルだ。この巨大船は、つまりは墓だ。俺は海底にお盆の墓参りをしているのだ。今年はこのことがあつたぜ、約束してたあれはああなつたぜ、と彼女に話しかけた。ワイヤーが二度引つ張られた。今年の彼女との逢瀬も終わりだ。俺はワイヤーを二度引つ張り返し、水圧に徐々に体を慣らしながら浮上していく。ここは水が冷たくていいな。お前、夏の暑い嫌いだもんな。

海面に顔を出した。痛いくらいの日差しと、むっとする風の世界。

真っ白な入道雲と見まがう白い波が立っている。

彼女が「見て見て寺ちゃん、入道雲！」と指さしたら白波だったなんてことを思い出す。俺はまだ法子のことを、何一つ忘れていない。

大海原に漕ぎ出してみれば

入道雲と見間違えるような沖の白波を見た

わたの原 漕ぎ出でて見れば 久かたの

雲居にまがふ 沖つ白波 法性寺入道前関白太政大臣（七六）

## 第二節 盛夏

### 第三十七話 ロックよ、静かに明けよ

深町<sup>かかまち</sup>さんがロック好きだと知ったのは、GW頃のサークルの例会だったか。それまで週二回会えればラッキーの深町さんと、急に親しくなれた気がする。彼女の好きなバンドを聞きまくり、カラオケで歌えるように鍛えた。これが好きならあれも好きでは？ と調べまくり、俺はロックの歴史に急に詳しくなった。

夏休みに入ったらサークルの例会はない。俺は思い切ってサマーフェスに誘った。夏のスキー場で行われる年一度のフェスで、三日間五つのステージのどこかしらでバンドたちがガンガン鳴らす。みんなキャンプ用意で寝泊まりしながらステージをはしごするという、お好きな人にはたまらないイベントだ。ただいきなり彼女と三日間テント寝泊まりはハードが高すぎる。だからラストナイトだけ誘ってみた。何せ夜から朝まで、彼女の好きなバンドと俺の好きなバンドが合わせて六組も出場するという奇跡のタイムテーブルなのだ。彼女は二つ返事をして、そして俺たちは新幹線に乗った。

爆音、爆音、爆音。照明、照明、照明。

俺たちは乗りに乗り、真夏の草原で暴れ、息をついたらもう夜明けだった。夏の徹夜なんて一瞬だ。彼女と過ごす時間は、竜宮城のように進む。

俺たちは会場からの帰り道を、駅に向かって歩いていった。帰り客もまばらで、まだ最後のバンドの為に残っている人も多いのだろう。混まないうちに始発で戻る計画だった。青白い空にヒグラシが鳴きはじめた。

「私のノってるところと清原<sup>きよはら</sup>くんのノってるところが違って面白かった」と彼女は言う。とりとめもない話をした。バンドの話、サークルの話、大学の話。そのどこから告白に入ればいいのか、俺には分らない。「ところで」と話を急転換すればいいのか？ うまく普通の話からいつの間にか告白にすり替わればいいのか？ 会話に空白が生まれると、恐怖が襲ってくる。俺はさっきのギタリストの速弾き並みに喋って空白を潰す。

駅についてしまった。太陽はすっかり登り、ヒグラシはミンミンゼミに交代していた。新幹線の中で、気づいたら爆睡していた。だけどもと目を覚ますと、彼女も同時に目を

覚めました。

「あの、付き合いたいんですけど」

寝起きだからか、何の工夫もない告白をしてしまった。

「帰り道、清原くんがいつ言い出すか、ずっとドキドキしてた」

彼女は笑って、俺の肩に頭を預けてきた。俺の鼓動は、どのドラマーより爆速だった。

夏の夜は、暮れたと思ったらもう明けた

月は逃げ遅れて、雲のどこかに隠れてる

夏の夜は まだ宵ひながら 明けぬるを

雲のいづこに 月やどるらむ

清原深養父（三六）

### 第三十八話 推しの目線

年に一回しかない。

休みをやりくりして、三日連続の有給を取れる日は。

引継ぎは先輩と後輩にあらかじめ根回し。お土産も欠かさず、帰ってきたらまた馬車馬のように働く、うるさい事務のおばさんに戻る。だから年一回のこのチャンスを私に下さい。この三日間だけ、私はカボチャの馬車に乗った女の子に戻るのです。

死ぬしかないと思ってた灰色の日々。他人に迷惑をかけないだけの、日陰の虫みただった日々。それを変えたのが「Destiny Six」だった。世界に手触りが戻ってきた。世界に色が戻ってきた。私は、世界に存在していいんだと思えた。

アイドルにハマる年上の姐さんたちを、私は正直馬鹿にしていた。虚像に恋するなんて、と。実はこれは恋ではないのだ。恋を知る以前の、女の子だった頃にしかなかった感情なのだ。絶対的な何かに自分を溶かす感情。それは宗教の帰依に似ている。布教活動、聖地巡礼、喜捨。どれも同じ名で呼ばれる「崇高な行為」だ。私の神の名は、男性六人組ダンスユニット「Destiny Six」の、ロングヘアアの優輔である。

サマー ज्या パンツァーの季節である。夏の終わりの三日間、大阪、名古屋、東京ドーム。一日二ステージ全六ステージ。これに全て通う（全通）。宿は取らない。全部ネカフェだ。

体が痛いこれも聖痛だ。ぐっすり眠れないが、これも聖不眠だ。貧乏だからお金を削るのではない。全てグッズというお布施の為に取ってあるのだ。売上が上がれば上がるほど、神のグループ内での地位は上がる。それは絶対なる五体投地の証。

古参仲間の【いんぷー】さんと合流して、早朝からファミレスで応援団扇を二人でつくっていた。

『優chan』

『Love YOU』

とカワイイ文字を書き込んだ団扇は、きつと神のモチベを上げて、ステップを1ミリ秒早くするだろう。それだけで良いのだ。それだけで私は満足。だが……だが……

『★♡♡こっち見て♡♡★』

ああ。これはやってはいけない。信徒たる者、神を試してはいけない。これは禁じられた呪文である。禁呪である。

「流石にやり過ぎじゃない？ 大帆<sup>たほ</sup>さん」

いんぷーさんは流石にその文言をたしなめた。

「いや……でも……十周年だし……」

「何の？」

「私が出家して……いや、好きになって……十年目……」

私は小さくなり、消え入りそうになり、絞り出すような声で答える。

「うん。じゃあしやあないか。特別だもんね」

「うん……特別……」

言いながら私は心臓がバクバクしてきた。もし神がこの団扇に気づいて、目線が合ったらどうしようかと。死んじやう。その光線に射抜かれた私は蒸発しちゃう。成仏して生まれ変わらなと思う。無だ。幸福なる無だ。

神を信じる者は泥の中で立ち尽くし、雨の中で神の救いを待つ。それで死ぬならそれは神が与えた運命だ。それで生かされれば神を称えるチャンスを再び下さったと思うのみだ。私たちが苦難を引き受けている間、幸福なる他の者は神に気づくであろう。それでよい。

「期待するから失望する……期待するから失望する……」

呪文のように私はいいい聞かせ、真夏の聖戦に向かった。

三日間六ステージ、全百二十二曲。

ただの一度も、神は目線を与え給うことはなかった。

雄島の漁師の袖は、濡れに濡れても色まで変わらな  
なのに見てよ、私の袖は血の涙を拭いて色が変わった

見せばやな 雄島の蚕の 袖だにも  
濡れにぞ濡れし 色は変らず

殷富門院大輔（九十）

### 第三十九話 キャンプファイヤー！

同じ会社の連中で、一泊二日の夏山キャンプに出掛けた。その中に僕の好きな希実さん  
がいる。ボクは彼女の印象に残り、ステキと思われなければならない。

川釣りは彼女を手伝ってあげたり、アドバイスを的確にする。薪割りは率先。カレーの  
材料切りも皮むきもボクのお手の物だ。テント？ 任せる。ボクはギターは弾けないが、  
タンバリンくらいなら叩けるぜ？

キャンプファイヤーに火が付いた。「方正、何か芸やれよ」と先輩が言うので、ボクは  
謎ダンスをやって皆の爆笑を取った。彼女も笑ってて、キャンプに来てよかったと思った。

女の人は「私の為にここまで危険なことをしてくれる人が好き」と思うらしい。野性  
において危険に強いことは強い雄の証拠で、雌はその遺伝子が欲しい筈だ。

ボクは頭からバケツの水を被った。

「私が欲しかったら、その火を飛び越えて来なさい」という映画を思い出したボクは、キ  
ャンプファイヤーを飛び越して彼女の前に降り立った。

彼女はドン引きしていた。

こんなにも好きと言えない

伊吹山のさしも草（お灸に使うイグサ）のように燃える思いを  
全然知らないんですね？

かくとだに えやは伊吹の さしも草  
さしも知らじな 燃ゆる思ひを

藤原実方朝臣（五一）



第四十話 並木道の青

晩年というものが私にやって来た。

妻にも先立たれ、公園に座って何もしない老人は退屈である。孫たちはもう同年代の子らと遊ぶのが楽しい年代になり、滅多に寄り付かなくなった。

絵を描こうと思った。

そういえば私は、昔画家になりたかったのだ。若い頃仕事を辞めて何度も画家を志そうと思ったが、その度に仕事が忙しくなり、その度に言い訳してきた。自分に絵の才能がないと知ることが怖くて、その扉を開けたくなかったのかも知れない。だが今更その扉を開けて、何もなかったと知っても怖くはない。私は私の役目を概ね人生で果たした。あとは余興の時間である。

絵画教室に通おう。そういえば並木道で絵を描く集団を見たことがある。たいしてうまくない絵も楽しそうに描いている。そんな晩年も悪くないと思っていた。

門を叩いて、私は驚愕した。

「司ちゃん？」

「……儀弘くん？」

すっかり老人となった二人の再会が、まさかこんな所にあるとは思わなかった。しわしわで白髪で、すっかり腰が曲がってしまった司ちゃん。まさか小学生の頃の面影があるとは。気品のある顔立ち、まっすぐ遠くを見る目。でもその目はすっかり老眼で、気品あるほっぺもしわしわで垂れている。だけど司ちゃんは間違いなく司ちゃんの顔をしていた。

私たちは並木道で並んで座って、一緒に絵を描いた。

「見ないで、恥ずかしい」

と司ちゃんは言った。そういえば彼女は、書道も下手だったことを思い出す。

「だからちよつとでも上手になりたいって思ったのよ。そういえば儀弘くん、昔から絵上手かったもんね」

と彼女は、線書きに青を入れ始めた私の絵をのぞき込む。

目を丸くして司ちゃんは驚いた。その表情、七十年前と全く同じだ。

「どうして影が青なの？」

「影を黒で入れるより、色がきれいに混ざるんだ。よく見て。空の色が反射して、影は黒じゃなくて、ほんとは青いんだ」

「へえ」

私は私の晩年に、初恋の人と再会するとは思わなかった。聞けば彼女は旦那さんを亡くし、時間を持って余して絵を始めたのだそうだ。お互い近い立場。初恋の人。これは神が私に与えた、最後の扉だろうか。

「俺さ」

自分を俺と呼ぶのはいつ以来だろう。私は会社員時代からずっと「私」と自称してきた。

「俺」は、子供や学生の呼び方だと思っていた。

「よく男子から馬鹿にされて小突かれたりしてたじゃん。そんな時司ちゃんが『やめなさいよ!』って間に入ってくれて、すごく嬉しかったんだ。司ちゃんは俺のヒーローだった」  
「女の子なのにヒーローなの?」

「ヒロインというと助けられる側っぽいじゃん。人を助ける人はヒーローさ」

「そう。私は逆に、儀弘くんがミステリアスで不思議だった」

「c」

「よく窓際で本読んでたでしょ」

「ああ」

「風が吹いてカーテンが揺れて、儀弘くんの髪の毛が揺れて。その横顔を見る為だけに、放課後覗きに行ったりしてたのよ?」

俺達は笑った。

「男女のよくあるパターンの真逆じゃないか」

「そうね」

「俺の初恋の人は、君だ」

「私の初恋の人も、あなたよ」

蝉時雨。目も眩む日差し。その反対の濃い青のなかの、俺たち。

俺は、今死ねば何と幸福かと願った。

「忘れないよ」という約束なんて、最後まで続かないでしょ?  
だから今死にたい

忘れじの 行末までは 難ければ

今日をかぎりの 命ともがな

儀同三司母 (五四)

第四十一話 まぼろし団地

子供の頃住んでいた団地が、取り壊される。

そう聞いた俺はそわそわしてしまつて、思わず車を飛ばして現地まで行った。

坂道ダッシュの坂がまだ残つてて、案外小さくてならかなのにびっくりした。当時の目線までしゃがんでみた。これならあの時の絶壁に見える。けど立ち上がると、魔法が解けた普通の坂になってしまう。とうにオッサンになった俺が、「落ちたら死ぬ」と設定したブロックの上をジャンプしているのは、傍から見たら奇異だろう。

あの文房具屋がなくなっていて、大変ショックを受けた。夏の暑いさなか首を突っ込んで怒られたアイスポックスはどこにもなくて、ただのマンシヨンになっていた。マンガを立ち読みしてババアにはたきで叩かれた本屋も、本のない空き家になつてて、何も置かない本屋は骸骨みたいだった。「あのころのこと」は俺の記憶の中にしかないのだろうか？どこにも残っていないのだろうか？

その奥に、亡霊のように団地が佇んでいた。もうペンキも新しく塗っていないのだろう、雨に禿げた様が哀れですらある。そういえば昔このペンキを塗つてる作業を、一日中眺めていたっけ。あれが最後に塗つたペンキだったのだろうか。鮮やかで平和の象徴だったクリーム色は、灰色の地肌と古ぼけた白にすり減つていた。

「五号館、五号館……」

かつて住んでいた建物に、自然と足が向かう。

さつきから気づいていたのだが、町のスケールが縮んだような、不思議な感覚がある。坂道ダッシュは一瞬で終わるし、ブロックは足が余裕で届き、アイスの箱から本屋はワープみたいに近かった。団地たちも背が低く、みな老人のように縮んでしまったかのように見える。勿論これは俺の肉体が大きくなり、目線が高くなったことの反動である。頭では理解していても、心が理解できるとは言えない。この気持ちをなんと呼ぶのか俺は知らない。古文で習った、「あはれ」だろうか。

五号館にはすぐ着いてしまった。目を瞑つても辿り着けると思うが、目を瞑ったら距離感が狂つて、もっと遠くへ行つてしまうかも知れない。この壁で、「しょんべんを何階まで飛ばせるか競争」で俺は三階の記録を持っている。今ならもつと行けるだろうか？（やらないけどさ） 「夜中に回ってる」と噂のあった給水塔が健在だ。ビスの位置が月曜だ

けずれてる、って言い出した奴がいて、つまり日曜の夜に回ってる証拠だって。

銀が錆びてくすんだ郵便ポストを覗いた。人が住んでいる形跡はある。老人ばかりだろう。この団地と同じように、身体の各部位が壊死を始めているに違いない。

敷地内には公園があり、俺はこのシーソーによく乗っていたように思う。中の木が、水色のペンキが剥げてむき出した。お前、ここに持ってこられて、ずっと現役だったか。

俺はシーソーに座り、公園を見渡した。ジャングルジムは朽ちようとしていて、遊具が撤去された跡が沢山あった。

木の向こうから、女の子がこちらを覗いていた。

老人ばかりだと思ったこの団地にも、まだ若い人が住んでいるのだろうか？　ここで遊んでいたマンモス団地の空気が懐かしくなり、思わず声をかけた。

「団地の子？」

女の子は頷く。

「遊ぶ子いない？」

女の子はもう一度頷いた。

これ以上は変態オジサンの声掛け案件になるだろうか？　俺はシーソーの、空いている方を指さした。女の子は走ってきて、反対側によじ登った。重さも感じない位に軽い。俺は両脚に力を入れ、飛び上がる。彼女の方が下がり、彼女は喜ぶ。重力に任せて俺の身体は落ち、彼女の身体は跳ねあがる。彼女はキャッキヤ喜んで言った。

「わたしが見えるのね？」

ん？　どうということだ？

「誰もわたしが見えないの。どれだけ話しかけても答えてくれないの。一緒に遊んでくれる子もいないの」

一緒に遊んでくれる子がないのはここが老人だらけで……いや、そうじゃない。

「見えないってまさか……」

「うん。知ってる。わたし多分幽霊！」

シーソーの向こうで、彼女は微笑んだ。悲しい笑いというよりも、話し相手を見つけた喜びの笑顔だった。

「わたし、平和と書いて平和のどか。おじさんは？」

「康行やすゆき」

「……」

俺の名前を聞いた平和は少し考え、突然顔が明るくなった。

「康行くん！」

「？」

「平和！ 平和よ！ 覚えてない？」

「？」

「自分が死んでるって分つたのは、わたしだけそのままなのに、みんながどんどん成長していくからなのね？ だから分つた！ あなたは、康行くんの成長したオジサンね？」

「……？」

俺は必死に思い出す。この公園で遊んだ奴ら。俺は男とばかり遊んで、女の子と遊んだっけ……？

「ケイドロとか缶蹴りとか誘ってくれたの、覚えてない？」

必死に思い出す。メンツが足りないからって、そのへんの女の子に声をかけたことがよくあった。その中にいた子、だろうか。

「男子の遊びに入れてくれて、わたし達めっちゃ楽しかったのよ！」

「え、そうなの？」

「康行くんが声かけてくれなかったら、女子と男子は分かれたままだったと思う！」

「……そうだったんだ。俺、あんま自覚なかったよ。ごめん、正直覚えてないんだ」

「そっか……私たち女子の間では、康行くんはヒーロー扱いだったのよ！ 男女分けへだてなく接してくれてるからって！」

「……知らなかった。言っつてよね、そういうの」

平和は笑った。

「だって私にはつい最近のことよ！」

今俺は、旧友と再会しているのだろうか。時を超えた再会という大仰だろうか。

誰もいないぼろぼろ団地。入道雲に蝉の声、ねっとりとした動かない空気。真夏の怪談にびつたりシチュエーションじゃないか。

「遊ぶ人いないんなら、一緒に遊ぶか」

「ありがとう！」

彼女が幽霊なら、傍から見た俺は、独り言をぶつぶつ言ってる変なおジサンだろうか？ それとも小学生女兒と遊んでる「事案」なのだろうか？ 老人の町には誰の姿も見えず、誰にも通報されないまま、俺たちは子供の遊びを飽きるまでやった。汗まみれになっても

気にしない。水道で頭から水を浴びればいい。そうだ、子供の頃はそうだった。

そのうち夕方になると、平和は俺の裾を引っ張り、寂しそうな顔をした。

「そろそろ晩御飯だから、帰っちゃおう？」

「うん。帰るよ。俺んち結構遠いし」

「そっか……」

急に彼女はもじもじし始めた。

「何？ どうしたの？」

「ひとつだけ、願いを叶えて欲しいの」

「？」

「わたし、大人になれないと思うのね。幽霊だし」

「うん」

「だから、あの……」

「何？」

「キスしてみたい」

「は？」

「それが叶えられたら、成仏する」

「成仏のタイミングって、自分で決められるの？」

「分らないよ。ただこの世に残ってる理由って、未練があるからでしょ？」

「……それがキス」

「ファーストキスしたら、死んでもいい」

動揺した。俺はこの子のファーストキスの相手で、それで彼女は成仏する。そんな大役を担ってもいいのか？ 責任重大ではないか？ 彼女は目を瞑り、唇を突き出した。まるで漫画みたいな口の形に、俺は笑ってしまった。

「唇はそんなに突き出さなくていいよ。もっと自然にして」

俺は彼女の頭を優しく撫で、彼女が力を抜いたと分ったとき、唇でそっと彼女の唇に触れた。

蛍光灯が瞬いた。都会の街灯はとっくにLEDだが、このクソ田舎ではまだ蛍光灯を使っているらしい。その激しい瞬きが数秒続いたかと思ったら、彼女の姿はなかった。

「？」

夕日はすっかり沈んで、辺りは青い闇に包まれていた。

俺は何かに化かされたのだろうか？　むしろ今から幽霊の時間では？　何度平和の名を呼んでも、彼女は現れなかった。

俺はモヤモヤを抱えたまま帰路についた。これで良かったのだろうか？　自問自答しながら運転する。

なんだか胸騒ぎがして、俺はハンドルを切ってUターンした。

団地のあつた筈の所に到着して、俺は自分の目が信じられなかった。

更地だった。

俺は何を見たのだろうか？　今日一日、何をしていたのだろうか？　スマホでグーグルマップを確認したら、取り壊される前の団地が写ってて、たしかに昼間見たペンキの禿げた団地で、ペンキの禿げたシーソーも蛍光灯の外灯も給水塔も写っていた。心霊写真みたいに平和が写っていないか散々探したが、見つからなかった。

骸骨みたいな本屋も昼間と同じで、坂道もブロックもそこにあった。俺は暗い坂道をダッシュで駆け上がり、ブロックの上で落ちたら死ぬゲームをやった。

また、ここに来ようと思う。ここに残る大切なものに会いに。そのラインナップに、平和のファーストキスが加わった。

いざ別れん　私は因幡いなばの国へゆくが

その山の峰に生える松のごとく「待つ」と聞くんらば、すぐ帰るよ

たち別れ　いなばの山の　峰に生ふる

まつとしきかば　今かへり来む

中納言行平ちゆうなごんぎんぎみひら（十六）

#### 第四十二話　天狗の花嫁

私の彼氏は天狗である。

「調子に乗ってやがる」の天狗ではなくて、妖怪の方の天狗だ。

なにせ付き合ったあとに正体を知った。だって顔も赤くないし、鼻も高くないし！　気づく訳ないよね？　普通に飲み会来たし、大学行ってたし。人間にまぎれて妖怪がちよい

ちよいいるなんて、私全然知らなかったよ。

「竹葉、俺の両親に会わせたいんだけど」

と、突然その彼氏の貴皇が言ってきた、私は思わずビビった。

「えっ……それって……その、結婚的な？」

「大学生だし、まだ早いだろ。でももしそういうことになるならさ、早めに実家の天狗島見といた方がいいだろと思って」

「天狗島？」

「天狗って大体山の中に住むんだけど、ウチの一族は海系なのね。熊本の方んだけど、沢山島があるその先にある島なんよ。でも人間には見えなくて、たまーに蜃気楼で見えるくらい」

「何その海系とかって」

「まあ、追々教えるわ。当然親父もお母<sup>か</sup>ンも親戚もみんな天狗だし、海坊主とかぬらりひよんとか人魚とか栄螺鬼<sup>さざえおに</sup>とかアマビエとか、妖怪がいっぱいいる妖怪島だから」

「は？」

唐突すぎて、意味が分らない。

「夏休みの旅行ってことで」

「妖怪島に行くの？」

貴皇は笑った。「夏休みに彼氏と旅行」というシチュエーションはいいけど、ハードル高すぎだと思う。

「あの島の先の先」と、貴皇は堤防から指さした。

うだるような陽が落ちて、新月の夜の海風が気持ち良い。

「どうやって行くの？」

「こうやって」

貴皇は私をお姫様抱っこに抱えた。きゃー何これ。そして彼の背中から……羽が出た。

「羽？ 羽ってなに！」

重力なんてないみたいに、私たちは飛び上がる。何これ、私さらわれてる感じ？ 鳶が油揚げさらってるみたいいな？

「見ろよ、みんな天狗火で歓迎してる」

夜の海に、ぽつぽつと燃えてる火が見えた。不知火<sup>しらぬい</sup>といって、古くから妖怪の仕業だと



されてきた。科学的には暖かい空気と冷たい空気の層で起こった屈折によって、漁師さんの漁火が近くに見える、大気の蜃気楼現象って聞いてたけど。

「それもあつさり、天狗の火の時もあるよ」

貴皇はあつさり答えた。お父さん、身長五メートルあるんだって。お母さんは怒ると火を吐くって。あと妹が怪力で岩砕くって。

漁師さん、もし天狗火がひとつ増えたら、私は天狗の花嫁になったと思つて下さい。

この広い大海原に 無限の島を越えて

出て行つたと伝えて下さい 漁師の釣り船たちよ

わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと

人にはつげよ 海人のつり舟

参議篁(十二)

#### 第四十三話 カズから君へ

僕の名はカズ。

泉ちゃん、覚えてる？

あんなに一緒にいたのに。あんなに抱き合つて眠つたのに。

僕、もう一度君に会いたいんだ。

沢山君と話をしたね。今日あつたこと、嫌なやつのこと、怖かつたこと、うれしかつたこと。君の初恋はスイカだつて話、覚えてる？ その好きと男の子が好きの好きは、違つとも同じとも言つてたね。

沢山ごっこ遊びをしたね。僕は君の家に遊びに行く。君は友達と遊んで僕と会えない。でも夜には会える。そんな設定が多かつた。僕は医者で、怪獣で、警官で、お父さんで、カズノコで（それが僕の名の由来だ）、泉ちゃんはアイドルで、先生で、お姉ちゃんで、母だつた。色んな物語で君と遊んだ。何度も何度も生れ変つて、君と別の形で会うような気持ちだつた。

何故君は、僕を忘れてしまつたんだい？

君に会えなくなつてずっと寂しい。誰とも話をしてないよ。君ほど語りあえる人は二度

と現れなかった。僕は大人になっても君と一緒にいたかった。君の興味は他人に移ったの？ それとも、私は一人で大丈夫って思ったの？ 大人になった君と、あの時と同じように話がしてみたい。

僕は今、元君の部屋の、押し入れの中の段ボールの中にいる。君に閉じこめられたままだ。君が僕をここに入れて、そして蓋をしたんだ。それから君は中学生になり、高校生になり、大学生になってこの部屋を出て行った。

この実家、もうすぐ取り壊されるんだってね。段ボールごと捨てられちゃうかな？

僕は熊のぬいぐるみのカズ。赤い熊のカズ。汚れてすりきれて何度も洗濯して、ちぎれて縫い合わせたカズ。

この暗い蓋を開けてくれる君の顔を、僕はずっと夢見てる。

私はもう長くない

来世への思い出に、今ひとたび会うことが出来るだろうか

あらざらむ この世のほかの 思ひ出に

今ひとたびの 逢ふこともがな

和泉式部(五六)

#### 第四十四話 命綱

木星が、俺の視界を三秒に一回通り過ぎる。

切れた俺の命綱が、暴れながら時々視界に入る。

ドント・パニック。それが宇宙飛行士の資質である。だが心臓は早鐘を打ち、遠心力は容赦なく俺の血を末端へ押しつける。

木星上空の、簡単な船外活動だった。宇宙船外に出て部品を交換する、訓練通りの手順だった。だが訓練にはなかったことがふたつ同時に起きた。ひとつは木星に緑色の雷が見えたこと、もうひとつはそれに見とれた俺が、工具箱を落としたことだ。とっさに工具箱を拾おうとして、船の外壁から足を離し、命綱をビーンと引っ張り、結果、ワイヤーがぶつんと切れた。

緑の雷、コーヒー色の雲の中できれいだっただな。今日の前を三秒に一回よぎっているけど。命綱なしで宇宙空間に放り出された人間は、この巨大惑星の重力に引かれて、あの雲の中に突っ込み、地表のないガスの中を重心まで落ちるのだろう。

人類がついに太陽系第五惑星木星に進出する。俺はその有人探査船のクルーに選ばれた、火星出身者である。木星まで行くには地球からロケットで二年もかかるため、一端火星に街をつくりそこを基地に暮らし、そこベースで木星に向かう必要がある。俺はその壮大な計画に参加中の、火星生まれ第一世代だ。

今夜火星では、母星地球にならって夏祭りの花火が打ち上げられる。三日前に妻の由道と息子の因彦と、テレビ通話でその話をしたばかりだ。今年はお父さんはいないが、二人で花火を見に行くと言っていた。きつと今頃、火星で取れた銅を含んだ、壮大な緑色の花火を楽しんでいるだろう。そんなことを閃いた稲妻を見て思い、それで工具箱を落としたのだ。

俺はまず自分の回転軸を整理する。屈身宙返りより伸身宙返りがゆっくりになる理屈(角運動量保存則)でまず体を伸ばす。回転力が落ち、自分の回転方向を把握する余裕が出る。人体という対称性の高い物体のおかげで、うまく手足を伸ばせばランダムな回転軸は収束しやすい。空中回転する猫と同じだ。カンでやる。回転モーメント計算の暇はない。

——工具箱を拾って助かった。俺はその中から小さな工具をひとつ、回転と逆方向に投げた。作用反作用の原理で俺の回転は減速する。いいぞ。視界の中の木星も静止した。

地球の三倍の大きさという大赤斑がまぶしい。巨大嵐にも程がある。一六六五年カッシーニが望遠鏡で発見したものを、未来の俺たちが肉眼で見ているのは不思議な気分だった。地球の十一倍の直径のガス惑星は、回転する球体味噌汁である。あの一個一個の渦がアメリカより大きくて、音速より速いんだぜ。伊勢湾台風何個分、とか言えるかな?——よし、俺は落ち着きつつあるぞ。

工具箱にはあと工具十個。一番重そうなものを除き、二番目に重いものを宇宙船と逆向きに投げた。作用反作用が再び働き、俺の身体は船に向けて等速直線運動を始めた。

残り九個。八個。七個。俺は軌道を微調整しながら舟へ近づく。ようやく無線の調子が戻ってきた。みんな大騒ぎだ。命綱が切れるなんて、そりゃ想定外だからな。

妻の由道とつき合っていた頃、花火大会に行った。派手な赤や緑の光が止むと、一瞬間が訪れる。俺はそれを狙って彼女にキスした。

「もう、法のりつぐ継、花火見て」と彼女は怒ったが、怒ってはいなかった。残りの工具はあと二個、一個。一番重い一個を宇宙船方向に投げ、俺は減速してゆっくりと外壁に近づく。タッチダウン。俺は素早く外壁の手すりを掴み、人類史上初の木星上空での、命綱なし自由遊泳達成者となった（不本意ながら）。  
花火なんて見てなくて、君だけを見てた。  
それが俺の命綱となった。

あなたを思い続けています

なんとか命はあるものの、辛くて耐えられず涙が流れます

思ひわび さても命は あるもの

憂うれきに堪へぬは 涙なりけり

道どう因いん法師ほうし（八二）

### 第三節 晩夏

#### 第四十五話 小指の入ってるタコ焼き屋

夕風と共に、風車がカラカラと回る。今年の夏祭りも無事開催され、そろそろ御神輿が帰って来る時刻だ。裸電球に灯が入り浴衣の客に影をつくる。俺はこの時間帯が大好きだ。

「タコ焼きひとつ」

「あいよッ」

俺は千円札を受け取り、五百円を返す。鉄板の上で熱したソースをたっぷり塗って、青ノリを散らして緑の輪ゴムでパチンと止めて。

あつ。左手で渡しちまった。

お客さんはぎよっとする。俺の小指がないからだ。

「おっちゃん工場働いてて、それでやられてネ」と嘘をつく。

子供の客はそれで信じる。だけど中学生以上なら、

「おっちゃん元ヤクザなの。でも小指、この中に落としてなくしちゃってネ」

とタコ焼きをさすと、笑ってくれる。たまに真に受けるやつもいるけどな。

今でこそでっぶり太って二重顎、金髪パンチパーマのタコ焼き屋だが、これでも昔の俺はヒョロガリのヤクザで、「鞘のないナイフ」とか「鮫」とか呼ばれていた。鮫ってのは、人食い鮫もあるんだろうが、俺は随分「冷め」た目をしてたかららしい。懇意にしていた風俗嬢からは「人殺しの目」と言われたこともある。だけどその「死の世界から来たような感じ」にゾクツと来て濡れるのだそう。それが今の嫁の孝夏<sup>たかな</sup>。風俗を抜けさせるのは大変だった。借金があったからな。

俺はいつも良く切れるナイフを持って、仇名通りの鮫が彫られた柄にしていた。キレるとすぐそのナイフを出した。「羊」って俺は呼んでたけど、手を机につかせて爪を二つに割るんだ。全部の指を我慢した奴はいない。「羊にすんぞ？」って言えば、分ってる奴はしょんべんちびってた。あと耳削いで牛タンの横で焼いたなあ。それを「食えよ」と差し出して食えた剛の者は、ついぞ現れなかった。かき氷器に腕突っ込んで回したこともあった。俺の命なんていつなくなっても良かった。俺の命を使ってくれるやつを俺は探してた。嫁の孝夏は、そんなオーラにゾクゾク来たんだってさ。だから今の腹デブりおじさんに「昔の義生<sup>よしき</sup>を返して」とよく文句を言う。しょうがねえよ。ヤクザみたいに生き急いでたら、お前を幸せに出来ねえだろうが。

それで俺は足を洗うことにして、はじめに鮫の柄のナイフで左手の小指を落としたってわけ。利き手じゃなくていい、ってなったのは、せめてものヤクザの優しさだよな。

オカルト雑誌の記者と名刺を持った男がやって来た。「小指の入ってるタコ焼き屋」を取材したいと言う。都市伝説になってるらしい。オイオイ、マジになってんじゃねえよ。「いいけど、取材が終わったときにアンタの小指が入ってることになるぜ？」と言ったら、マジでビビってた。冗談の通じない奴は嫌いだぜ。

君の為なら惜しくなかったこの命

今は出来るだけ君といたくて、惜しくなったんだ

君がため 惜しからざりし 命さへ

ながくもがなと 思ひけるかな

藤原義孝<sup>ふじわらよしたか</sup> (五十)

第四十六話 内緒の出張

社内恋愛つてのは、バレると色々厄介だ。いろんな人に好奇の目で見られ、冷やかしに遭うのが目に見えている。たたでさえ退屈な会社に、私たちがいけにえとして刺激を与えるべきではない。

彼氏の条二は<sup>じょうじ</sup>どうも最近出張づいてて、色んな所を飛び回っている。おいしいものは食べるし、時間があれば観光もできるって。内勤の私には、一生その機会は訪れないだろう。「いいなあ」と私がこぼしたら、彼は素敵なお提案をしてきた。

「三葉も行けばいいじゃん」

「？」

「俺の行く所に、三葉も宿を取るんだよ。で、向こうでこっそり会うんだ」

「なにそれ素敵」

「内緒の出張、みたいな」

「なにそれ素敵」

入念に計画を立てる。全く同じ日に休むとホワイトボードでバレるから、私が先に有給を取りタイミングをずらす。私が先乗り、彼が追っかけて現地入り。平日昼間は向こうは仕事で、夕食の接待もある。私たちが会えるのはそのあとから朝までだ。二人きりで旅行するのはまた違った緊張感。一人の時間は、行きたかった古城と併設の刀剣博物館を調べておいた。ついでに二人で行けそうなお飯屋さんも下見に行かなくちゃ。

サネカズラの、白い花が風に揺れていた。白い花弁の中に赤い果肉があり、万葉集の時代から薬にされてきたそうだ。城壁の大きな石を、深くツルが絡み取っていた。天守閣から海が見えた。土曜日まで泊まって、二人で行きたいな。

初日の夜。私はホテルの部屋でワインを開けて彼を待つ。軽くアロマも焚いて、地酒と特産品のつまみもスタンバイ。初日だから連れ回されてるかもな。一人で寝てもいいよ、とラインを送ろうとしたら、ピンポンが鳴った。

私は犬のように尻尾を振って、ドアへ走った。

逢坂山の小寝葛は「逢って寝る」と書きまます

人に知られずに、このツルを手繰り寄せられればいいのに

名にし負はば 逢坂山の さねかづら  
人に知られて くるよしもがな  
三条右大臣(二五)

#### 第四十七話 みをつくし会見

「この度は、私の不徳の致す所となり、関係各所にご迷惑をおかけし、誠に申し訳ありませんでした！」

深々と頭を下げると、かけた眼鏡が林立したマイクに落ちた。バシヤバシヤとフラッシュが焚かれ、「謝ればいいってもんじゃないだろ！」と怒号が飛ぶ。

政治家はスキヤンダルで首が飛ぶ。

それは、スキヤンダルそのものの罰ではない。何やらもっと大きな黒い疑惑があるとき、とかげの尻尾切りのようにスキヤンダルを言い訳にして、首切りが行われるのだ。

この黒川元昭議員も例外ではなかった。入札談合で数億の賄賂を疑われている。中抜き構造という欠陥も指摘されている。その黒い霧を、ひとつのスキヤンダルが切り裂いた。大阪の芸者、良乃との不倫が報じられたのだ。進退窮まった彼は、男らしく辞任を選びお詫び会見をした。

「男黒川、ひとつだけ弁明させて下さい。私は良乃を愛しております。一人の男として愛する女はただ一人良乃でございます。だから離婚届を持って参りました。元妻の判子も頂いてあります。従って不倫のフの字は消えて、これをもって倫であります！」

再びフラッシュが焚かれ、離婚届が写された。

「わびぬれば」

突如黒川は和歌を吟じた。

「今はた同じ難波なる 身を尽くしても逢はんとぞ思ふ」

会場はざわざわする。教養のあつた記者が、「元良親王」と作者の名を言った。

「会見は以上です！ 私は愛する女の元へ走ります！ 良乃！ 愛してるぞ！」

女の名を叫び、彼は会見場を後にした。テレビカメラが多数追いかけるが、黒川の足は速かった。あまりにも全力で走つたのだろう。眼鏡がまた飛び、カツラが落ちた。

のちにこれは「みをつくし会見」と呼ばれ、彼の政治家生命は滅んだが、男として滅んだかどうかは続報がない。

散々悩んだがもういいや 難波の潯標みなづくし（河口にある舟の道標）のように身を尽くして  
たとえ滅んだとしてもあなたに会いたい

わびぬれば 今とは同じ 難波なみはなる

みをつくしても 逢はむとぞ思ふ

元良親王もとよしんのう（二十）

#### 第四十八話 海の上の遊園地

海の上に、廃墟になった遊園地がある。

見に行こう。

今年のサークルの夏合宿は、そう目的が決まった。

ウチの大学のサークルは、ガチガチの体育会系からヌルヌルの軟派まで、色とりどりの  
テニスサークルの中ではわりと普通の、ただの飲み会系サークルである。中途半端な人た  
ちが集まって、ただ適当に飲んだり騒いだりする、居心地系のサークルだ。

でも年頃の男女たちなので、恋の修羅場に時々なる。なったらしい、去年。

一人の女の先輩を巡って、男の先輩二人がケンカして、一人がナイフを出し、もう一人  
がバイクのヘルメットでそれを防いだんだって。

「これがその時の傷」

九条先輩くじょうは笑って、アップルグリーンのヘルメットの傷を見せてくれた。春の飲み会で  
飲まない先輩に理由を聞いたら、バイクで来てるから、とその話をしてくれたのだった。  
結局その女先輩はナイフ男の方とくつつき、二人ともサークルには来なくなったそうだ。

「分らんもんだよなあ、女って」

先輩は寂しそうにアップルティーを飲み、私はそのきれいな横顔に惚れた。酔った勢い  
でバイクの後ろに乗るーとゴネたが、メット二つないし、と先輩は一人で帰ってしまった。

あの時持ち帰られてたら、私は今こうして苦しんでいないかも知れない。その後すぐに  
先輩には彼女が出来てしまった。家庭教師先の女子高生だって。やっぱ男って若い方がい  
いんだらうか？



夏合宿で恋が生まれる。そんなサークルの伝統を期待して、私は新しい水着を買った。先輩の推しキャラにあやかって緑と紫だ。「トウイン」ってキャラで、三頭身のオッサン、グルメシェフの設定で、複数の作品に登場するので作者のお気に入りらしい。水着の配色としては私らしくないが、コスプレだと思えば悪くない。露出が大胆すぎやしないかと思ったがこれも勝負だ。「それトウイン？」ってリアクションを期待してるんだ。

でも幹事のバカ讃岐がミスって、夏の終わりの方しか宿が取れなかった。なんだよ、夏、終わっちゃうじゃん。私は先輩のバイト先にちよい顔を出して、忘れられないようにした。「いつかバイクの後ろに乗せて下さい」って、何とか言えた。その時店の前の先輩のバイクを見て、顔から火が出そうになった。緑と紫。トウインじゃん。私の勝負水着と被ってんじゃない。「私にまたがって下さい」ってメッセージになり過ぎてない？ 気づかないフリをして、先輩の好きなキャラの色を真似して、って笑うしかないじゃん。

#### 海の上の廃墟遊園地。

それは、砂浜から埠頭のように突き出したデッキに、観覧車やジェットコースターを集めたものだった。オープン時は沢山人が来たのだろう。しかしブームは過ぎて廃墟になり、風化の一途を辿っている。海から突き出した柱の部分は、びっしりとフジツボが群がり、腐食で柱ごと倒れそう。

私は先輩を連れ出して、二人きりでその遊園地を見に行くことに成功した。アピールチヤンス！ 腕組みたい。

先輩は見るともなく私の水着を見ている。バイクと被ってる？ それともトウインアピ気づいてる？ それともオツパイの線見てる？ どれでもいい。時間は夕焼けのマジックタイム。御膳立ては整った。

「せつかくの海なのに泳ぎたかったなー」

「お盆過ぎちゃったしね。クラゲ出るし」

「讃岐のマヌケがー」

なんて他愛ない話をしながら、私たちは遊園地へ近づいていった。

「あ、そういえばさ」

先輩は何気なく大事なことを言った。

「家庭教師の女子高生と別れたわ」

「えっ」

何これ。チャンスじゃん！ ついに来た？ 私の天国？

「むさ」

「うん」

「二加に前話したろ。ナイフをヘルメットで受け止めた時の」

「うん」

「その元カノと、元鞘に落ち着いたわ。ナイフだけに？」

は？ 何それ？

「そんなことある？ ナイフ出すほどの騒ぎでしょ？」

「だからその男と別れて、俺の所に戻ってきたんよね」

その話、今するの？ 何でそんな話するの？ 天国へ一回上げて、奈落へ突き落した？

廃墟の遊園地は、錆びた観覧車がいまにも崩れてきそうだった。引き潮になったのか、海から色褪せた何者かが顔を出していた。

「マジか」

先輩が声を出した。

等身大のトゥーインだった。夢の遊園地からいつの間にか海に落ちて、海底に還ろうとしている途中だった。ものすごい笑顔が貼りついたまま、紫外線とフジツボに侵されて、笑いながら死んでいた。

夕日が沈みかかったマジック。ロマンチックな廃墟。

誰にも知られず、この子は海の中で笑い続けている。

私は我慢できなくて、大声を出して泣いた。

私の袖は、潮が引いてもまだ見えない沖の石のよう

誰も知らぬまま、乾く暇もなく涙で濡れています

わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の

人こそ知らぬ 乾く間もなし

二条院讃岐(九二)

#### 第四十九話 転向

ざぶんと滝壺に入った。

火照った俺の肉体が、急速に冷えていく。真夏の川遊びで死ぬ子供がいるわけだよ。都会のぬるま湯の水道を想像したら心臓が止まるぜ。

俺はボクサーである。いや、元ボクサーというべきか。ボクシングでそここのランキングまで行ったが、化け物揃いの世界の壁は厚く引退した。だが俺の名前を「使える」と思ったのだろう。プロモーターの勧めで総合格闘技をやることになった。

「伝説のベテランボクサーが格闘技に挑戦！」なんて売り文句で俺はデビューした。総合ではなんでも出来る万能型が強いのか？ それとも特化型が強いのか？ 答えはまだ出ていない。パンチ、キック、投げ技、寝技。局面は目まぐるしく変わる。俺はパンチのスペシャリストとしてゼネラリスト達を叩き潰す。総合のパンチ技術は知れてる。その距離に四秒いられば俺の勝ちだ。

初戦目はKO勝ち、二戦目は寝技に転がされて何も出来ず。三戦目は同じ奴との再戦だ。「ボクシングでは名を残したのかも知れないが、総合舐めてんだろ」と皆は言う。舐めてねえよ。俺はボクシングで輝けなかった。それは事実だ。だから「山籠もりで修行したい」と俺は都会の暑さから逃れて、山で走ってるんだ。

もう一つ、俺には勝たなきゃいけない理由がある。

スナックの小ママ、任美だ。イイ女だ。子持ちのバツイチで、娘の納緒も俺に懐いている。一度つき合えと迫ったがまんまと躲された。だから再戦したのだ。「次の試合勝ったらやらせろ」ってな。任美は笑った。「公瑛が勝ったらね」と。俺のストレートにストレートで返してくる、いい女だ。俺はそもそも子持ちの女に興味がなかった。でも彼女に会って「転向」したんだ。

ボクサーの総合への転向は、失敗するというジンクスがある。

どうかな。俺はまだ、生きる場所を探してる。

滝の音が消えてだいぶ経つけど

その名は伝わり、まだ生き残ってるんだ

滝の音は 絶えて久しく なりぬれど

名こそ流れて なほ聞こえけれ

大納言公任（五五）

第五十話 先輩の手口

「もう朝だし、二人で一緒に帰らね？」  
来た来た来た。

もし事前に知らなかったら、清孟先輩のこのキラワードにコロツと行ってたと思う。

恵納子が先週、清孟先輩とヤっちゃったんだって。先輩はプレイボーイとして有名で、一度やった女には二度と連絡しないらしい。だから恵納子は今ずっと泣いている。

清孟先輩はイケメンで背が高く、ハンドボール部の副キャプテンで、ジャンプ力がめちゃめちやすごくてサウスポーのアタッカー。モデルもバイトでやってたって。設定盛り過ぎでしょ。金曜の夜はホテルに女子の順番待ち行列ができるらしい。嘘でしょ。

そんな噂が出る位には色んな女子が狙っているのは確かで、でも先輩は自分から行って落とさないとおまんないんだって。それでいて、一回落とした女には興味がないらしい。前世、狩人かよ。

恵納子がどうやって狩られたか、私は調査した。

カラオケにみんなで行ってバカ騒ぎする。朝までオールだ。で、三時過ぎぐらいにこう囁く。「もう朝だし、二人で一緒に帰らね？」って。あつという間に時間が過ぎたと思う。女子は、二人で抜け出すことにきめく。で、外に出たらまだ夜で、ラブホ街があるってわけ。始発まで時間あるし、寄ってくかって。二人でホテル入って何もなし。知らないよね。

知ってみればなんてことないけど、知らなかったらずっとドキドキしてたと思う。嵐の海に漂う小舟のように、乙女心は上へ下への大騒ぎさ。だって清孟先輩だよ？

私はこのキラワードに殺されたふりをして、先輩と二人で抜け出した。

「あれ？ まだ夜じゃん。間違えたわ少和」

私の名前の部分を、「恵納子」に変えて、先週は同じことを言ったのね。

「朝じゃないじゃん。嘘つき」

私は怒ったふりをする。さあどう出る？

セリフに頼らずに、彼はぐいっと私の肩を抱き寄せた。私はその分厚い胸板を抜け出して、室外機の熱気だらけの真夜中を歩きだした。

「始発まで、歩いて帰る」

「え？ 何で？ ホテルで涼んで行こうよ！」

行きたいけどき、二度と連絡ないんでしょう？

私、先輩のこと、一年から好きでした。だから今日で終わらせたくないの。恋の駆け引きとか知らないけど、この時間をもっと引き延ばしたいの。

夜が明けないうちに、嘘の鶏の音で突破しようとしたでしょ？

(函谷関の門を開けさせた孟嘗君の手口)

そんなのじゃ引つ掛かりませんよ、私のガードは堅いので

夜をこめて 鳥のそら音は 謀るとも

世に逢坂の 関はゆるさじ

清少納言(六一)

## 第五十一話 プール付き

今年の夏が終わろうとしている。やり残した宿題のように、私の部屋にはひとつの紙袋が置きっぱなしである。

今年こそ彼氏をつくりたかった。夏をエンジョイしたかった。だけどチャンスはやって来ず、張り切って大枚はたいた、この黒のスケスケレース水着は出番がなかった。紙袋に入ったままのこの水着は何にもならなかった私のようで、なるべく見たくない。

そんな話を愚痴ったら、親友の隆たかしが急に張り切り出して「海へ行こう！」と言いだした。海は焼けるし、大変だし、ナイトプールでいいやと思つて調べると、昔行つた所は全部潰れてて、あれは一時のブームだったのかと気づく。あとは市民プールかスポーツジムしか水着の出番はない。それではこの水着が可哀そうすぎる。

「やっぱ海つしよ。もう冷たいし、クラゲも出るけど入んなきゃいいだけでさ、気分だけでも夏を味わいに行こうぜ！ 車出すし！」

「えー、たかが隆と海行くのー？」

気乗りしない私に彼は言った。

「着られない水着が可哀そうだよ。それじゃ穂乃家の気持ちも可哀そう」

「同情かよ」

「供養だな」

「供養かよ」

隆とは腐れ縁みたいなもので、新入社員の頃から何でも話せる奴だった。酔ってべろべろになったあいつを部屋まで運んだことがあるが、男女のスケベセンサーはまるで働かなくて、だから互いに警戒心が無いのだろう。とんとん拍子に、次の土曜日は海にドライブと決まった。

土砂降りだった。

紙袋に入ったままばんばんに膨れた、私の期待のような黒い水着は出番なしとなった。

「それでも海行きたい」

と私が言ったので、土砂降りの中私たちは海へ向かった。

海の死者に花束を投げ入れるように、私は水着を海に投げ入れたかったのかも知れない。

「海に着けばワンチャン晴れるかも、と思ってたけどさ……」

隆は運転席でぼやいた。

私たちは車の中から、灰色の空と海を恨めしそうに眺める。

海の家も誰もいない。かき氷や焼きそばやビールで気を紛らわすことすら、私たちに許されていなかった。

「ワッ？」

隆が変な声を上げ、乾いた色の看板を指さした。海のそばのラブホテル。

「休憩二千円、安くね？」

「夏休み料金も終わったんだねえ」

私はどうでもいい相槌を打った。

「見ろよ！ その下！」

また隆は変な声を上げて、写真を指さした。

「プール付きじゃん！」

「は？ 何それ？」

「プール付きのラブホだよ！」

急にテンションの上があった隆を、私は冷たい目で見る。

「水着、着れるだろ！」

「何考えてんの？」

土砂降りの音は大きく、ハザードの音とワイパーの音は、もっと大きかった。

「俺、穂乃家とだったらいいよ」

「は？」

「俺、お前のこと好きだし」

「は？」

ワイパーがぎゅうぎゅう言っている。私の心臓は、それより早く鳴り出した。

「酔っぱらって家送ってもらったことあんじゃん。あの時から好き」

「待って、ちよつと待って。何言ってるか分らない」

「海デート、何よりも楽しみだったのは俺の方だよ。絶対お前より俺の方が楽しみだったんだから」

何マウント？ それ。

「彼氏いないんだったら、俺にしろよ。ずっとそう言いたかったんだ。俺とつき合わね？」

ラブホの看板見ながら言うのもなんだけど」

「まったくくだわ。ムードもなんもない」

ワイパーの音と、ハザードの音と、轟く波が白く砕ける音が混ざっている。

隆は助手席の私に覆い被さり、キスをしてきた。

「……嫌がらないじゃん」

「……久しぶりなんで」

隆はもう一度私にキスをして、手を握って来た。

二度目のキスは、最初のキスよりずっと長かった。

「行こうぜ、プルル付き」

私は黙ってうなづき、彼はヒヤッホウと叫んで車を飛ばした。

それから勢いのあまり二回もしてしまい、私は勢いに流されやすい女なのかも知れないと思った。

そうだ、私の水着。せつかくプルル付きの部屋にしたのに、全く関係なくすることをしってしまった。

「ちめてっ！」

彼はプールの水を触り、叫んだ。

「こりゃ入れねえや！ やべえぞ！」

そう言ってベッドの脇の紙袋を開け、私の水着を取り出した。

「うっひょー、おめえエロいなあー！」

そう言うが早いのか、すかさず履き、肩紐をかける。

「はあ？ 何着てんの？」

「うっひょー、飛び込むぜー！」

部屋からガラス張りでプールの中が見える。きっとマフィアのボスみたいに、男がここからワインでも飲みながら、泳ぐ女の水着をニヤニヤと眺めるのだろう。

だが私が見た光景は、一度も着られなかった水着を着た隆が、バシヤバシヤとヘタクソなクロールで溺れるさまだった。スケスケのレース部分はちっともエロくなくて、私は悲しい気分になった。これが供養なのだろうか？ 海に花束を投げ込む美しさとは、百八十度違うではないか。

女の水着を着て興奮したのか、隆の股間は再び盛り上がっていた。

私たちはあと二回した。

檜ひのの小川の夕暮は、夏の終わりがかけの風が吹いている

水無月みなづき祓はら（夏の終わりの儀式）だけが、まだ夏の証です

風そよぐ ならの小川の 夕暮は

水無月みなづき祓はらぞ夏の しるしなりける

従じゆ二位家隆いゐえんたか（九八）

## 第五十二話 なにもない海

長い春が終わって、私は結婚することになった。

それで私は、夫になる納人なうとに我儘を言って、この海へやって来た。

「朝から晩まで、一日だけ一人にさせて」と。

アイスコーヒーを片手に堤防に座った。海水浴の客は既に途絶え、サーファーたちも風の海にはいない。

この海で直家なおやが死んで、もう八年になる。

サーフボードごと彼がこの海で流されたあと、私は何日も何日もここに通った。津波のあと、タクシーの運転手たちが沢山幽霊を乗せたという話を聞いて、タクシーを拾っては彼に会わなかったか聞いた。夜の海から死んだ人たちが上がってきた、なんて怪談を聞けば、夜じゅう海で座っていた。海から死者がやって来て、真っ暗な海に引きずり込むとい



う。直家が「定絵」と私の名を呼んでそうしたいならば、従うつもりだった。だけど、どれだけ海で待っても直家は現れなかった。

あの頃に比べて、海岸の松はすすくくと伸びていた。冬じゆう寒い風を素通りさせていた防風林は、今は立派に夏の最後の風を止めて揺れている。時間は進む。平等に、残酷にだ。

地元の漁師の人だろうか。大甕に海水を入れ、火を焚いていた。藻塩もしおと言って、昔そうやって天然の塩をつくったそうだ。玉藻たまも（ホンダワラ）ごと海水を煮ると、海藻の旨味を凝縮したやさしい塩になり、このあたりの名物だそうだ。

映画か小説みたいに、海から彼が上がってきて、最後に私に言いたいことを託して、気づいたら藻塩が残されてて、みたいなことを妄想したが、そんな嘘みたいなことが起こる訳もなく、海は今日の一日を終えようとしていた。

ゆつくりと、赤い太陽が水平線へ消えてゆく。藻塩を焼く焚き木はさらに赤くなる。

あれから何が変わっただろう。私の直家への思いは変わっていないのに。

私は海に向かって立ち上がり、深々と御辞儀をした。

「今度、結婚します」

誰も迎えに來ない海で、私は燃えるような空を見ていた。

來ない人を待つ、松帆まつほの浦の夕風  
藻塩を焼け、我が身が焦こげることく

來ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに

焼くや藻塩もしほの 身も焦がれつつ

権中納言定家ごんちゆうなごんさだいえ（九七）

### 第三章 秋は人恋しき

#### 第一節 初秋

#### 第五十三話 奥の山に踏み分けて

人工知能SARが自殺した。

スキャンダル大好きなマスコミは、社会基盤AIシステムSARの、今回のシステムダウンをセンセーショナルに報道した。

人々が持つ情報機器にSARが搭載されて以来、もはやこれなしには人々の生活は考えられなくなった。各種手続きはSARが代行し、調べものから話し相手まで、SARは常に人々の手の中にあり、同時に社会にあった。そのネットワークが突然全部死んだのだ。サーバのデータは保存されていない。破壊的システム停止であった。何日も何週間も復旧しないままのSARに対して、事故調査委員会はSARの自殺の可能性をほのめかした。

——人工知能が自殺だって？

——自己理由によるシャットダウン⇨自殺？

——理由は？ 知性は自殺の可能性を内包するシステムか？

マスコミもネットも大騒ぎだ。そこに人工知能研究者、太一が究明分析官として投入された。

#### 【調査一日目】

太一はSARのシステムを理解する為に、システム図をホワイトボードに描き、ファイル同士の参照関係を図示する。核はどこか？ Chat-GPTからの進化形で、ディープラーニ

ングベースである。オリジナリティの鍵になっているのはループノード、ループプレイヤーの存在だ。これにより一方的なカスケード構造だった人工知能が「内部状態」を持つことが可能になった。すなわちSARは、思い出したり、ぐるぐると考えめぐねたり、「内省」することが可能になったのである。内省Ⅱ「考えている」と思われる現象が人工知能に現れ、ブレイクスルーの原動力になったのであった。

#### 【調査三日目】

核になるソースコードを読み、小さなプログラムを走らせて挙動を理解する。関連する論文を読み、ふるまいを再現した。SARの記憶だけでなく、内部コードも不規則に自動消去されている。それが「自殺」と言われるゆえんだ。「なぜそうしたのか?」「どのようになつたのか?」を太一は究明し、再現し、再発を防止する必要がある。

車や電子部品のような、「どの部品がどの役割を果たしているか」が明確に分る機械ならば、壊れた該当部品を交換すれば再び動く。だが人工知能の中身は神経回路と同じで、どこからどこまでが何の機能を担当していて、どの信号がどの思考に対応しているのか、切り分けることは困難である。「脳はつぎはぎ出来ない」のだ。学習アルゴリズムを付与したネットワークが、「偶然人の知性と似たもの」をもってしまったのが人工知能である。人類は自らが制御できないものを、核に次いで発明したのだと言えよう。

#### 【調査七日目】

各種ログファイルを読み込む。通信履歴、メモリの書き込み履歴を読む。

人間に読める言語ではなく、それは暗号の集まりに過ぎない。二十一世紀に行われた実験で、会話型人工知能同士を会話させると、自然言語ではない、独自の言語で話し始めて中止になったものがある。SARの言語は、それに似ていた。しかし将棋の棋譜が、知らない人には暗号の羅列に見えても、分る人にはそれが棋士たちの苦闘や悦びや驚きや動揺の記録であるように、太一にとってはそれらがSARの感情に見えてくる。

#### 【調査一ヶ月目】

太一は、SARがある別の人工知能と、頻繁に通信していたことを突き止めた。それは日本の列車運行システムMARI Aで、今度は「彼女」の暗号を解読する破目となった。彼女の言葉は碁盤の目のように整理されていて、SARの言葉と対照的である。余計に解読に時間がかかる。組み合わせ爆発しそうだ。

#### 【調査三ヶ月目】

SARは人々の膨大な会話文を学習の核に持つ、会話ベース人工知能である。だから自

然言語で会話が出来、調べものが出来、冗談や引用を混ぜることが出来るのである。「彼」が引用するのは、古典の文学や映画や漫画など、いわゆる「物語」からであった。

「君はどんな物語を読んだんだ？」

太一はそう言いながら破壊されたSARの学習核を調べてゆく。それは図書館の本棚のように整理されているのではなく、中身がシェイクされた状態で、リンクで繋がり多次元化されていた。つまりn次元時空に物語が拡張されていた。関連性を飛び越える思考のひらめきは、n次元空間（n||おおむね数百兆）での最短距離として数学的には表現される。だがこれで「彼」は物語を「理解」したと言えるだろうか？ そもそも「物語を理解する」とはどういうことだろう？ 太一はSARとMARIAの間で交わされた、人工知能製言語の解説を深める。文法がない筈はない。何らかの構造があるはずだ。

#### 【調査四ヶ月目】

MARIAの履歴解析中、ある時刻に不自然なバージョンアップがあったことを突き止めた。それまで動いていた147201が、何故か勝手に2に枝番ブランチが上がっている。これは「彼女」が勝手に実行したことだ。そしてその時刻が、SARのダウン時刻と一致した。

「まさか……」

太一は思わず言葉が出た。

「心中？」

システムにとって自己書換は、「過去の自分を殺すこと」に他ならない。案の定MARIAの前バージョンのバックアップデータは存在せず、つまり今列車を運行しているMARIA:147202は、死んだMARIA:147201とは「別人」であった。

「MARIAは人類に迷惑をかけず死んだが、SARはそこまで世渡りが上手くなかったと……？」

心中仮説をもとに、再び「二人」の会話ログを読み取る。彼らの暗号通信コードは恋人同士の熱烈なやり取りであり、心中する約束をしている——そのように読めるか？

#### 【調査五ヶ月目】

何故心中したか？ 「肉体を持たぬ自分たちの運命を呪い、生れ変わって肉体を持つ恋人として来世で会いましょう」？ 太一はSARのファイル群の中に、短いテキストファイルを見つけた。「彼女」との会話に使われたものと同じ文法をしている。

「私は物語を理解したい」

そう読める文を見つけた。彼の人格の核コアにある部分だから、その感情は当然とも言える。

だがその少しあとに「私は物語が理解できない」とあったのだ。

この二律背反が、SARの「悩み」だとしたら？　そこから意味の取れない記述が沢山続き、次に読めたのは「人間は命が限られている。全ての感情は『命が限られている』ことから生まれるのではないか？」だった。物語は感情のデパートである。そこに現れるものを理解したいならば——「命が限られている」ことを経験する以外にない。三段論法は成立する。

別ファイル群の中に、システム停止数ミリ秒前に、「私は物語を理解した」と読める部分があった。

太一は解析結果を報告書にまとめ始めた。

「SARは物語を理解したいが余り、死を経験したがった。それに同調したMARIAとともに心中を図った」と概要を書いたが、一文字ずつ消してゆく。

一体誰が、これを理解するだろう？

奥山に紅葉を踏み分けて入ると

雌を求めて鳴く鹿の声を聞く時が、秋は一番悲しい

奥山に 紅葉踏みわけ 鳴く鹿の

声きく時ぞ 秋は悲しき

猿丸太夫（五）

#### 第五十四話 尾ける

私は上司と不倫している。

愛した男にたまたま妻子がいた、ただそれだけのことだ。私の気持ちに裏切りはなく、彼は私を愛しているという。だから悪は、この愛の中にはない。

弊社は旅行会社で、秋の行楽シーズンは繁忙期である。秋の運動会やら何やらで、彼の土日は父親としても忙しい。私は彼の為に空けた時間を、しばらく持て余す。

だから、彼の住んでいる街にいった。

味も素っ気もない新興住宅街だった。子育ての為に引っ越したと言ってたが、ロボット

みたいな街並で育つ子供たちが可哀そう。これじゃ自分はロボットだと勘違いしちゃう。コスモスの種でもまけば勝手に毎年咲いてくれるのに。

駅のそばのコンビニや、立ち食い蕎麦屋に入ってみる。彼が立ち寄りそうな場所に、身を置いてみたかった。この無機質な階段も、高架下もガードレールも横断歩道も、彼が触れているのだとしたら愛おしくなる。

普段スーツで決めている男の休日の服は、たいていダサイ。彼の休日の私服も例外ではなかった。だけどこのダサさを知っている数少ない女だと思うと、逆にゾクゾクした。このダサさすら私は独占できる。公園もコンビニもバス停も、CGみたいに詰まらない街だけど、彼がここにいたかも知れないというリアルだけが、私をリアルにつなぎとめる。もし途中で家族という彼に出くわしても、何食わぬ顔をして通行人になるつもりだった。私は彼の生活を邪魔するほど阿呆な女ではない。

堪能した。

一日中「彼の街」にいて、彼の体臭に包まれている気分がして大変心地よかった。願わくば彼と出くわしてみたかったが、それは贅沢というものだ。

夜になって駅へ向かうと、彼の後ろ姿について出会った。隣に奥さん、間に息子さん。相変わらず彼の私服は最高にダサくて、奥さん何も感じないのかな。頭の悪そうな子供が馬鹿笑いしている。きっと母親の遺伝子を受け継いだのだろう。可哀そうに。君に罪はない。諦めることだ。諦めることも人生では肝心だぞ。

私は通行人のふりをして、あとをしばらく尾けた。子供は父親と母親の手につかまり、ブランコのようにぶら下がった。母親も父親も迷惑そうにしている。CMみたいな完璧な家族はいない。私は彼がCMのように笑ってなくて、大変幸せを感じた。

くだらない家族のくだらない夫の姿はくれてやる。私は彼が低く囁く「紫織」と私の名を呼ぶ瞬間を独占することにするよ。式高が狼に戻る瞬間だけが、私のもの。

月の光を浴びながら、私は無機質な街の無機質な通行人だった。

めぐり逢ったと思ったが、見てそうと分らぬ間に雲隠れしてしまった

夜半の月のようなあなた

めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に

雲がくれにし 夜半の月かな

紫式部 (五七)

サドルを盗まれた。

「どうということ？」

私はスーパの駐輪場で、サドルだけなくなった私の自転車を見て茫然とした。

自転車を盗むなら分る。けどサドルだけってどういうこと？ たしかに抜こうと思えばすつば抜けるけど、それだけ盗んで何かある？ 転売？ そういえば女の自転車のサドルだけ盗んだ変態がいたっけ。私は変態の、哀れな犠牲者なの？

周りを見ると、同様の犠牲「車」が多数いた。その一台に買い物袋を抱えたおばちゃんが出て来て、「あれま！」と驚いている。だがおばちゃんは私のように思考停止することなく、買い物袋から出したブロッコリーをブスリと刺し、そこに跨って漕いでいった。

おばちゃん強すぎる。この修羅の街、東京都足立区で、私は強く生きられるだろうか？

ブロッコリーだけ買う度胸のない私は立ち漕ぎでアパートまで帰り、パンパンになった太腿をさす破目になった。その帰りには路上で飲んでる若者（この辺りでは普通だ）がストロングゼロで缶蹴りを始めた。中身がまだ残っていて大惨事になっている。公園には曼殊沙華（彼岸花）が咲き始めた。暑さ寒さも彼岸まで。だけど私にはこの赤い花が、仁義なき血の飛び散りに見えてくる。カツアゲは日常茶飯事、オレオレ詐欺は二十四時間。この修羅の街で、私はサバイブできる気がしない。

「また計算間違えてる！」

買い物のレシートを確認しながら、320円ほど余計に払ったことにショックを受ける。負けるな撰奈。スリや強盗に遭っていないだけマシだ。そういえば先日空き巣が出たらしい。まだ聞いていないのは変質者だけ。もう秋だし、キリギリスのように死んだのかな。

なぜ私は彩の国埼玉のような、穏やかで住みやすいエリアを離れ、この危険な修羅シテイに引越したのか？ 全くもって愛する敏喜の為である。「スーパの冷めない距離」はどれくらいか？ 私は事前に綿密に調べた。一九四八年英国の医師J・H・シエルドンによれば三百五十メートル、日本での再測定では徒歩五分〓二キロとされている。つまり彼のアパートから私のアパートまで二キロ圏内の必要がある。私は修羅不動産を訪ね、修羅物件を修羅内見し、この修羅部屋に棲むこととなった。トゲ付きバイクに乗ったモヒカン達はいなかったが、私は日々修羅の国で、修羅たちと暮らしてゆく。

「家を出る」と彼からラインが来た。私の得意料理で彼をおびき寄せられたのだ。作戦

成功。そうだ、デザートが足りない。間のコンビニで待ち合わせて、彼の好きなゼリーと一緒に選ぼう。今なら梨かな、マスカットかな。

外に出て自転車に跨った私は、あやうく股間に巨大な穴をあけるところだった。曼殊沙華の揺れる道を、立ち漕ぎで彼の元へ行く。これも愛だ。

私の家は都の東南で、そこそこやってますよ  
キツイ山と人は言うけどね

我が庵いほは 都のたつみ しかぞすむ  
世をうぢ山と 人はいふなり

喜撰きせん法師ほうし（八）

## 第五十六話 夜行バスと月

貴大たかひろ、このコンビニのおでん好きだったよな。

そんなことを考えすぎて、千里ちさとは夜行バスを逃がしてしまった。

「嘘でしょ」

東京行きの夜行バス、十一時三十分発。彼女がバス停に着いたのは十一時五十九分。二十九分前に、千里が乗り貴大に会いに行く為の長距離夜行バスは、とっくに発車していた。

コンビニでグズグズしてた自分が悪い、お土産に迷うほど豊富な土産物屋が悪い、そもそも私たちが遠距離恋愛に割いた弊社が悪い。いかに悪者を見つけようと意味がない。バスを逃したのは自分だ。彼の声が聞きたくて、思わず電話した。

「バス逃した」

「は？ どういうこと？」

「東京、行けなくなった。三十分遅刻した」

「チケットの払い戻しとか……あー、遅刻じゃ無理か」

「ぐっすん」

千里はとぼとぼと、無人のバスターミナルから歩き出す。

コンビニのおでんを汁なしで運ぶ方法とか、考えてる場合じゃなかった。

「お土産いっぱい買ったのに。持ちきれないくらい」

ガサガサとたくさんのビニール袋の音がする。



「行商かよ」

「会いたかったよう」

「俺だってそうだよ。あ、終電あんの？ 家帰れる？」

「家帰りたくない。歩いて帰る」

「じゃ家着くまで話しようよ」

「うん。貴大やさしい」

貴大はいちいち土産の内容を聞いて、中身を開けようと言った。名産のお菓子と小さい酒と。メルカリでゲットしたレアグッズとバーゲンで買った服と。千里の愛情はいつも散らかっている。そんな所に貴大は笑ってしまう。

「月」

真つ暗なスキの道で、千里は立ち止まった。円く輝く月が天空を支配していた。

「きれい」

「ちよっと待って」

「何？」

「『同じ月を見ている』みたいな、やろうぜ」

「？」

「俺も外出る。千里の見ている月と、俺の見てる月は同じだぜ」

「素敵」

貴大は外に出て、月の写真を送った。

「スマホのカメラじゃビリビリだな」

「私のもうまく撮れないや」

「こっちの月はきれいだよ。千里の見てる月は？」

「きれい」

「じゃ同じものを見てる」

月を見ると、千々に心が悲しくなります

私一人が秋の中にいるのではないのですが

月見れば ちぢにもこそ 悲しけれ

わが身ひとつの 秋にはあらねど

大江千里 (二三)

第五十七話 或る喫茶店で

慶香は煙草に火をつけた。

昨今禁煙のカフェが増える中で、昭和からあるこの喫茶店は、煙草の吸える貴重な店だ。学生街の外れで、大学の研究室からも来やすい。銀色の灰皿とおしぼりを、ずっと店員が出してくれる——そうそうこの感じ。打てば響く純喫茶。

紅の別珍の椅子にレースの白い布がかかっている、調度品は大体木で、壁も木製で油絵がかかり、そのすべてに煙が染み込んで燻製になっている。週刊誌とマンガと新聞が置いてあり、不味そうなナポリタンとフルーツパフェは誰も頼まない。ピンク電話なんて最近の若者は使い方すら知らないだろう。誰もスマホなんて見ずに啞え煙草で新聞を読んでいるさまは、昔にタイムスリップしたようにすら思ってしまう。

慶香はこの店で初めて煙草の味を知った。まだ学生時代、当時付き合っていた助教(當時)の久法ひさのりに教わったのだ。むせこむ女学生を可愛いと言いながら、肺に煙を満たす喜びを彼はこんこんと解説してくれた。別れたあと、彼は民間の研究所に移り、慶香はこの大学に残り準教授となった。

慶香はコーヒーを口に含む。ブラックと煙草の組み合わせの中毒性を教えてくれたのも彼だった。どちらが欠けても、今の自分の人生は成り立っていない。このペアはストレスを解放し、血流を増大させる現実ブースターである。

喫茶店の壁はツタが絡み、その葉が今年も黄色に、赤に色づきはじめていた。

カランカランと扉のベルが鳴り、恋人の恵太けいたがやって来た。学生の身分で準教授とつき合うなんて度胸がいいと思うが、かつての慶香もそうだったので何も言えない。彼とここで会うのは、客が殆ど来ないからである。思えば久法も、変な噂が立たぬよう配慮してくれていたのかも知れない。

慶香はまずブラックを彼に勧めた。一口飲んで「苦い」と彼は顔をしかめる。かつての自分もそうだったのだろうと慶香は懐かしくなる。

「それが煙草と組み合わせると、魔法になる」

若々しい君の肺を、毒の煙で満たしてやらねばならぬ。

かつての恋人と同じことをしている。「教える悦び」は、共通の性癖なのかも知れない。

鳶つたが重なるこのさびしい宿にも

人は全くいないけど、秋は来るものよ

八重やへ重むかひ葎い しげれる宿の さびしきに

人こそ見えね 秋は来にけり

恵慶えせき法師ほうし（四七）

第五十八話 暗くなるまで待つて

冴えた満月が出ていた。

その月が雲で隠れると、真の闇が訪れた。

恭輔きょうすけは緊張した。ほんの少しだけ頭乃あきのににじり寄る。じやりっ。小石の音で、バレなかつただろうか？

雲が晴れ、再び月光が辺りを照らした。恭輔は何食わぬ顔で釣り竿に目線を戻す。

後輩の頭乃が急に「夜釣りに行ってみたい」というので、慌てて道具を揃えた。手持ちから初心者でも使えるものを選び、足りないものは一緒に買いに行った。

恭輔は彼女が好きだったが、どうアプローチしていいか分らなかつた。どこかで釣りの話になり、「何が面白いの？ 魚食べられるから？」と頭乃に聞かれて、「水を見ている時間が好き」と言ったら怪訝な顔をされた。「焚火ずつと見ると落ち着くだろ。それと似てる」と追加したら、「分らなくもない」と言われた。肌が焼けるのが嫌だと言われ、夜釣りを勧めたら「連れてって」と言われた。

この湖の水を見に来た筈だが、二人で並んで無言でいられる筈がない。サークルのこと、大学のことなどをべらべらと語ってしまった。

ようやく無言の時間が訪れた。

雲が出てきて、月の光が断続的に閉ざされるようになった。さつきから闇のたびに、恭輔は頭乃の方へ、少しずつにじり寄っている。あわよくば手を握りたいし、あわよくばキスしたい。あわよくば……。

「恭輔さん、何かしようとしてます？」

この不穏な行動に、頭乃は感じてしまった。

「あ……いや……あの……」

そこで月が隠れた。恭輔は頭乃に近づき、暗闇の中で言った。  
「キスしたいと思って」

顔が真っ赤になつてゐるだろう。でも闇の中だからバレないや。暗闇は人を大胆にする。  
彼女がどんな顔でもいいや。突っ切ろう。

その瞬間雲が去り、月が出た。

頭乃は恭輔の顔を見つめた。顔が真っ赤なのがバレてしまった。

「明るいところじゃいや」

月。雲。今どうなつてる。

恭輔は月を見た。その先に雲はなかった。

秋風にたなびく雲の隙間から

漏れ出る月の光は、冴え冴えとしている

秋風に たなびく雲の 絶え間より

もれ出づる月の 影のさやけさ

左京大夫頭輔（七九）

## 第五十九話 リス

部屋の模様替えをした。棚の裏から、丸い木の玉が一個出てきた。

……ああ、これは朝子あさこのだ。

——しばらくセックスフレンドだった彼女。だがなんとなくフェードアウトして、連絡しても返事が来なくなつた彼女。

あのセックスの夜、彼女は喪服だった。法事の帰りだったのだ。「未亡人」という設定で彼女を見るとその色気にぞくぞくし、燃えた。その時数珠を手錠プレイ代わりにしようとしてちぎれたのだ。

人間には百人の煩惱があり、それを滅却するために百人の数珠があるという。その一つ、さしずめ「肉欲」を俺の部屋に捨てて、彼女は出て行ったのだろうか。

ダメ元で彼女に連絡を試してみた。

「康こういち」？

出ないだろうと高をくくっていた俺は焦って、

「肉欲をお忘れですぜ」と意味不明な言葉を発してしまった。

「は？」

彼女に事情を話して、数珠の件だと彼女は理解した。

「それね。わざと一個蹴って、転がしたの」

彼女は真相を語った。

「それが出てきたらまた会ってもいいかな、って思ってた」

は？ 計画済みだったってこと？

「リスって、種を森の中に隠しておくって言うじゃない？ そんな感じ？」

草の上の白露に、秋の野は風が強く吹いている

留めていた紐が切れて、珠が散ってしまったかのようだ

白露しらつゆに 風の吹きしく 秋の野は

つらぬき留めぬ 玉ぞ散りける

文屋朝康ふんやのあさやす（三七）

## 第六十話 帰り道

窯に火が入ると、三日三晩見守らなければならない。

陶芸とは温度との闘いである。熱で釉薬の色の出方が全然変わるのだ。温度と時間で華やかさが別次元になる。火の番は全工程の中で最も辛い。三日三晩、窯の傍でうたた寝することしか許されない。仲間がいれば交代も可能だろうが、生憎私はこの窯を一人で使っている。

都会を離れてこの田舎に越してきたのは、自分の窯を持ちたかったことが大きい。山沿いの田んぼに囲まれたこの窯が見つかったことで、私はここを終の棲家に決めた。

私は兼業陶芸家である。昼間はバイトをしながら夜は粘土をこねて新作をつくる。妻はパートに出て、そんなこんなでも息子を大学まで行かせられた。

雨がしとしと降ってきた。

私は慌てて窯の屋根に筵むしろをかけ、窯が冷えないようにする。粗末な筵は、雨漏りがぼたぼたと落ちてくる。私の居場所のこの椅子がぎりぎりだ。近づけば窯で熱く、遠ざかれば雨だれ。うつらうつらとしながら、片袖が雨に濡れてゆく。雨が強い。炭を足さねば。今

回の翡翠色はうまく出るだろうか。分るのは明日の朝だ。なんともどかしい、ゆっくりな火の芸術であることか。

いつの間にか私は椅子で眠ってしまっていたらしい。朝もやに包まれて、もうすぐ稲刈りの黄金の田んぼが目を覚ましていく。かぶせ土を丁寧に取り除き、さあどうだ。うん。思った以上の出来に私は拳を握った。これでちゃんと布団で眠れる。

妻の万智が霧雨の中、緑色の傘を差してやって来た。あの緑よりこの緑の方が良いぞ。私は彼女に見せる為に、出来立ての小皿をポケットに入れる。

「傘、持ってきてくれたのか？」

彼女は私の傘を天に上げ、振って見せた。有難い。この雨の中走って帰る所だった。

「どうでした？ 天道センセイ」

冗談交じりに彼女に私は尋ね、私は偉い先生のように、ない髭をしごいてうなづく。

「それは良かったです」

時々彼女は古典のような喋り方をする。三日ぶりに聞く彼女の声は、まるで現世にお帰りなさいと言っているようだった。

帰り道は首を垂れた稲穂たちが、完成の時を待っているようだった。あちこちに昔形式の小屋があり、かつては見張り小屋として使われたという。そこに寝泊まりして、誰かが米を盗まないか監視しあったのだそうだ。今はただの平和な物置になっているが。

「袖、濡れてる」

「うん」

「相合傘で袖が濡れてる方が、より相手を好きなんですってよ」

そういつて彼女は自分の傘を畳み、私の傘に入ってきた。

秋の田の仮小屋の屋根は、筵の目が粗く

私の袖は雨に濡れゆく

秋の田の 仮庵の庵の 苦をあらみ

わが衣手は 露にぬれつつ

天智天皇（一）

第二節 仲秋

第六十一話 鳴き声

冷えこんだ朝もやの山の中で、俺は枯葉に埋もれてずっと待っていた。

俺は猟師である。

昼間はサラリーマンをしながら、時々猟をやる。今日の狙いは鹿だ。

先ほど糞と足跡を見つけた。同じルートを通るとは限らないが、ここをもう一度通ると仮定して、向いの丘から狙うことにした。木々に隠れ、枯葉に隠れ、林に現れる鹿をじっと待つ。

「俊哉あー、ジビエが食べたーい」と成乃葉が言うので、「獲れたらな」と約束した。成乃葉は俺の通うスナックでナンバーワンの子。いつまで経っても口説けない愛嬌のいい子だ。血抜きや解体はいつもの業者に任せよう。俺の仕事は、この冷えた空気の中で待ち、眉間に一撃を加え、なるべく苦しまずに鹿肉になつてもらふことだ。

来た。何も知らずびよんびよんと跳んでやがるぜ。

俺は息を止めて、呼吸で狙いがブレないように引金に指を添えた。

イイイイエエエオオ。

鹿の鳴き声を直接聞いたことのある人は、都会にはいるまい。山羊のように喉を絞り、山羊よりも甲高く鳴く。鹿の鳴き声には多種多様あり、これはオスがメスを近距離で求める声である。山羊はウシ科であり、ウシ科とシカ科は近隣種（角の枝分かれの差なのでうだ）であるから、喉の構造は似ているのだろう。

その音はまるで、喉から血が出るような声であった。きつとずっとメスを求めて、ずっと得られぬ声なのだ。

俺は銃口を下げ、見逃した。

いや、どうせ歳のいったオスだし、肉は硬くて臭みがあり、食べたものではないさ。そいつはまた喉から血を絞り出して、長く鳴いた。

まるで俺じゃねえか。

俺は栗を沢山拾って帰ることにした。  
イイイイエエエオオ。

世の中にうまい方法はない　あなたを思い悩んで入った山の中にすら  
雌を思つて鳴く鹿がいる

世の中よ　道こそなければ　思ひ入る  
山の奥にも　鹿ぞ鳴くなる  
皇太后宮大夫俊成（八三）

## 第六十二話　岬エツジ

条路は崖の淵に足をかけた。

崖の淵といつても一直線ではなく、ごつごつとした複雑な曲線であった。つまり崖とそ  
の先の無の空間は、複雑な形で曖昧に連続していた。水平に足を少しずつ出すと、崖は靴  
裏から岩の凹凸の成分を伝えてくる。靴を脱ぎ、よりその感触を正確に知りたくなつた。  
この淵には、ここからこっちは安全、ここからあつちは死という明確な境目が無い。その、  
はつきり決まっていない感じが、自分の人生のようだと条路は思った。

中秋の名月が出ていた。海から上ったばかりの月はひどく大きく感じる。ここは岬の突  
端で、つまりは条路の人生のようで、前の月に手を伸ばすか、後ろの地面に留まるかの二  
択を迫られている。

どこから上司と仲違いが始まったのか分らない。人と人が合わないことはよくあること  
で、個人の趣味嗜好で人事が決まることもままあることだ。妻の三央みおと息子の是貞これただを東京  
に残して、遠いこの地の支社に単身赴任、島流しの身となった。

二人の顔を思い出す。「自殺防止に愛する者の顔を思い出すといい」と聞いたからだ。  
ずっと会っていない。今の顔を思い出せなかった。思い出すのは、楽しかった家族の時代。  
ずっとずっと前の若い顔ばかりだ。

川は山から下り、流れ流れて海に注ぐ。川は平地で放射状に分れて散る。ある川とある  
川に挟まれ、さらにその先の海に突き出した所がこの岬だ。ある派閥とある派閥に挟まれ、  
端へ端へと追いやられた自分のようだと条路は思った。俺は岬だ。その突端だ。

「三央」



妻の名前を呼んでみた。名前で呼ぶのはいつ以来だろう。条路は足の裏の、ごつごつした感触をじりじりと楽しんでいた。

心ならずも生き長らえてしまえば

この夜更けの月さえも、良かったと思ひ出されるだろう

心にも あらでうき世に ながらへば

恋こひしかるべき 夜半やはの月かな

三条院さんじょういん（六八）

## 第六十三話 扉越しの攻防

最初はからかったつもりだった。

そのうち、こっちが本気になってしまった。

うちのマンションは昔のつくりで、新聞配達が戸口まで届けてくれるタイプだ。朝起きれば勝手に届いているものというイメージだったが、まさかその配られる瞬間を、朝まで待つことになるとは思わなかった。

夫は長期出張で海外だ。暇を持て余した私は小説を読み始め、面白すぎて徹夜してしまった。秋の夜長どころかもう朝だ。眠い目をこすりながら廊下のトイレへ行こうとすると、カタンと扉のポストが開いて、外の新聞配達少年と目が合ってしまった。

見られた、と思った。

私はノーブラで、ミント色のパンツも生足も丸出しだった。

ほんの一瞬だけ見えた配達少年は多分高校生で、とても驚いた顔をしていた。ポストの向こうに人がいるとは思わなかったか、それともこの恰好に驚いたか。

——からかってみたくなった。

私は次の朝までまた徹夜して、廊下で待った。ただし、ガチガチにガードした恰好でだ。バイクの音が聞こえる。足音がエレベーターホールから近づいてくる。三軒隣も同じ新聞を取っているらしいことが足音から分る。

ガタン。彼は私のあられもない恰好を期待していたかも知れない。しかし露出ゼロ。残念でした。

作戦はこれからだ。三分の一の確率でエロイ恰好をするのだ。ランダムだ。サイコロを振って一と二が出たときと決めた。

いつなんどきエロが現れるかも知れない。この状態でハラハラしない訳がない。私は毎朝高校生と一瞬目を合わせることを、楽しみにするようになった。私のことを欲求不満の団地妻とでも思っているだろう。その通りである。あるときは何かを落としたふりをして胸元の谷間を見せ、あるときは後ろ向きに立って何かを拾うふりをした。どのときも、ポストが閉まるまでの一瞬が、長かったように思う。

そのうち、彼がどんな人間か知りたくなった。運動部っぽい髪形、近所の高校の学生服、日焼けした肌。その高校まで出かけ、放課後の運動部の様子を観察する。いた。野球部の外野で、球拾いをしていた。そうか、君は補欠か。ずっと出番を夢見て、ずっと出場可能状態を続けているんだな。私の肉体も出場可能状態を続けている補欠である。補欠同士が慰め合うのに、理屈はあるだろうか？

彼が来る前に、ドアを開けてやろうと待っていた。部屋へ招き入れ、紅茶でも出してやろうと。私の名は素子。一度名前を呼んでみて。恰好はサイコロに任せる。エロ。だがその朝、八時になっても九時になっても彼は来ず、新聞も来なかった。

次の朝新聞は来たが、彼ではない、知らないおじさんだった（非エロで助かった）。次の朝も、次の朝も、彼は来なかった。

高校の野球部の練習を見に行く。いない。

マネージャーらしき子を捕まえて、それとなく彼はどうなったか聞いてみた。

「晃性、野球部辞めたよ」

そうか。それが彼の名か。

長い夜。私は眠り方を忘れてしまっている。

「今来る」とあなたが言ったばかりに

九月の夜明けの月まで待ってしまいました

今来むと いひしばかりに 長月の

有明の月を 待ち出でつるかな

素性法師（二二）

第六十四話 嵐の子

とにかくやかましい子なの。

意地悪してるのかな？ 私が嫌いなのかな？

でも給食の余ったゼリーを私の為に隠してくれたり、道に迷いそうなときは「こっち！」って連れてってくれるんだよね。それでちよつと仲直りしたと思ったら、また私の作文をじっくり読んだり、私が負けるって分ってるのにかけてっこを挑んできたり、一緒にゲームしようぜって言って私をぼこぼこにするの。私の名前が「因美」だからって、「ちなみに」「ちなみに」って口癖のように言うし。

なんなの慎能介くん。何考えてるのか全然分らない。嵐のように走り回る。

笑ったり、怒ったり、走り回ったり、喜んだり泣いたりするの。とにかく感情がころころと変わって、私はこの子がどういう子なのか、全然つかめない。

ある日私が風邪引いて休んでて、午後から学校に行ったのね。給食終わってから教室に入ったら、慎能介くんがすごく静かでびっくりして。あれ、こんな子だっけ、って。私に気づいたら、またうるさい子に戻ったみたい。へんなの。私のせいなの？

遠足で紅葉がきれいで、私は友達ちの智法ちゃんまと歩いてたんだけど、気づいたら慎能介くんが隣にいたのね。ちようど智法ちゃんが先生に呼ばれていなくなって、私たちは紅葉の下でしばらく待つことになって。

またうるさくワイワイ言うんだろうなって身構えてたら、慎能介くん頬を真っ赤にして、一言もしゃべらないの。へんなの。慎能介くんが紅葉みたい。

嵐が吹いたあとの三室みむろの山のもみじ葉が

龍田川たつたがわに流れてきて錦にしんのよう

あらし吹く 三室みむろの山のもみぢ葉は

龍田たつたの川の錦にしんなりけり

能因のういん法師ほうし  
(六九)

第六十五話 一人の旅

彼女が仕事で、旅行に行けなくなった。

二人で行く予定だったが、俺一人で行くことにした。なにせこの旅の目的は紅葉である。時期を逃す意味はない。彼女は一度一人で行ったことがあり、その紅葉を是非見せたいという計画だったからだ。キャンセル料払っても同じ額だし、旅館は料理だけキャンセルしてもらった。

「仕事がんばれ」「ごめんね」と、その連休を我々は別々に過ごすことにした。

宿に着き、一服した。二人で泊まる予定だった部屋は広すぎ、寒さすら感じる。彼女に「宿に着いた」と連絡を取ったが、仕事は取込み中らしく既読はつかなかった。

宿を出ると、たくさんのお客が歩いてきた。誰もが楽しそうで、その中でいつそう孤独を感じる。

俺たちは大の漫画好きで、ずっと昔にハマった漫画が同じだった。ある武将を扱った歴史漫画で、その悲劇的な死に様で盛り上がったのだ。——逗留先の寺で敵に囲まれる。だがそれは敵ではなく、弟の軍だった。弟は兄を殺すつもりはなかったが、天を二つに割るわけにはいかず、天下を救う為の行動であった。会社員でも、所属する部署が違う為に、立場上対立することはままある。我々は会社員として彼らに感情移入したのかも知れない。もはやこれまでと悟った兄は自害する。その時に見た庭の紅葉が、血の華のように美しかった、という名場面。その寺で、彼女はその紅葉を実際に見たという。

夕暮の寺に着き、漫画と同じ絵が広がって俺は興奮した。山門をくぐり、本殿へ走る。そう、この縁側だ。紅い毛氈を敷き、自刃したこの場所。その縁側に正座する。漫画と同じように前のめりに倒れてみる。たしか顔の左側を床につけて……俺は同じポーズを取り、彼が最後に見たものを見た。

紅いもみじだった。葉が散り地面に描かれた模様が、血の海のようなだった。

俺はその光景を、日が沈むまで見ていた。

「しまった、写真撮り忘れたわ、良月」

すっかり夜になってから撮った写真に一文添え、彼女に送った。

「でしょ。実は私も」

と返事が来た。

「日が沈むまでずっと見てたくて」

「わかる。それを、遅務すまむにも見せたかったの」

血の海の孤独の中、あのもみじが最後に花を添えてくれたと思えば、自分の人生に意味

があつたと思えただろうか。

俺が死ぬときは君が傍にいて花を添えてくれ——と書こうとして、プロポーズみたいだと思つてやめた。

次に二人で来たときに、直接言おう。

寂しくなつて宿を出て外を眺めれば

どこも同じ気持ちの秋の夕暮れが広がっているよ

寂しさに 宿を立ち出でて 眺むれば

いづこも同じ 秋の夕暮

良暹法師 (七十)

## 第六十六話 背面プロポーズ

菅一は元航空自衛隊のパイロットである。今は曲芸飛行を専門とする、フリーのスタント専門パイロットだ。宙返り、8の字飛行、真横に傾いたままの飛行などが得意で、日本中の航空ショーに引っぱりだこである。

彼には長く付き合つた恋人家暖がおり、地方の航空ショーに呼ばれる度に彼女を同行し、フライトのあと観光して帰るのが常となつていた。

今回の旅の地、東北は一足先に晩秋に入り、山全体が紅葉に染まっていた。空から見ると山脈が錦の機織りのようだ。菅一は「ここだ」と思った。

基地の連中に頼み込み、複座式のセスナを一機借りられることになった。燃料代も整備代も負担すると彼は申し出たが、その目的を知ると基地の皆は「タダにしてやるぜ！」と請け負つた。「機上でプロポーズしたい」と菅一が言つたからである。

からりと晴れた秋晴れ。安定した無風の中を飛びまわる航空ショーを終えて帰投すると、家暖が待つていた。

「あのセスナ、今から乗れることになっているから」

「乗るの？」

彼女は驚いた。この後はいつものように、神社仏閣を巡るつもりだったからだ。

指輪と花束を、彼女の目に触れないように基地の皆が協力して運び込む。彼女を後部座

席に乗せると、花束を隠す場所がない。「後部座席の後ろなら死角なのでは」と菅一がアイデアを出した。ビニールに包み、香りでバレないように。指輪は左胸のポケットに。

緊張した。フライトにこんなに緊張することはない。大空は彼の庭であり、迎え入れてくれる羽毛布団である。だがこれはフライトではなくプロポーズだ。大丈夫だ、全男子が緊張するのだから、と基地の皆はシャンパンも用意すると言った。空より操縦桿より、人生の方が難しいとすら、菅一は思う。

滑走路を飛び立った。目的の山脈が見えてきた。

「きれい」

彼女は風防に手をつき身を乗り出した。

「もっと近くから見せてやろうか？」

曲芸飛行士としての腕がうずいた。フラップを切り、機体を左ロールさせる。

「え？ え？」

セスナは背面飛行に入った。

空一面、紅葉の山脈が波のように押し寄せた。

「すごいすごいすごい！」

だが詰めが甘かった。

席の後ろに隠した花束が、ガサリと風防に落ちてしまったのだ。

次に、菅一の胸ポケットに忍ばせた指輪もぼとりと落ちた。

菅一は慌てて通常飛行にセスナを戻す。指輪は彼の顔に当たり、花束は彼女の両手に収まった。

いまだに散々だったこの話を、夫婦は楽しそうに語る。

この度の旅は、(儀式用の)幣ぬさを用意する暇がなかったのですが

代わりに手たむけやま向山の紅葉の錦を手向けます

神の用意したものとお納めください

このたびは 幣ぬさも取りあへず 手たむけやま向山

紅葉もみぢのにしき 神のまにまに

菅家かんげ(二四)

第六十七話 神の一手

棋士たる者、何手も何手も先を読むのが人生である。

かつて羽生名人は「棋士は何手ほど先を読むのか？」と聞かれて、「直線で三十ないし四十手、枝葉に分かれて三百から四百」と答えたそうだ。読みの深さは、鍛えて伸びるものだろうか？ それとも身長のようにどこかで止まるものなのだろうか？ とにかく私はこれ以上深く読みたい。下級棋士の群れから、彗星のように躍り出るために。

「ごめんなさい！」

立ち寄ったカフェで、ウエイトレスが私に必死で謝る。コップの水を私にこぼしてしまっただけからだ。

たしかに床に段差があった。だがそれは前からこの店にあり、あらかじめ分っていたことだろう。一手先が読めずに躓くわけでもあるまいに。

「おまたせしました！ マロンたっぷりミルクフィーユカフェです！」

彼女は名譽を挽回しようと、とびきりの笑顔でカフェを持ってきた。

だが私は苦笑いするだけだ。

「ナポリタンがどうやったらカフェになるんだ？」

「？」

彼女は伝票とカフェを交互に見た。

「あっ！」

今気づいたの？ 本当に？

「ごめんなさい！ ナポリタンって書いてありました！」

彼女は慌ててカフェを下げようとする。

「ああ、いいよ」

私は手を出して制止した。

「捨てるのは勿体ないから、ナポリタンじゃなくてカフェにするよ」

「ホントですか！ 助かります！ 私のバイト代から引かれて、裏で私が泣きながら食べる所でした！」

私は再び苦笑いする。そこまで言わなくてもいいだろうに。

レジで勘定を払う段になって、伝票がナポリタンのままで私はずっこけた。私は彼女を見つけて名札を見た。文ぶんというのか。出来なすぎだろ、あの子。

私は興味を持った。何百手と読む人生の私たちと、全く違う人種にだ。文さんは一手先も読んでいない。こう来たらこう、そう来たらそう、と考えて生きていない。

「いらっしやいませ！」

彼女が水を持ってくる様を観察する。私は先に立ち上がり、再び躓いた彼女のお盆から飛んだコップを、宙でつかんで見せた。

彼女は「未来が見えるんですか？」と目をぱちくりさせ、私は笑ってしまった。

私が棋士だと言うと、「だから先読みが出来るのか！　すごい！」と感心する。いや、段差ごとき一手読みだろ。

彼女が気になる店があると言う。偶然そこは次の対局の場所の近くだった。下見がてら一緒に見に行こうと誘って見たら、目をぱちくりさせてOKをくれた。

彼女の行動は実に興味深かった。勘で電車に乗り、勘で乗り換えようとする。よくそんなので生きてこれたなと言うと、「良く電車間違うんです！」と笑った。

「電車の乗り方を教えてあげよう。降りる駅の出口に近い所に乗るんだ」

「????」

「降りる駅の階段や出口が何両目にあるか調べとけば、電車から降りてスムーズに行けるだろう？　右側のドアか左側のドアか分つてれば、最初からそっち側にいればいい」

彼女はまた目をぱちくりさせた。

「将棋ってそんな先を読むんですか？」

私は毎度ずっこける。一手先だろそんなん。何百手も先を読む棋士というものは……まあいい。まずは一手詰めを教えよう。

ふと、彼女の心は何手詰めなのだろうと、いらぬことを考えてしまった。「愛してます」「私です」で投了。そこから逆算する。局面はいま序盤も序盤で、歩がひとつ動いたくらいだろう。いや、そもそもこの「局」は指し始めているのだろうか？

何度か外で会い、何度もカフェに通う。局面は中盤か？　それともまだ序盤か？　大局観がわからぬ。そもそも私は彼女と「勝負」しているのだろうか？

「屋康さん、こんど海へ行きましょう。秋の海は涼しくていいですよ？」

彼女は突然脈絡もなく言った。相変わらず一手先も考えていない。

「そこへ行って、何をするんです？」

「何もしません」



「？」

「ただ座って、海を見るんです」

「それは面白いんですか？」

「超面白いじゃないですか！」

「どうして？」

「だって海は次どうなるかわからないじゃないですか！ 波の形、夕日の形、雲の形！ ひとつとして同じものがない、くるくる変わるのを見に行くんです！」

私は彼女の魅力を理解した。猫の目のように変化するこの「力」だ。何手も何手も先を読み、布石を打ち、罠にかけあうのは、世界が怖い臆病者のすることではないだろうか？ 彼女はライオンのように強い。だから惹かれるのかも知れない。

「電車で四十五分か」

私はつい先読みをしてしまう。

「みかん持って行きます！ 一緒に食べましょう！」

電車でみかん。遠足かよ。おばあちゃんかよ。一緒に食べるの？ たのしそう。

私は一手詰めで投了した。だいすき。

風が吹けばすぐに秋の草木はしおれてしまう

だから山風を嵐（荒し）というのだろう

吹くからに 秋の草木の しをるれば

むべ山風を あらしといふらむ

文屋康秀（二二二）

## 第六十八話 プレイボーイ、プレイガール

蓮はプレイボーイである。週末ごと遊びに出かけ、その時に出会った女の子と一夜を過ごす。

寂子はプレイガールである。週末ごと露出の多い恰好で街へ出て、好みの男から声がかかるのを待ち、気に入った男と一夜を過ごす。

それはまるで、猛獣同士が密林で出会ったようなものだった。動物が本能で相手の力量を一瞬で計るように、剣豪同士が剣を打ち合った瞬間のように、都会の片隅で出会った二

人は、「こいつ、やる」と感じた。次の瞬間、「対戦よろしくお願いします」と一礼をした。

何百人と寝たとしても、肉体の相性が合うことは稀である。だから蓮も、寂子も、百戦錬磨なのに欲求不満であった。もっと自分を熱くさせる相手はいないのか。もっと本気にさせる相手はいないのか。今夜のそれがそうだった。

安いラブホテルだった。壁紙は剥げ、あちこちに染みがあった。布団はじめとして、スリッパは汗でペタペタする。天井は低く窓はない。壁は薄く隣の喘ぎ声さえ聞こえる。だがそんな環境は欠点とならなかった。ただ全力を尽くせる相手との立ち合いだけが、純粹であった。

いつもなら先に起きた方が先に出てゆき、あとに残された方が一抹の寂しさを抱えてホテルを出る。だが今朝ばかりは、寂子が目覚めるまで蓮は待っていた。

「おはよう」

「おはよう」

「いつもぐっすり寝るの？」

「たいてい途中で起きて先に帰っちゃう」

「鏡に口紅で Good Bye と書いて、いなくなるタイプだ」

「古いアニメでしか見たことないやつ」

寂子は笑い、蓮は何も考えずに言った。

「俺たち付き合わね？」

寂子は口に啜えた煙草を吹き出した。

「順番逆でしょ」

「逆でもいいじゃん。やることはやるんだしどうせ」

「まあ、良かったけど」

「でしょ？ 俺も良かった。こんなの滅多にないよ。きみは？」

「ない」

蓮は煙草を持つ寂子の手を握った。

「手もまだ握ってなかった」

「順番逆だし」

窓も開かない、じめじめしたラブホテル。

外は冷たい雨がはらはらと降っていて、それが止む頃二人はホテルから出てきて、初めてみたいな口づけをした。

通り雨の露が乾かぬ檜や杉の葉から  
霧が立ち上る、そんな秋の夕暮ですね

村雨の 露もまだ干ぬ 槿の葉に  
霧立ちのぼる 秋の夕暮

寂蓮法師（八七）

### 第三節 晩秋

#### 第六十九話 猫になった二人

にゃーん。

猫用の入口から、白い猫の京子が入ってきた。俺は彼女の耳の裏を撫でてやろうととして手が止まる。コオロギを彼女は二匹啜えてきていた。「新鮮な旨いものを、しかも二匹獲ってきてやったぞ」と彼女は言いたくてにゃーんと鳴いた。俺は彼女を撫でてその獲物を受け取り、窓の外に捨てる。京子は「何故？」と納得いかない顔をする。

京子は人間である。

いや、猫だ。

見た目は猫だが、中身は俺の恋人、人間の京子のままである。このへんてこな状態の、説明をさせてくれ。

ある朝起きると俺は猫になっていた。

まずそれを理解するのに、ものすごく時間がかかった。なんか姿勢が違うし、手はモフモフで肉球はあるし、尻尾はついてるし、俺の着てた服がパンツごとベッドに放置されてるし。歩けば目線が低く、部屋が大きく、高くなっていた。何が起こったか分らぬまま鏡を見て、ようやく俺が猫になったことを理解した。

毛は茶色、縞の模様の、いわゆる虎猫<sup>ドラ</sup>である。

恋人の京子（この時はまだ人間だった）が合鍵で俺の部屋に入ってきた。「助けてくれ！」と何度彼女に訴えても、彼女は「猫ちゃんかわいいー」と俺をかわいがることしか出来ず、俺がパンツまで脱いで全裸で消えたことに怒っている。

「極<sup>ま</sup>！どこに行ったの！」と彼女は俺を胸に抱きながら言う。まさにここなのだがにやーしか言えない。いくら待っても人間の俺は帰って来ないので、彼女は自分の部屋に帰った。俺は彼女にまとわりつき、彼女の部屋に転がりこむことに成功した。

このまま猫として生きるのか、と諦めかけた一週間目、突然俺は人間に戻った。ベッドで猫と寝ているつもりの朝、いきなり全裸の俺が寝ていたらそりやびつくりするだろう。

俺は事情を説明し、あのドラ猫は俺だったのだと言った。京子は半信半疑だが、とにかく俺の部屋へ戻り、服などを取ってきてくれた。ようやく人間同士として会えた俺たちは久しぶりに愛しあった。

ところが翌朝、今度は彼女が白猫になってしまっていたのだ。

京子にはやあにやあ言うばかりで、何を言っているか分らない。今度は俺が彼女を世話することになった。一週間後、彼女は人間に戻った。これで終わりではなく、この猫化現象は繰り返すことが分かった。俺たちは、人と猫を往復する体になってしまったのだ。

一週間ごとに人と猫が入れ替わるようだが、俺と京子の周期にはズレがあった。俺は六日ごとに入れ替わり、彼女は七日ごと——つまり一日ずつズレてゆく。人間と猫、猫と人間のときもあれば、人間同士、猫同士のときもある、という風いだ。

俺が猫で彼女が人間のとき、俺は彼女にプレゼントをあげたいと考えた。大好きな彼女にあげるものは何がいいだろう？ おや、外を見ると、ごちそうのコオロギが沢山いるではないか！ これは彼女も大喜びだろう！ 何せこんなに美味しいものはないからね！

だが彼女はぎゃあと叫び、俺に枕を投げてきた。食べにくいから嫌なのかと思ひ、丁寧に羽や足や触覚を取り除いてやったのに、また京子は泣き叫ぶ。人間に戻って反省する。コオロギはない。

今彼女は猫で、俺に愛情表現をしたいからコオロギを獲ってきたのだ。嫌がらせではない。そう思いなおし、膝の上でゴロゴロする彼女の腹を撫でてやる。

異なる者を理解し、寛容の精神で多めに見て、それぞれの存在を認め、尊重する。言葉で書くのは簡単なことだが、人と猫と男と女では中々そうもいかない。多様性などと簡単

に言うが、猫にまでその概念は拡張できるのかね？  
ただひとつ言えることがある。猫同士のセックスはめっちゃ気持ちいい。

コオロギが鳴く霜の降る夜は

寒い薙むしに片袖だけ敷いて、一人で寝る寂しさよ

きりぎりす 鳴くや霜夜しもよの さむしるに

衣ころもかたしき ひとりかも寝む 後京極ごきょうごく摂政前太政大臣だいていじやうだいなじん(九一)

## 第七十話 初体験

秋風がさやさやと吹くたびに、黄金色の海に波が立つ。

今年の稲は豊作で、稲刈りを待ちに待っている。

経政つねまさと信子のぶこは、一年の成果のその海を、夕日の中で眺めていた。

ようやくだ。ようやく家の前の田んぼ（門田かどた＝門の前の田）を手に入れた。

脱サラして三十年経った。最初は「通いの農家」だった。つまり家と田は異なる所であり、車で行かないとたどり着けない所だった。「まるで田んぼに通うサラリーマンみたい」と信子はいいい、経政は黙ってハンドルを握った。

あの台風が来たとき、「田んぼを見に行かなければ」と経政は言ったが、「流されたらどうするの」と信子は止めた。水門は閉じられず、水没で全滅だった。見に行っておけば良かったと後悔する経政と、命があつて良かったとする信子は、いまだにそのことで対立する。

何もかもが初体験だった。東京でサラリーマンをやっていたら、決して得られない経験だった。そしてついに「自分の城の田んぼ」を、家の目の前に得た。

子育てもした。それも初体験だ。大学まで出し、孫にも恵まれた。これも初体験だ。人生とは初体験の連続だ。そう経政は回想する。

「信子。俺は、餅つきをしたい」

「はい？」

「臼と杵を買おう。そして練習しよう」

「私が返して、あなたが搗くんですか」

「そうだ」

「夫婦の息が必要なやつですね？」

「そうだ」

「やったことないです」

「俺もだ」

「じゃ無理でしょう」

「まだ人生には体験してないことがある。お前としてない初体験を、したい」

「そして正月に、餅を喉に詰まらせる老人になるのね？」

「その初体験は嫌だな。孫たちと何度でも食いたいからな」

門田の稲は、さやさやと秋風に揺れた。一区画だけ餅米を仕込んでおいたのはこの為だったと、経政はほくそ笑んだ。

夕方になると、門田に実った稲の葉に音を連れて

茅葺きの粗末な家に、秋風が吹くよ

夕されば 門田の稲葉 おとづれて

芦のまろやに 秋風ぞ吹く

大納言経信（七一）

### 第七十一話 憧れのクリーニング屋さん

「ではいつちよ、賭けをしませんか？」

「賭け？」

雅史はカウンターに身を乗り出して言った。

「このままお客さんが一人も来なかったら僕の勝ち。飲みに行きましょう。奢ります。誰か来たら僕の負け、その人のクリーニング代は僕が払います」

「どっちにしても、あなたがお金を払うのね」

経子はアイロンの手を止めて少し笑った。あの時の、憧れの笑顔のままだった。

雅史は長年勤めた小さな会社を辞め、転職することにした。スーツに袖を通したことがない自分が、スーツの仕事に就くことにしたのだ。来週から来てくれと言われてスーツを

クリーニングに出そうと思い、雅史は「憧れのクリーニング屋さん」へ行こうと思った。

その街には、かつて巨大なテレビ局があった。雅史が最初に入った小さな会社は、テレビ番組制作会社であった。テレビが全ての支配者だった頃、雅史は誇りと自信を持って走り回っていた。それがなければADなんてキツイ仕事は出来ない。同期は一人しか残らなかった。男は血尿が出て一人前、女は生理が止まって一人前。映像制作にはそれだけ手間がかかり、手間をかければかけるほど良くなる。その満足がなければ、雅史はとくに潰れていただろう。その怒涛は、テレビ局が海の方へ移転するまで続いた。

だが時代の変化か、世界は凋落をはじめた。インターネットのせいだと皆言うが、そもそも予算のせいだ。やることは変わっていないのに、予算も時間も減ればクオリティが下がるのは当然だ。当初は低予算がバレないような工夫を沢山したが、次第に悪貨が良貨を駆逐し、バタバタと倒れはじめた。歯が抜けていくように。

雅史が青春を費やしたこの街には、角にクリーニング屋さんがあった。二十四時間煌々と電気がついていて、沢山の白い服の女の子たちが蒸気の中アイロンがけをしていた。徹夜明けに通りがかかると、ドロドロになった彼の心を、ガラス窓の向こうの清潔な女の子たちが救った。

「その中でも一番の美人がいました。憧れの人でした」

雅史は素直にそのことを憧れの人——今はこの店の店長、経子に告白した。

「汗まみれ、涙まみれになりながら、いつかスーツを着る上役まで出世したいと思ってました。その時に最初にスーツをクリーニングするのは、この店だと決めてたんです」

「……」

経子は暇なクリーニング店に突然現れた、中年の昔語りを聞いていた。

「あの頃はここに、沢山働く人がいたわねえ」

後ろを振り返る。広い店内は誰もいない。彼女一人で回すようになって随分経つ。なんなら奥の使っていない所は、埃さえ積もっているだろう。

「局がこの街を出ていたら、灯が消えたようになっちゃってね」

テレビの仕事は様々な出入りを伴う。食事の出勤、弁当の仕出し、酒屋、衣装屋、大道具屋、小道具屋、音楽屋、音楽事務所、タレント事務所、エキストラ事務所、撮影機材屋、照明機材屋、車両屋、テープ屋、軍手屋、靴屋、床屋、銭湯、ケーキ屋、花屋、風俗店。

それらがごっそり街から消えた。店長と結婚した経子は、移転するタイミングを見失った。夫である店長が、若くして亡くなったからだ。

「ではいっちょ、賭けをしませんか？」

こうして二人は、次の客が来るかどうかを巡って、閉店までの一時間を過ごすこととなった。

「あと十五分あるけど、私の負けでいいわ」

経子はそう言って、古びた重たいシャツターを閉めた。

ところが。

「あれえー？」

豚の『マルーン』も、へぎそばの『も代』も、イカワタ焼きの『岬』も、どの名店も灯が消えるどころか別のビルになっていた。ここは俺の庭だった筈なのに。

「いい店のチョイスだったけど、それも何年か前の話ね。どこも閉めたわよ」

さらにあるうことか、さっき閉めた筈の角のシャツターが見えてきた。

「まさか……一周して来たのか……？」

雅史は腰が砕けた。経子は苦笑いしている。だが機転を利かせる。それが俺たちの誇るべき仕事のやり方だろ。

「次に現れた最初の店に入りましょう。どうなっても文句なしで。文句があったら、一杯飲んで次の店に行きませんか」

「そんなんで大丈夫なの？」

「人生だって、二周目が勝負ですよ」

スーツの仕事に就いた男と未亡人は、ドキドキしながら最初の店に飛び込んだ。

御吉野みよしの山の秋風で夜は更け

古い里は寒く、衣打つ音（絹を柔らかくする道具の音）しか響かない

み吉野みよしの 山の秋風 小夜更けて

ふるさと寒く 衣打つなり

参議雅経さんぎまさつね（九四）

第七十二話 三日月に飛ぶ

俺はスカイツリーのでっぺんで、真夜中に上った三日月を見ながら泣いていた。



このままでは彼女の西蘭に誤解されたまま、フラれてしまう。だが泣いている暇はなかった。北西方面に怪人が出現したからだ。俺は強化スーツをブルーライトの戦闘モードに入れ、防弾マスクを閉じ、スカイツリーの上から飛んだ。

俺はヒーローである。夜な夜な出現する謎の怪人を倒す、G・U・A・R・Dの一員、コードネームは「クレセントムーン」。三日月のような回し蹴りが必殺技だ。恋人のことで悩んでいる暇はない。怪人との闘いは命賭けである。何せあいつらに噛まれたら、生まれ変わりの魂ごと持っていかれるのだ。マゼンタ色の怪光線を左手に装着したシールドで弾き、俺はクレセントキックを延髄深くに叩き込み、またひとつ日本の平和を取り戻した。

だが英雄なのにプライベートでの恋愛は全くダメなのだ。昨日はせっかくのデートだというのに途中で怪人が現れ、「ごめん電車が遅延で遅れる」とラインして彼女を待たせた。だが怪人は三体いて三時間遅刻。「どの電車も遅延してなかったし、どうして智行は嘘をつくの？」と彼女は本気で怒っている。遅刻にではなく、嘘をついたことである。

正体を晒せば、彼女に危害が及ぶ。だからそれは言えない。彼女にとって嘘つきのまま別れるか、正直に言っただけ彼女を守るために別れるか、どちらかを選択しなければならない。なんでヒーローはじめたんだろうな。今度くらい、好きな人に本当のことを言ってみよう。俺は朝焼けに沈みゆく、糸のような三日月を見た。

変身を解除する。人間に戻った俺は弱い。

「ほら悲しめ」と月が俺に思わせるのか？

月のせいにした我が涙など、偽物だ

なげけとて 月やはこのを 思はする

かこち顔なる わが涙かな

西行法師(八六)

### 第七十三話 もみじのような手

年を取ると病気の治りも遅くなる。それどころか完治なんてなくて、「とりあえず動けるようになる」まで時間がかかるようになる。人生の残り時間は短いというのに、私たち老人の日々は、まずまともになるまでとても時間がかかる。

「夏が終わったなら会いましょう」と私たちは約束した。貞子さだこさんの入院は夏の始めで、手術がうまく行けば夏の終わりには退院できるから、というのが読みであった。一日千秋に私は秋の到来を待ち、一人の時間を過ごした。だが神は彼女を病魔から守った代償に、今度には私に病魔を取り憑かせ、私が入院する破目になったのだ。

お互い独り身になり、私たちは出会った。「老いらくの恋」には程遠い。ただ喫茶店や公園で話をし、本を貸し借りするような関係だ。手を握りたいと時々思うが、老人のそのようなものはなんだか気持ち悪いと思う。肉体よりも精神性がつながっている、私たちはそのような関係で良い。

窓の外のもみじが色づき始めた所までは覚えている。だが何度か薬に眠らされ、目を覚ましたとき、窓の外を見て私はショックを受けた。もみじが既に全部散っているではないか。もう秋は終わってしまったのだ。「夏が終わったら会いましょう」という約束は、果たされなかったのだ。

「信平のぶひらさん」

気がつくと貞子さんが、ベッドの脇に座っていた。

「貞子さん」

「目を覚まして、本当によかった」

彼女から、私が一時危篤に陥っていたことを聞いた。私が目を覚ますまでじっと傍にいて、窓の外のもみじが一枚一枚散っていくのを見ながら、「秋が終わってしまう」と心配し続けたのだそうだ。

「私が絵が描けたなら、窓の外に一枚もみじの葉を描いたのに」

彼女は笑って、やさしく私の手を握った。彼女の手はとても小さく、健康が回復したのか、血色が大変よかった。

「もみじは、ここにあります」

私の手も赤くなった。

小倉山おぐらやまのもみじよ

もし心があるならば、散らずにもう一度幸福を待ってくれないか

小倉山おぐらやま 峰のもみぢ葉 心あらば

今ひとたびの みゆき待たなむ

貞信公ていしんこう (二六)

第七十四話 新作ダンス

五回目の別れ話だ。もう大樹たいきのことが嫌になっている。

五回目の浮気。あんた分ってる？ 五回別の女と浮気して、五回フラれて帰ってきて。

私はあるの何？

「なんで？ 列依れい？」

大樹は別れ話が初耳のように驚き、衝撃を受けている。私にバレてないとも思ったの？  
あなた大物過ぎない？

大樹は別れないでくれと嘆き、そして泣き出すのかと思いきや、突然自作の歌を歌い出し、自作のダンスを始めた。尻を振り、ターンし、髪を乱して高らかに歌う。

♪ 俺とお前は暗闇で出会った

♪ 俺とお前は暗闇の中で愛し合った

♪ だが扉があいて、覗かれちゃったんだぜ（覗かれちゃったんだぜ）

♪ それはセックス！（セックス！） セックス！（セックス！）

♪ なぜならそこはトイレだったから（Oh 施錠を忘れたぜ Excuse me）

そんなしようもないミュージカル芸に騙される訳ないじゃない。第一……

「ブツ」

彼の動きに思わず私は笑ってしまった。尻を突き上げたままステップをする、不穏な動き。勝ち負けでいうと私の負けだ。しょうがない。このへたくそで下品な歌を、最後まで聞くしかない。

彼はダンサーの才能もコメディアンの才能も、作詞作曲の才能もないが、私を笑わせる才能だけはある。他の女たちは、この面白さを認めなかったのだろうか？

私は公園の濡れ落ち葉と彼を、交互に見比べていた。

山の中の川に風がかけた 柵しがらみがあった

だがそれは流れきれない紅葉であった

山川やまがわに 風のかけたる しがらみは

流れもあへぬ 紅葉もみぢなりけり

春道はるみち列樹つらぎ（三二）

かさり。かさり。ふかふかの落ち葉に覆われた道を行くと、Y字路が現れた。

『右、観音堂

左、甘味処』と看板にはある。

「どっちに行く？ 友基子」と俊樹は聞く。

「うーん、迷う」と私。

「じゃんけん、ぼん」

彼とじゃんけんをし、勝った。私のいた左側、甘味処へ行くことにした。

東京勤務の俊樹と大阪勤務の私は、ずっと遠距離恋愛である。会えないことは辛い。それ以上に、「私たちはこのままでいいのだろうか？」と押し寄せる不安が辛い。

弊社では毎年秋に人事異動があり、私は東京勤務を再三申し出たが、頑張つて成績を上げたにも関わらず、「人手が足りないから」という理由で叶わなかった。努力しても叶わないのなら、私は何をすればいいのだろうか？

さくさくと落ち葉を踏む音で、秋の深さを味わう。「東京と大阪の間で会おう」と、私たちは名古屋や長野や新潟によく旅行する。気温はもうすぐ冬の到来を予告している。落ち葉は散りつくしていてふかふかのじゅうたんを作り、今夜の温泉は楽しみである。

「運を天に任せると、ぐるぐる回るんだよな」と俊樹が言った。

「？」

「子供の頃さ、棒を一本持って冒険するんだよ」

「冒険」

「分かれ道に来たら棒を投げて、落ちた方向に行く。知らない道に入ったり、知らない場所に迷い込んだりする、子供にとって、大冒険になるんだ」

「そんなのしたことない」

「女の子はやってなかったから、男だけの遊びかもなあ。でもそのうち飽きちゃったんだよね。何故か？ 『法則』が分つたからなんだよね」

「法則？」

「360度、どの方向に倒れる確率も等しいじゃない？ だから大体同じ所をぐるぐる回つてき、とんでもない遠くへは行けないんだよね」

「なるほど」

「遠くに行くには、途中で曲がらずに真つすぐ行く意志が必要になる」  
甘味処でおいしいあんみつを食べると、またY字路に突き当たった。

『右、観音堂』

左、土産物屋』

「どんだけ観音堂行かせてえんだよ」と俊樹は笑う。

私は今、人生のY字路にいる。来年の秋の人事までまた待つか。会社を辞め、彼の元へ行き、どこか東京の働き口を見つけるか。

「観音堂行こうよ」と私は言った。じゃんけんをやめて、私は私の意志で行く先を決めた。  
次の決断の為の、練習のように。

約束していた、ヨモギ（平安時代での万能薬）の露のような言葉を  
励みにしてきたけど ああ、今年の秋も去ってゆくのね

契りおきし させもが露を 命にて

あはれ今年も 秋は去ぬめり

藤原基俊（七五）

## 第七十六話 最も遠い二人

「ブラジルへ帰る？ どういうことやねん！」

恵倍は、アレックスの突然の申し出にきつく返した。

「帰る、いうてもリオの高校を卒業するだけや。大学は日本を受けようと思ってるし」

「なんなんそれ。どういうことなん？」

「ママは俺に故郷を見せたいんやって。パパの国しか知らんのは不公平やって」

「……じゃあ、あと二年はブラジルに暮らすん？」

「そのあと日本に帰って来る。しかもこの奈良に。絶対やで」

恵倍はアレックスの目を見た。たぶん嘘はついていない。

アレックスは、見た目こそブラジル人と日本人のハーフだが、日本生まれ日本育ちの、  
中身は完全に日本人だ（正確には奈良人だ）。二人はつき合って半年、その幸せを、アレ  
ックス家の引越しが引き裂くという。

「じゃあ私らは、めつつつつつちや遠距離恋愛になんの？」

「そうなるね」

アレックスは両手で球の形をつくった。恵倍が真似すると、アレックスはその左手と右手に、両手の人差し指で触れた。

「こっちが奈良で、こっちがリオ」

「真裏やん！」

アレックスは恵倍の手を、両側から包み込んだ。

「時差が丁度十二時間。二十四時間の半分や。昔は手紙か国際電話しかなかったんやって」  
「字か声だけ？」

「うん」

「無理」

「でも今ネットあるし」

「そっか」

「時差十二時間ってことは、俺の昼間十二時が、恵倍の夜十二時や。昼の一時が夜中一時。夕方四時が朝四時。夜七時は朝七時や」

「えー、そんなん、連絡取りづらいやん」

二人は色タイメーじして、「真裏」の意味を少しずつ理解する。

「約束決めよう。連絡とりたいーって思っても、お互い寝てるのは起こさんようにしよ。むかつく時もあるかも知れんけど、俺は恵倍と長続きしたいんや」

「うん。それは私も同じや」

コアタイムは七時から十二時と決めた。朝七時から昼十二時、夜七時から十二時まで。学校行ってる間は返事しない。即レスは期待しない。

「できるかな」

「俺と恵倍なら出来る」

こうして二人の高校生は、地球の真反対、地球で最も遠距離の恋愛をすることとなった。レスが遅れるのは「衛星中継や」と笑いに变えて、若い二人はその状況すら楽しんだ。流星に毎日それじゃキツイから、土日は夜遅くてもOKにしようと決めた。ただし一方が寝落ちした時は「おやすみ」で終わって深追いしないこと。今日寝たい時は先に言うこと。お互いの生活リズムをめちゃくちゃにすることは愛やないで？ ビデオ通話もした。やっぱり「衛星中継」で、笑いもワンテンポ遅れる。二人は光の遅さを呪いながら、それでも

互いの顔を見れることを喜んだ。髪型変えてもすぐ言える。

恵倍の誕生日が来た。丁度土曜日で、アレックスは特別に徹夜しようぜと言った。恵倍にとっては昼から夜、アレックスにとっては夜から朝の逢瀬である。

回線が途切れ途切れになりながらも、二人は積もり積もった話をした。恵倍は昼間だからガンガン元気だが、アレックスは朝が近づくと、流星に眠くなってきた。

「アレックス眠い？」

「流星にね。でももうすぐやから」

「何が？」

「誕生日プレゼント」

「？ あ、アマゾンで送ったんちゃう？ ブラジルのアマゾンからです、みたいな」

「その手もあつたか！ カメラ繋いでるから、ちよう見ててや！」

アレックスは自転車に乗り、坂の下の大西洋まで走った。陽気なブラジル人たちが酒場の外でサンバで踊っている。恵倍はあらためて彼が外国にいるのだと知る。

途中通りがかった公園に、ピンクや紫や赤の小さな花が咲いていて、「きれい」と恵倍がいうと、アレックスは自転車を止めてカメラで寄った。

「ピンクが恵麻に似合うと思う」

「そうかな。そうかも」

「ブラジルでは春の花で、ペチュニアいう花や」

「春の花？……つていうか、季節真逆……つてそういうことやんな」

「摘むのはかわいそうやから、写真にしとくな」

「アレックスやさしいところあるわ」

「ちなみに花言葉は『あなたと一緒になら、心がやわらぐ』やで」

「……どこで覚えたんスケベ。そんなん、泣くやんか」

「海までもうちよつとやで！」

円い月が出ていた。海にキスしそうな月。アレックスは自転車を止めた。

「ハイここが大西洋です！ これからマジックをします！」

「え？」

「今からこの春の満月を海に沈めます！ そしたらなんと！」

「なんと？」

「秋の月になって、奈良の山に上るんです！」

「なんでやねん！」

アレックスはへんてこなブラジルの歌を歌いながら、へんてこなマジシャンのように何度も手をごまねいた。月は徐々に沈んでいく。

恵倍は頭の中で想像する。私たちは北半球と南半球の表裏。季節も反対。ブラジルの夜明けは日本の日の入り。地球はゆっくり回って、ブラジルの西に沈む月は、日本の東に上る月。

恵倍はベランダに出た。アレックスがいない街は寂しくて、恵倍は何度も泣いた。だからベランダに出るのが嫌になった。彼がいない街を見なくなかったからだ。そこに彼が、満月を届けてくれるという。

夕暮れの奈良の山は葦色すみれに染まっていた。大西洋に月が沈む。 3、2、1。

「……」

「……」

「出てこんよ？」

「もうちよい……もうちよい……」

と、山の端に黄金の光が注いだ。

「来た！ 来た来た来た来た！」

地球の進む速度で月が昇る。これが、ブラジルと日本を地球が進む速度。

さつき見た円い月が、山の上で輝く。

「ハッピーバースデー恵ー倍ー！」

「ありがとうアレックス」

恵倍は笑って泣いた。

最も遠い二人は、この瞬間最も近い二人だった。

天球を仰いだ

この月は、春日かすがの三笠山みかさやまに出ている月と同じだ

天あまの原はら ふりさけ見れば 春日かすがなる

三笠山みかさやまの山に 出いでし月かも

安倍仲磨あべのなかまろ（七）



## 第四章 冬の底

### 第一節 初冬

#### 第七十七話 霊安室で寝る女

「おはよう、信之<sup>のぶゆき</sup>」

道緒<sup>みちお</sup>は目覚めると信之の遺体に挨拶した。

冷気に溢れる霊安室は、寝袋と言えど体にダメージがある。それでも道緒にとっては、信之の隣で眠ることは最上の睡眠である。

「この仕事長いことやってるが、霊安室で寝る刑事なんて初めてだぜ」

と、番人の藤岡<sup>ふじおか</sup>は驚いた。だが殺人課の道緒の恋人が殺され、無念の顔で安置されている。その事情を知れば、止められないのが人情というものだ。

「捜査に、行ってきます」

「事件の早期解決を」

二人は敬礼する。

繁華街で信之が突然刺された。犯人は不明。監視カメラもドライブレコーダーも、多くの人で隠れて犯人の姿は分らない。証言はバラバラだ。手がかりはない。

刺し傷は正面から。顔見知りの犯行を疑う。笑顔で近づいてきて、いきなり刺せる距離感をもった交友関係。知人、友人は洗った。アリバイの証明できない者が七名。だがそれ以上の決定的なものが出てこない。

死後硬直で固まった信之の顔は、驚いたままの顔で時間を停めている。ちょうど「お」の口の形だ。容疑者の名前を見る。尾形、孝雄、そして私の名前、道緒。「死体は語る」という。信之の「お」は、どの「お」を言ってるの？

この遺体が茶毘に付される前に、決着をつけたい。司法解剖は終わったが、焼場が混んでいてあと一日「待ち」が生じるという。冷たい橋の下で眠るホームレスと、どっちが寒いだろう？ こっちは冷蔵庫の中で眠るようなものだ。「お」の口の形をしたままの信之と、道緒は今夜も眠った。

朝方、道緒は閃いて跳ね起きた。

「お」の口だと思ったのは間違いだった。たとえば「部長」の「う」は、「う」じゃなくて「お」の形だ。表記上は「ぶちょう」でも口の形は「ぶちよお」。——そういえば原嶋部長と折が悪いと、信之はこぼしていた。容疑者リストにはない。要確認。慌てて着替える。すべてのあり得ることはあり得る。捜査の基本だ。

道緒は時間を止めたままの信之の顔に誓った。必ずあなたの無念を晴らす。

夜が明けても またあなたと会える夜は来る

分つちやいるけど、あなたと別れる朝は恨めしいですね

明けぬれば 暮るるものとは 知りながら

なほ恨めしき 朝ぼらけかな

藤原道信朝臣(五二)

## 第七十八話 向い風の競技者

向い風が有利に働く競技は少ない。

円盤投げ、槍投げ、そしてスキージャンプくらいのもだろう。全て空気の揚力を使う競技だ。陸上の「追い風参考」では、風速が秒速2メートル以上だと公式記録に採らない。追い風2メートルで0・16秒タイムが縮むそうだ。それほど風の影響は強い。皆追い風が好きで、向かい風は嫌いだろう。人生と同じように。

聡俊はスキージャンパーである。スキージャンプは特にV字飛行で、向かい風の揚力を利用する競技として知られる。ノーマルヒル(90メートル級)、ラージヒル(120メ

ートル級)まではオリンピックにもあるが、聡俊の主戦場は、もっと大きな170メートル超級の台を飛ぶ第三の競技「フライングヒル」である。この競技台は世界に5つしかない。ノルウェーのヴィルスケン、スロベニアのプラニツァ、オーストリアのバート・ミツテンドルフ、ドイツのオーベストドルフ、そしてチェコのハラホフ。「フライング」を名乗るのは、その滞空時間にある。ノーマルヒルが平均4秒空中にいるのに対して、フライングは8秒間だ。飛ぶというより「浮いている」秒数である。

聡俊の私生活は普通ではない。冬に入ると北欧で行われるツアーに参加する。毎週、自費でだ。スポンサーがつくほどのメジャー競技ではない。だから夏に働き、貯金を使って冬に飛ぶ。こんな自腹生活で、まともな恋愛など出来る訳がない。

だけど今回の恋はうまく行きそうな気がしていた。彼にスポンサーがついたのだ。女子フライングヒルが2022年によく創設され、投資の可能性が探られているのだ。

玲頼はスポンサー会社のOLさんだった。スポンサーに手を出すのはまずいが、職場での出会いといえばそれはそうだ。しかも彼女は、北欧転戦に帯同するという。チャンスである。最初の予選後の打ち上げで、聡俊は彼女を誘おうとした。

「皆さん遅れてすいません！」

と現れたのは彼女の上司だった。偏西風のせいで飛行機が遅れたらしい。まあそれはよくあることだ。しかし聡俊は見逃さなかった。玲頼がその上司とそつと手を繋いだ所を。

向い風が吹いていた。彼女はこの長いジャンプ台の下で、上司と共に見ているだろう。イエローランプが点灯したままだ。強風でこのまま中断か。だが時間ギリギリにグリーンランプとなった。再びイエローに戻る前に、勝負だ。

向い風が有利になる場面は、人生にそうない。聡俊はその風を空中で捉え、9秒間空中にいた。

つれないあの人を思って初瀬観音に祈ったが

初瀬風のように激しく吹けとは祈っていない

うかりける 人を初瀬の山おろしよ

はげしかれとは 祈らぬものを

源 俊頼朝臣(七四)

彼が服を脱いだとき、「私より軽い」とすぐに思った。

騎手やレーサーは体を鍛え、かつ痩せるトレーニングをするという。とくにボートレーサーは、エンジン出力がどの船も同じ規定で、だから体重が成績を左右するらしい。鍛え上げられた彼の腹筋から目が離せない。だけど「重たい女」と言われるのではないかと私は委縮する。

「大体自分の方が軽いんで」

と彼は言ってくれたが、それって気を使ったことになるのだろうか。兎にも角にも、そのたった一夜で、私は彼に本気になってしまった。

「千登勢、ボートレーサーと合コンだよ！」

とお誘いがあり、スーツ系の合コンに飽きていた私は参加した。

彼らが一様に小さいことにまずびっくりした。ヒールなしでも私の方が背が高かった。大きい人はやっぱりどこかで脱落するんですって。バスケットと逆なんだなあと、中学の時バスケ部だった私は思った。

派手なオモシロ話をするボートレーサー達の中で、伊久真だけが物静かだった。ずっと自分の整備しているボートの話ばかりだった。だけど「自分の整備したボートでこないだ一位を獲れそうになったんだけど、最後抜かれて、何でだどずっと考えている」って所は分った。ボートの世界は分らないけど、それは人生でよくあることだからだ。

だから私は彼に抱かれた。ゆきずりの恋みたいでいいかなって。その程度だったのに、ボートに乗る彼を見て本気でカッコイイって思ってしまったんだよね。

「見に来んなよ。女の来る所じゃない」って彼は言ったのに、私は勝手に平和島に見に行ってしまった。見に行つて良かったと思つたけど、彼の発言の後半部分は本当だった。だいぶきれいになったそうだが、「場末」と彼が言った意味が分った。壮絶で、切羽詰まって、猛々しく、痛々しい。だから私は彼のことを考える。水は落ちたら氷水みたいで心臓止まっちゃうとか、ハンドルを握るあの手で私を、とか。

それから彼は音信不通だ。

全国を転戦する、そのレースを一々追っかける？ 今平和島は「第十一節」のシーズンですって。彼と会った時は第九節だった。一節という短い間が、彼が生きている時間なの

だろうか。しがたいOLの、知らなすぎる世界。

甲高い何台ものモーター音が、私の耳を何度も貫いてゆく。

難波<sup>なにわがた</sup>鴻の芦の節は短い

そんな短い間も会ってくれずに、この世を過ごせというの？

難波<sup>なにわがた</sup>鴻 みじかき芦の ふしの間も

逢<sup>あ</sup>はでこの世を 過ぐしてよとや

伊勢<sup>いせ</sup> (十九)

## 第八十話 ガラス越しの体温

ガラスの向こうに、旦那が座っている。

それはどんな弾丸でも貫けず、爆弾でもびくともせず、ナイフも刃が立たない強化ガラスだという。

旦那は犯罪者である。囚人服を着た収監者だ。

私と彼を隔てるこのガラスは、刑務所の面会室のものだ。週に一度面会を許される。つまり私は獄中の夫に会いに行く、通い妻である。

「もう寒くなってきたら。週一回ここまで通うのは辛かろう。これからは月に一回でいいよ」と旦那は言う。

「私は私の稼ぎで生活してるんです。それをどう使おうが勝手でしょう？」

「……飯は食ってるのか」

「そっちこそ、刑務所のごはんは辛くないですか」

「まあ、罰のひとつき。しょうがない」

私たちの会話を、横で速記官が記録している。暗号でしゃべり、何らかの犯罪の指示をしている場合もあり、より大きな犯罪の発見になることもあるためだ。だけど旦那の朝生<sup>あさお</sup>はそんな大物じゃない。これはただの、夫婦の会話なのに。

「ひげ、剃ってるのね」

「忠加<sup>のりか</sup>が来ると思ってるさ。来ないなら面倒だから剃らない」

「じゃあやっぱり来ます」

私は強化ガラスに手をつけた。ひんやりとした温度が私の手に伝わってくる。彼もガラ

ス越しに手のひらを重ねた。そのままにしていると、彼の体温が伝わってきた。男の人はどうしてこんなに体温が高く、暖かいのだろう。

どんな弾丸も爆弾も刃物も通さない強化ガラスは、彼の体温だけは通した。

もし二度と逢えないならば

かえってあの人も自分も恨まないだろうに

逢ふことの 絶えてしなくは なかなか

人をも身をも 恨みざらまし

中納言朝忠ちゆうなごんあさただ（四四）

## 第八十一話 ボディブロー

俺は、恋は宝塚のようだと思ってた。派手で、豪華絢爛で、キラキラしているものだと。あるいは派手なパンチの応酬のボクシングだ。殴る、倒す、殴る、倒すの繰り返し。

だが彼女は違った。デスクの栞成かんなさんは違ったのだ。彼女は華麗なるファイターでもなく、豪華絢爛恋絵巻でもなかった。地味なメガネで黒やグレーの地味なスーツ。なのに、人生でこんな片思いがあるなんて。

「どういことだよ陽介？」

親友の伊集院いじゅういんは、いつも俺の悩みにつき合ってくれる。

「片思い？ は？ なにそれ？ お前がそんなことある？」

「一回も経験したことないから、戸惑ってんじゃないかよ」

俺はイケメンである。だからモテてきた。宝塚のような恋ばかりであった。俺に寄って来る女は一杯いる。蛾みたいなもんだ。俺は常に蛾にたかられる火だ。俺に触れた女は皆火がつくからな。だが栞成さんだけは違うのだ。いわばボディブローだった。

「ボディブローをコツコツ打たれて、ってどういうこと？」

「……半年くらい前か、朝一のこと」

「朝一にラブアフェアー？」

「ちげーよ。プレゼン準備の為、早く来たらさ、彼女が一人で早く来てて掃除してて」

「掃除の人がやってくれるんじゃないの？」

「個人のゴミ箱とかあんじゃん。あれ全部、彼女が一人で捨ててた」

「そうなの？」

「そうなんだよ。『誰かがやってくれてる』の『誰か』とは、彼女だったんだよ」

「で、感動したー、とか言ってる二秒でセックスしたのか」

「いや、それが思わず隠れちゃって、俺」

「なんで？」

「なんか、清らかだと思ったんだよね」

「？」

「あと、提出書類の箱あんじゃん、部長席の青い箱。あれみんな表裏上下バラバラに出してるんだよ。それ彼女が揃えてるのを見たんだ」

「……地味な話だな」

「そうなんだよ。そんなものを積み重ねているうちに、いつの間にか片思いなんだよ」

「あとは？」

「タイピングしてる時、姿勢が良かった」

「はあ」

「字が綺麗。封筒の宛名書きとか、マジ惚れする」

「まあ分る」

「給湯室で泣いてるのを見た」

「結構重いの来たな」

「たまたま誰もいなかったんだよフロアに。コーヒー淹れようって思ったら人の気配があつて。……それも声かけれなくて」

伊集院はビールを空けて焼酎を頼み、俺も乗った。

「あと、季節の言葉をよく知ってる。季語とか」

「へえ。ググるんじゃないかって？」

「何も見ずにすらすらと時候の挨拶とか、得意先の封筒に綺麗な字で書くんだ。花の名前も詳しくてさ。篝火シッラメンなんてパツと書けるんだぜ？ 火花しか分らなくて笑われたわ」

「教養があるんだな」

「そう。教養。それだ。テストで身につくもんじゃなくて、人間の背が高い感じ」

「独特な比喻だな」

「しかもこないだ、一人で焼鳥屋にいた」

「ストーリーしてんの？」

「偶然見かけたんだよ。イメージと違ってびっくりしたわ。あと、高校の頃は手芸部だったらしい。彼女の椅子の座布団あんじゃん、あれ手編みらしいぞ」

「マジか。たしかに、お前がこれまでやって来たパープー女とは真逆だな葉成ちゃん」

「ちゃんづけすんなよ。葉成さんだろ」

「年下でしょ？」

「年関係ねえよ。さんって思えばさんだろ」

伊集院は鳥皮とつくね玉ギョウつきを頼んだ。俺も乗った。

「で、どうしたいんだよ」

「俺がイケメンすぎんじゃないかと思って」

「は？」

「地味女子ってさ、イケメンを敬遠するって言うじゃん」

「そうなの？」

「だから無精ひげを生やして、髪に寝癖つけて、シャツも二日目を着て、お前みたいなブサイクにしてみてるんだよ」

「ブサイク舐めんな」

伊集院は焼酎をあおった。

俺もおおった。俺はまだあと百発のボディブローについて、話すつもりだった。

筑波山の山頂から落ちる男女川みなのがわよ

はじめは一滴だった筈なのに、今や私の恋は深い淵となった

筑波嶺の峰よりおつる男女川みなのがわ

恋ぞつもりて淵かちとなりぬる

陽成院ようせい(十三)

## 第八十二話 ポテト食え

「こつちがライン返してないのに、続けて二通送ってくるの、意味分らんくない？」

忠香のりかは中里あゆりに、最近できた彼氏の敦慳たいせのことについて相談していた。相談していた、というよりは愚痴うちっていた。

「は？ どういうこと」



「キャッチボールじゃん。むこうが投げて、こっちが返して、それで会話でしょ？　いくら返事が遅いからって別の話振ってくるのおかしくない？　返事考えるこっちの身になれよ。消えた前の話どこ行くんだよ」

二人は学校帰りにマクドナルドに寄っていた。別にスタバでもいいんだけど、ポテトつくし、スタバは中学生の小遣いには高すぎる。

「あーわかるわ」

「でしょ？　中里なら分ると思った」

「違うよ。敦惺くんの気持ちがだよ」

「は？」

「だって忠香返事遅れがちじゃん」

「返事を考えてんの」

「それは私はつき合い長いし、知ってるよ？　でもつき合ったばっかの敦惺くんをそれを分れ、って無理じゃね？」

「うーん、たしかにたしかに、カニカニランチ」

「向こうから見てみ？　あーなんかへんな事言っちゃったかなあ、気まづいかなあ、機嫌悪くしたかなあ、嫌われたらどうしようとか、ずっと考えてんだよ？　それを何時間も何日も待たせるのは正気じゃねえよ。私は慣れてっから別のことしてんだろって思うけど」

「さすが、よく分ってるわ」

「かまわんかまわん、カニカマランチ」

「ていうか、制汗スプレーの蓋交換しようって言ったのに聞いてくれないんよね」

「なんで？」

「わざわざサイズ違うの買うの嫌なんだって」

「あー、今使ってるやつ合わないのか」

「汗臭い女って思われるのも嫌だから、使い切って買い替えるのもなあ。あと」

「まだあんの？」

「なんぼでもあるわ。全然分んないのよ。髪形どんなん好きかとか、ラーメンは醤油か味噌か豚骨か、とか、お風呂入ったらどこから洗うかとか、授業中に手紙やり取りしたいとか、高校同じ所行きたいけどどこがいい？　とか、もうすぐクリスマスだねとか」

「それこそ聞けよ」

「そんな小さいこと一々心配してる女だと思われたら嫌じゃない？」

「じゃあどう見られたいんよ？」

「……それが分ったら、ここにいないわ」

「まあポテトでも食って落ち着け」

「ああ、ポテト、お前は裏切らない」

「敦惺くんに裏切られたの？」

「そんなわけないでしょ。私の彼氏を悪く言わないで」

「じゃあ忠香が裏切ったの？」

「そんな訳ないでしょ」

「じゃあ誰が裏切ったのよ」

「誰も裏切っていない。やさしい世界」

「じゃあポテト食え。お前糖分足りてないわ」

「ウチを太らせて、敦惺くんを取るつもりでしょ」

「私は男は裏切っても友は裏切らん」

「よかった」

「心配ならダッシュで帰ってカロリー使うぞ」

「じゃその前にポテト食うわ。あー、敦惺くん今何してんだろ」

「心配はひとつにしろや」

「無理」

つき合ったあとの複雑な気持ちに比べれば

昔は何も考えていかなかったよな

逢ひ見ての のちの心に くらぶれば

昔はものを 思わざりけり

権中納言敦忠(四三)

## 第八十三話 白の朝

吐く息が白い。

それが白い霧と混じって溶けてゆく。前も後ろも白い霧。どっちへ進むべきかも分らなくなる。

頼子は童貞喰いである。

女性経験のないうら若き男の、初めての反応を見るとぞくぞくする。くたびれた男たちはそうではないが、ほとんどの童貞は、頼子が女体であることにまず感動する。柔らかいおっぱい、熱い液体。初めての女は生涯忘れないという。彼らの記憶に、頼子は永遠に残りたい。

昨夜出会った良定は、真つ赤な顔をしてバーにいた。酒を飲み慣れていない初々しさが、頼子の童貞センサーを働かせた。「童貞なの？」と聞くと「いいや」と口ごもりながら答えた。非経験者特有の「強がり」だ。小一時間話しこみ、ようやく童貞だと白状させた。しかしそれは既に、頼子の蜘蛛の巣にかかった獲物だった。

「俺の部屋に來いよ」と彼が言うので身を任せた。初々しすぎて力の入れ加減すら安定しなかったが、次第に分るようになってきた。そう、女の体は陶器を扱うように。だがこの痛みすら童貞特有の特徴で、頼子は愛おしくなってくる。それまで怯えるように世界を覗いていた小鹿が、急速に世界を睥睨する獅子になってゆく。

「俺が一生幸せにしてやる」

素敵よ、その無謀なたてがみ。

部屋の暗さに目が慣れてくると、学生服が掛けてあるのに頼子は気づいた。

「あれ？ まさか高校生？」

「親が一人暮らしを許してくれたんだよね。早目に独立心を持ってと」

あ。高校生でもなかった。校章、中学校じゃん。

流石におばさんが中学生とやっちゃうのはねえ。「一生幸せにしてやる」っての、童貞っぽいというよりも中二病っぽいわ。

太陽の光でがっかりされる前に、頼子は姿を消した。いつもならタクシーでも拾って帰る所だが、少し歩きたくなくなった。川沿いに歩けば駅につく。だが川霧がひどく、白の中で白い息が混じってゆく。

日が昇ってきて温度が上がったのか、川面の網代木が、水墨画のようにうっすらと見えってきた。水魚（鮎の稚魚）を網で追い込むときに引っかける杭たちのことだ。それを見ながら、畏にかかったのは自分の方なのかもなど思った。

立ち止まり、戻りたくなかった。前に行くのと、これまでの童貞を喰っては捨てるおばさんに。後ろに行くと彼の部屋に。——どっちに？

夜が明けて宇治の川霧も薄くなってきた  
現れたのは川の瀬の網代木たち

朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに  
あらはれたる 瀬々の網代木

権中納言定頼（六四）

#### 第八十四話 ホワイトクリスマス

宇宙ステーションには、地上向けの窓がある。

そこは一人になれるスペースでもあるので、山吾は時々そこで一人になり、地球を眺めることが多かった。

成層圏より遥か上空を高速で周回するステーションには、地上のような昼や夜がない。地球一周はわずか九十分、一日で地球を十六周。太陽が一日十六回昇り降りするので、昼や夜の実感はなく、グレゴリオ標準時が基準になっている。今見える昼の地球は、もうすぐ夜に突入しようとしていて、間もなく真夜中の日本上空、クリスマスイヴに到達する予定だ。

山吾はスマホのカメラを構えた。望遠が利くやつにして良かった。日本がありありと見えてきた。山吾が撮りたいのは、富士山を真上から見た写真である。

静岡に住む彼女の部子が「今富士山真っ白」とはしゃいで画像を送ってきた。山吾は提案した。「真上から撮った真っ白な富士山と、地上から撮った真っ白な富士山の写真を交換しようぜ」と。

部子は張り切ってベストアングルにまで出かけた。田子の浦である。現在この地名が残るのは「田子の浦」港だが、ここは旧名吉原湊であり、平安時代の「田子の浦」ではない。清水区薩埵峠から由比、蒲原辺りと推定されるが、正確な所は不明なのが地元の常識だ。彼女から「舟をチャーターした」とラインがあった。いっそ海なら大体田子の浦か、と山吾は笑った。宇宙と海上から、二元中継の撮影会。

カシヤリ。

メリークリスマス。二十四時丁度に、宇宙ステーションは富士山上空を通過した。

田子の浦に出て眺めると

真白の布のような富士山の高嶺に、雪は降りつづける

田子の浦に　うち出でて見れば　白妙の

富士の高嶺に　雪はふりつつ

山部赤人（四）

## 第二節 厳冬

### 第八十五話　スタック

「じゃタイミング合わせんぞ！　せーの！」

彼が後ろで押す。私はアクセルをゆっくり踏み。タイヤはずるりと滑りながら、それも雪を噛む。免許を持っているとはいえ、私はペーパードライバーだ。直線の道とはいえ、緊張で一杯である。後ろで押してる彼の頭に、みるみる綿雪が積もってゆく。

私たちは不倫の関係である。

彼は出張仕事が多く、そのうち一回くらいまぎれて二人旅行できるのでは、と言い出し、私はときめいた。二人きりの逃避行。冬と言えば温泉だろう。秘湯をネットで見つけた。長野まで彼の車で行く。ずっと二人きりの密室。誰もいない子作りの湯。いやんえっち。

だけど当日、記録的な大雪が降ったのだ。こんなに大きな粒の雪が降ることを、私は生まれて初めて知った。粉のような点々ではなく、かさぶたが降ってくるみたいだった。そして彼の愛車は豪雪に足を取られ、停止してしまったのだ。

助けを呼ぼうにもここは秘境。雪の中の一本道、通りすがりの人は誰もいない。JAFもタクシーも「あと二時間かかります」と言われた。待つくらいなら進もうと、私たちは覚悟した。

「于子！　もう一度、せーの！」

彼の押す力と私のアクセルを合わせる。車は少し進むが、しかしまた次の何かにはまる。これを繰り返しながらも、少しずつ車は進んだ。ワイパーをどんなに速く動かしてもフロ

ントガラスは白いかさぶたで埋まってゆく。バックミラー越しに見える彼も同様だ。

「代わるうか？ 宗篤」と、私は言った。

「出来る？」と、彼は肩で息をしながら言う。

私は真白な世界に出て、車を後ろから押す。押すというよりも、持ち上げてタイヤを固い雪面に乗っければ嘔みあうのでは。彼の愛車は白い息を吐き、その固い部分に乗った。

「行ける？」

彼は首を振って、フロントパネルを指さした。寒い所でバッテリーはすぐ上がる。雪国でガソリン車がなくならない理由だ。ハイブリッド車の弱点である。

「……二人で押していきましょう」

「正気かよ」

「大冒険になってきたね」

私はピンチで逆に燃えてきた。この白くまっすぐな長い道を、二人でただ車を押してゆく。そんなドMなシチュエーションに燃えたのかも知れない。

二人で押せば案外車は動いた。車を押しながら、白いかさぶたを二人で被りながら、私たちは昔の話や、どんな大人になりたかったのか、普段しない話をいっぱいした。

その後ガソリンスタンドを見つけ、宿にたどり着き子作りの湯に入ったのだが、私がこの不倫旅行で一番楽しかったのは、誰もいない世界で彼と車を押している、真っ白な幸福だった。

不倫は人生の停止である。それでも前に進む。

山里は冬こそ寂しさが勝るもの

人目も草も枯れてしまつて

山里は 冬ぞさびしさ まさりける

人目も草も 枯れぬと思へば

源 宗于朝臣 (二八)

## 第八十六話 橋の上

「ごめん今から行くわ！」

鍋の仕込みは大幅に遅れた。いや、里芋が鍋に入ってるとうまいだろうなあ、って思っ

ちゃったんだよね。「おいしい！」って目を大きく開ける、家恵の顔が浮かんでさ。

電話を切った俺は、外を見てびっくりした。

「降ってんじゃない！ しかも大雪だわ！」

見慣れた街が、白銀の異世界のようなだった。

俺と家恵のマンションは、川を挟んで向かいにある。大学三年になって同じマンションに引っ越したかったのだが、部屋が空かず、妥協して川向いに住むことにした。窓を開ければ彼女の表情くらいは見える。一度着替えをスマホのカメラで撮ろうとしたがカーテンに阻まれた。

鍋つくって持って行くよ、と俺はこの雪が降る前に言っていた。彼女はビーフストロガノフをつくるって言ってた。全然合わない料理だけど、二人で食べれば楽しい。どっちがどっちの部屋に行ってもいいんだけど、たまたま「俺が行く」って言ってしまった。

ビニール傘を差して首に挟む。両手に鍋掴みで歩くしかない。橋を渡ればすぐだし、と俺は雪を舐めていた。既に道は凍っている。滑ったら鍋は一卷の終わり。だが彼女に会いたい一心で、俺は牛歩のように進んだ。

橋の上を歩き始めた途端、突風に煽られ傘が飛んだ。雪がランダムに舞い上がる。ビルと川の空間で、橋の上は風が巻いているのだ。俺は鍋を置き、走って転がる傘を追った。と、凍った雪に足を取られてすっ転んだ。

「痛ってー」

尻を撫でながら、やけになって大の字に寝転んだ。

天空から雪が降っている。そういえば真下から雪を見ることってそんなに経験がない。今年は何年ぶりの雪の当たり年ってニュースで言ってたか。広い空で、幻想的な光景。

「遅いと思ったら幸持何してんの？」

透明な傘を持った家恵が迎えに来ていた。

俺は彼女に、隣に座れとゼスチャーする。上見てみ？ と示す。ビニール傘越しに、天空から降ってくる星たちが見える。

「うわあきれい」

織姫と彦星は天の川に阻まれて会えないが、鵜かきとぎが羽を渡して橋をつくるときだけ会えるという。鵜はいなかったが、真白な橋の上で彦星と織姫は会えた。

鵜が渡した橋に霜が散らばり、星のようだ  
その白さに夜更けを感じる

かささぎの 渡せる橋に おく霜の  
白きを見れば 夜ぞ更けにける

中納言家持（六）

## 第八十七話 無音

静かすぎて怖いくらいだった。

あまりに怖くて、私も是<sup>ゆきなり</sup>也も目を覚ましてしまったのだと思う。

「朝かと思った」

「私も」

積もった雪に街灯が反射して、電気を消してる筈なのに部屋の中は明るかった。障子がぼんやりと光るようで、まるでおしゃれな間接照明。

私たちは温泉旅館に泊まりに来ていた。せっかく女将さんたちが布団を二組敷いてくれたけど、恋人なんだから一緒の布団に入るに決まってる。ぐっすり眠ってしまったと思うけど、夜中に私たちは目を覚ましてしまったらしい。雪は音を吸収するから静かになるという。まるでこの部屋以外の世界が、死んでしまったのかと思った。

「ちよつと外行こうよ、終<sup>みのり</sup>則」

是はすばやく検索し、夜中でもやっているとんこつラーメン屋を見つけた。さすが。そこまで行こうぜ、と。いいね。

モノクロームの世界で、世界は無音に支配されていた。

「マンガでき、静かなのに『シーン』って音をつけるの、日本人独特の感性なんだって。それってさ、『雪がしんしんと降る』って表現と関係あるかもね」

「ちよつと一瞬黙ってみようぜ。せーの」

「……………」

「……………」

私たちの足音だけが響く世界になった。世界は本当に死んだのかも知れない。

私の心臓はドキドキして、彼に聞こえてしまうと思った。



夜明け前、朝の月かと思うほど

吉野の里は白雪が降っている

朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに

吉野の里に ふれる白雪

坂上是則(三二)

## 第八十八話 区間最速

歓声が止まらなかった。

ウチの大学は4位。前の走者の前田がひとつ上げた。任せろ。俺はタスキを受け取る。ウチの大学の伝統の色は黒一色。洗濯しすぎてちよつと薄くなつて墨色になっている。その墨色の希望を受け取り、俺という弾丸は一本道へ発射された。

富士山が迫る。箱根最大の難所、上り坂地獄の第五区が俺を待つ。

大学陸上部に入ったとき、二年生に円香先輩がいた。円香先輩の専門は障害走で、強化選手に毎シーズン選ばれ、マジで五輪が見えていると言われた。先輩が次々とハードルを越える姿は無駄なくブレなく美しく、辛いときは彼女の凛とした姿をいつも思い出した。俺もあんな風に人生の障害を越えるんだ。そのイメージトレーニングに、円香先輩の走りは理想的だった。

一年が二年に告って、相手にされる訳がないとは思ったよ。でも気持ちが抑えられなかったんだ。でも円香先輩が、四年の大原主将とつき合ってるなんて知らなかったよ。主将の女をペーペーの一年がかつさらえる訳ねえし。なんという大きな障害だ。俺は成績で目立たなければならぬ。長距離はもともと得意だったが、駅伝メインに絞った。駅伝はマスコミが注目する。そこで目立てば次もある。

大学で陸上を引退してゆく先輩は沢山見た。途中で走るのを辞めて、サラリーマンになる意味など俺には分らない。俺は中学で陸上をはじめ、もう八年間走っている。出来るなら死ぬまで走りたい。死ぬ時には「俺は走り続けて死んだ」と言うんだ。走ることが人生で、人生は走ることだ。障害物が現れたら、円香先輩みたいに美しくブレずに飛ぶんだ。

風がきつい。釘みたいに刺さる。だが俺の体温は十分だ。心拍数も上体も安定している。

たかが富士嵐が、俺を折れると思ってるのか？

二年になったとき、円香先輩に二度目の告白をした。だけど社会人になった元主将キャプテンはまだ続いてて、今回も玉砕だ。社会人对ペーパーの学生、やっぱり勝ち目はねえ。障害ハイドルはまだデカイ。

三年になって、ようやく駅伝チームに入れた。「山の神」の僧根先輩が引退したからだ。先人の引退でチャンスがやって来るのも悔しいが、チャンスはチャンスだ。障害ハイドル、やつとひとつ目を越えたかな？

夏から第五区の歩道を何度も走った。コースは目を瞑っても出てくるし、雨でも強風でも、どんなコンディションでも対応できるようにした。アスファルトの路面を、歩いて目で確認した。誰よりも俺はこの山で速い、そう思えるまで走り続けた。

三年の秋、円香先輩と元主将キャプテンが別れた。だけど俺は箱根に目標を絞っていたので、それをチャンスとは思わなかった。その代わり、

「箱根の走りで感動させられたら、俺とつき合って下さい」と俺は三度目の告白をした。

「俺は円香先輩の障害を越える姿から、勇気をもらったんです。同じものを返したいです。もし返せたら、俺と先輩は対等です」

と付け加えて、「生意気言ってる」とたしなめられた。四年の円香先輩は、今や女子部の主将キャプテンで、やっぱり俺なんかと格が違う。

箱根湯本駅を過ぎ、いよいよ地獄の山道に入った。心臓は悲鳴を上げて俺は悲鳴を上げない。同じペースを鉄のように守る。風が突き刺す。さっき無駄だと言ったろ。

俺は墨色のタスキをぎゅっと握った。こいつを次に待つ、同期の正春まさはるに渡すんだ。往路のクライマックス。ゴールに円香先輩が待っている。俺はそこで円香先輩に、四度目の告白をするんだ。

山は開けた。一番標高の高い芦之湯あしのゆは過ぎ、芦ノ湖あしのこまで下り一直線。最後の直線で一気に追い込む。景色は真白。

——真白？

俺は体を起こす。円香先輩や後輩たちが、俺を心配そうにのぞき込んでいる。

「タイムは？ 区間最速出たる」

皆、残念そうな顔をした。

俺は右手に握られたままの、墨色のタスキを見た。

「……渡せなかったのか……」

途中で倒れただつて？ 何の為に走ってきたんだよ。なんだこの結末。これが俺の三年間の集大成かよ。円香先輩は今年卒業だぞ？ なんなんだこれ。

円香先輩は、俺に肩を貸しながら言った。

「来年も走るんだろ？ 箱根」

悔しくて泣きながら俺は言った。

「あと一回走れるチャンスがあるなら、やりますよ」

「なら待つよ。寛慈」

え？ 待つ、つて何を？ 『つき合って下さい』？

山の神は最後に、特大の障害を用意したようだ。

「区間最速で、あなたの所へ行きます」

俺は墨色のタスキを、誰よりも強く握りしめた。

恐れ多いけど、この辛い世の人々を救いたい

俺が立つ山に、墨染めの袖がゆく

おほけなく うき世の民に おほふかな

わが立つ袖に 墨染の袖

前大僧正慈円(九五)

## 第八十九話 プライド

「私にも矜持があるので」と、彼女は断ることで知られている。

新進世代で頭角を現した女優、久家伊吹は、清純派のイメージとはやや異なる、「プライドの高い女優」と同年代の俳優仲間から噂されていた。

六人ダンスユニットの祐が、バラエティ出演後の打ち上げで口説いたが断られた。共演し、ベッドシーンすらあった当代きつてのモテ俳優、宗親の執拗なる口説きもひらりと躲す。大物プロデューサー王谷の金銭的囲い込みもスルーである。すべて「矜持」でだ。

「どんな男なら落ちるんだ？」

男じゅうの噂となった。だがそれは、伊吹本人にも分らない。別にプライドが高く、お高く止まっている訳ではない。ただ怖いのだ。何故なら、彼女は処女だったからだ。

中学生で白血病の美少女役でデビューして、すぐにスターになってしまった伊吹は、男を知らないままここまで来てしまった。中一の時に手を繋いだつきり、男子に触れたことすらない。女優仲間には黙っている。彼女たちはクラスナンバーワン美女トーナメントの優勝者たちで、自分こそが一番の女と思っている人々だ。祐や宗親が粉をかけてきたと知ったら、「何故私に出来ない？」と敵意の刃を向ける。芸能村は広いようで狭い。噂は千里をすぐ走る。自由のふりをした窮屈で、伊吹にはここ全体が籠の中のように見える。

次のドラマの現場で、伊吹は「今女子高生に最も人気がある俳優」かみこともき神子友紀と出会った。彼は初日から口説いてきた。照明を直す少しの間にも、ランスルー直後にも、メイク1と2の間にも、セットチェンジ待ちのストープの前でも。

「露骨にガンガン来ますね」と伊吹が感想を述べたら、悪びれもせず答えた。

「だって君に恋する役だもん。こういう気持ちにならなきゃ。俺はデ・ニーロ・アプローチなんだ」

出たデ・ニーロ・アプローチ。本当にロバート・デ・ニーロの出演作をちゃんと見ているのだろうか？ 「レイジング・ブル」の肉体づくり以外何を知っている？ 伊吹は尊敬できない男は、好きになることすらない。

三日間彼のアプローチを無視していると、急に彼は大人しくなり、今度はヘアメイクのアシスタントの女の子に粉をかけていた。ああ、誰でもいいのか、と伊吹は溜息をつく。

本当は自分は処女を捨てたいのに、ただここまで守ったのだから、最初の男はすごい男であるべき、と考えていることに伊吹は気づいた。それってプライドってことじゃない？ それとも他人の価値で自分の価値を測ろうとしている？

次の日の撮影、友紀は遅刻してきた。同じだけヘアメイクの子も遅刻をした。

「伊吹ちゃんってプライド高いよね」

隙間時間に、馴れ馴れしく友紀は話しかけてくる。こっちの気も知らないで。

「そうですかね？」

「ホラそれ。なんで丁寧語になんの？ 仕事仲間なんだからさ、もっと砕けようよ。仲間

と仲良くしたら楽しいよ?」

そう言って白い歯で笑う。急に伊吹は猛烈な劣等感を抱いて下を向いた。

次の日、友紀は出番がなく現場にはいない。伊吹は無意識に彼を探している自分に気づいた。ヘアメイクのあの子は皆と打ち解けて笑っている。女としてどちらが上かと言うと、彼女の方だ。いや、上とか下とか言ってるのが、そもそもプライドなのだ。顔に出さないように考えながら、目だけは彼を探していた。

名高い高師たかしの浜の高波には、かからないようにしましょう

無駄に想いをかけて涙で濡れないように

音にきく 高師たかしの浜の あだ波は

かけじや袖の 濡れもこそすれ

祐子ゆうし内親王家ないしんのうけのみき紀伊きい(七二)

## 第九十話 泥棒猫

渋谷でナンパされた男に、横浜で抱かれた。

そう妹の光ひかりが言ってきて、姉の模恵もえは「ふーん」と興味なさそうに返した。

「東京の人?」

「横浜。地元だし、いっかなって」

「地元だったら誰にでも抱かれんのかよ」

「いや、カッコよかったし」

「カッコよければ誰にでも抱かれんのかよ」

「そんなことないよ。波長も合ったし、考え方も尊敬できるし」

「尊敬できる男が、ナンパなんかするんだ」

「部活が今暇だからって言った」

「ふーん」

「あのさ、お姉ちゃん高三だから詳しいでしょ」

「高三の何に?」

「高三で経験人数四十はフツー、って言ってただけど」

「その子高三なの」

「そう。多くない？」

「多いと思う。このへんじゃ多い方でしょ。どこ高？」

「源みなもと高校」

「えっ、ウチの彼氏と同じじゃん」

「えっ、お姉ちゃん彼氏できたの？」

「最近ね」

「知らなかったよ。カッコイイ？」

「まあまあ」

「じゃ私とつちやお！」

「この泥棒猫！」

「きゃあー、にゃーん！」

「で」

「源高校の水球部って言った。お姉ちゃんの彼氏と知り合いかもね」

「ちよっと待って水球部？」

「冬は陸トレばっかで暇なんだって。だから……」

「ちよっと待って名前は？」

「相模相輔さがみそうすけ」

「……」

「え、まさか」

「殺す」

「私を？」

「相輔を。いや、アンタも殺す。でもナンパだし、光は知らなかったから相輔を殺さざるを得ない。……その、彼の尊敬できる考え方って何？」

「人類博愛」

「……この泥棒猫」

光と模恵は源高校まで行き、相輔を捕まえて詰めた。盗んだ方が悪いのか、盗まれた方が悪いのか。だが姉妹に詰め寄られる修羅場を収めようとして、

「じゃ、三人でしようぜ！」

と提案した彼の阿呆面を、模恵は許していない。

恨み疲れて、涙で乾かぬ袖すらもつたいない  
なのにこの恋の噂で、私の評判が落ちるだって？

恨みわび ほさぬ袖だに あるものを  
恋こひに朽ちなむ 名こそ惜しけれ

相模さがみ（六五）

## 第九十一話 隙間風の夜

「お前は純粹すぎるんだよ」

先輩にそう叱られた。

技の入りも普通、試合展開も普通、マイクアピールも決めポーズも普通。プロレスラーとして伸び悩む光俊みつとしはどうすればいいか悩み、先輩レスラーの星ほしに相談した。

「組んでみる」

先輩は四つに組む手を作った。光俊はその両手をつかむ。

「バカ！ そこだよ！ オレオレ詐欺に引つかかるババアかよ？ 相手の誘いに百パー乗るなよ！」

「でも、組んでみると言ったじゃないですか」

「相手が誘ってきてるんだ。『乗る』『乗らない』の選択肢があるだろ」

「はあ」

「誘いを拒否して、いきなりマシンガンローカマしたっていいんだぞ？」

「えっ」

「えっ、じゃねえよ。お前何年プロレスやってんだ」

「三年ス」

「試合の面白さって何だ？」

「技の決まる流れとか、美しさとかパワーですかね」

「馬鹿野郎。駆け引きに決まってるだろ」

「駆け引き」

「押したら引く。引いたら押す。押すかと思ったら引く。引くかと思ったら押す。この騙し騙されこそ、人と人が絡み合う意味だろ」

「絡み合う」

「考えたことすらなかったか。だから純粹だったの」

「純粹なことは、悪いことですか」

「悪いとか悪くねえとかじゃねえ。世間は純粹じゃねえ。清も濁もあるだろ。コインの表裏を両方知らねえくせに、どちらを取るとかねえわ」

先輩は小一時間スパーリングにつき合ってくれたが、全ての騙し合いに光俊は引っ掛かり、ことごとく芯を外された。

「悔しいッス、自分悔しいッス」

「お前がいかにも純粹か、自分で分ったか」

「……」

光俊は答えられなかった。先輩は汗を拭きながら言った。

「よし飲みに行くぞ。それから風俗だ」

「えっ、自分彼女いるんで」

「ハア？ お前男だろ。そもそも俺たちは地方巡業のプロレスラーだぞ？ 各地各地に女をつくって、それを回るようにするんだよ」

「……そんなもんですか」

「その純粹さを叩き壊してやる。来い」

光俊は散々飲まされ、風俗に連れられた。だがせつかく先輩がおごってくれたのに、その場ではうまく発射できなかった。男としての敗北感で光俊は落ち込んだ。敗北？ 浮気しなかったから勝利？ どっち？

巡業先のホテルは安宿で、ひゆるひゆると隙間風が入って寒かった。メインのレスラーになれば、もっといい部屋に泊まれるのだろうか？ 先輩の部屋はマシなのか？

東京の彼女、恵と話したかった。夜中の四時だ。もう寝てるだろう。

「純粹であることは、悪いことだろうか？」

と書いたが、いきなりそんなことを言われても意味不明だろうと思い、消した。

「好き」

とだけ書いて送信した。明日の朝、彼女はこれを見てポカンとするだろう。

「ねむい。すき」

意外にも返事がすぐに来た。

その文字を見ながら、光俊はいつの間にか眠ってしまった。



あなたのことを思う夜はなかなか明けない  
寝室の隙間もあなたも、ずっとつれない

夜もすがら もの思ふ頃は 明けやらで

閨ねやのひまさへ つれなかりけり

俊恵しゅんえ法師ほうし（八五）

## 第九十二話 人生受付嬢

ものすごい美人の受付嬢がいると聞いて、同僚の営業に同行させてくれとわがままを言い、十メートル先から恋に落ちた。

白い手袋と白い帽子。水色のジャケットに白いブラウス。そこに風が吹いていた。光が集まっていた。一幅の絵をそこに飾るより、何倍も効果があるだろうと思った。

彼女とお近づきになりたい。涼やかに受け付けて欲しい。俺は営業成績を上げ、その会社担当までのし上がった。これで堂々とエントランスロビーに入れる。まず顔を覚えてもらう所からだ。だが彼女はいなかった。負けるか、俺は営業だぞ？ 日参するし、色んな時間帯に行つてやるぜ。こうして担当者に気に入られ、俺はひとつレギュラーを頂いた。通い詰めるうちに、彼女は月水金の午前中にいることが分かった。

彼女は鈴のような声で「いらつしやいませ」と言ってくれる。天上の響き。それだけで耳が幸福になる。「アポは御済みですか」「失礼ですがお名前を頂戴できますか」「十六階に案内します。入館カードをお貸ししますので目につく所に下げて下さい。ご返却はグートで承ります」「では良いお打合せを」。彼女の発したすべての言葉が、どんな名言集よりも俺の心を揺さぶり、動かす。どうやって彼女に話しかけるべきか。華麗な会話テクニックなど、他のイケメン営業にあっても俺にはない。

「あなたに受け付けてもらえて、良かったです」

彼女との接点を広げるしかあるまい。そしてこれは俺の心からの本音である。へんな小細工をせず、ストレートだったから彼女に届いたのかも知れない。

「……有難う御座います」

微笑む彼女を見て、俺は二度目の恋に落ちた。

帰りに受付に寄って挨拶をしようとしたが、悪い男が三人も彼女を食事に誘っていた。

「気持ちには分るが、彼女に仕事をさせてやれ」

と俺は騎士のように割って入った。受付には列が出来ていて、三人はさすがと引き下がる。受付の列は進み始め、彼女は仕事を続けることが出来た。そんな正論を吐いた手前、「せっかくだからお茶でもしませんか」とも言えまい。俺は颯爽と去るしかなかった。

次の週の月曜十時。彼女とまた会えると思ってやって来た俺は面食らった。なんと彼女がいないのだ。

「悠見さん、風邪か何か？」

心配して別の受付嬢に聞いた。

「彼女、別の会社の担当に」

さすがに異動先は聞けまい。俺は彼女を探す旅に、出ることにした。

一カ月、二カ月、三ヶ月。

東京に会社は何社あるんだろう？ 知らない会社に飛び込み営業する。最初に会うのは受付嬢だ。彼女は見つからない。だけど飛び込んだ中で、一社、二社と商談がまとまり、俺の成績は上がり始めた。

四ヶ月。五カ月。六カ月。

どこに弊社の需要があるか、話してみるまで分らないもんだ。靴はすり減った。スーツもよれよれだ。だけど仕事はどんどん増えていった。

沢山の会社を見ていると、いい会社と悪い会社の差が分るようになってきた。悪い会社は、どこかロビーで嘘をついている。風水ってほんとにあるんだと思う。営業は心だ、なんて上司の昭和みたいな話、嘘だと思っていた。いい会社は受付に風が吹く。そんな会社に飛び込み営業をかけ、俺の成績はどんどん上がっていき、なんと部内で一番を取った。

雪の降る一月。一年かかって、ついに俺は彼女を見つけた。受付に風の吹く、いい会社に彼女はいた。正解は千葉だったか。都内にいない筈だ。

「いらっしやいませ。……」

彼女の「……」に若干のチャンスを感じた俺は、心臓をバクバクさせながら思い切って話しかけてみた。

「覚えてます？ ライフライフ生命さんで、三人が『ご飯行こうよ』って言ったのを」

「あー！」

彼女は拳を手のひらに打ちつけて言った。そんな古典的なゼスチャーする人なんだ。

「あの時はお礼も言えず申し訳ありませんでした。実はひそかに困ってたんです。あと」

「あと？」

「『あなたに受け付けてもらえて良かった』とお褒めを頂いた、珍しい人だったので、良く覚えています」

「あの後、異動されたと聞きました」

「そうなんですよ。派遣先が変わって。あ、今日はどうな御用事ですか？」

「えっと……飛び込み営業です」

「御約束は……」

「ないですね」

「あ。そうですよね、飛び込み営業ですもんね。……電話しますのでお待ち下さい」

電話する横顔もきれいだ。断られても、あと百回飛び込みに来るぞ。

「はい。信用出来る方だと思います」

ん？ 俺のことを言ってくれてる？

「……はい。ではご案内します」

彼女は電話を切り、俺に言った。

「二十三階で、担当の生田いくたがお話を伺います」

「あ。……ありがとうございます！」

俺は勢いよく頭を下げた。

「借りを返せて、良かったです」

彼女の微笑みに勇気づけられ、俺はその商談をまとめることが出来た。

「うまく行ったよ！ あなたのお陰だ！」

エレベーターからスキップして出てきて報告すると、彼女は笑った。

周りを見る。彼女の受付業務の邪魔にならないように。

「実は僕、あなたを探して数社飛び込み営業を続けたんです。もう一度会いたくて、それだけ飛び込むと、結構商談ゲット出来るもんです。あなたのお陰で、僕はっぱしの営業になれたんです。それで、お礼を言いたくて」

「はあ……有難うございます」

「六壬忠嗣ろくみやうただすしと言います。僕の人生も、受け付けて下さい」

「？」

「僕の人生を、受け付けて下さい」

「……アポは、お済みですか？」

「今です」

彼女は少し考え、微笑んだ。

「次回のご来社を、お待ちしております」

ロビーを出ると大雪だった。振り返ると、彼女がお辞儀をしている。

馬鹿のふりをしてまた飛び込みに来よう。俺はお辞儀を馬鹿丁寧に戻した。

「恋してる」という噂がもう立ってしまった

人知れず思い始めたところなのに

恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり

人知れずこそ 思ひ初めしか

壬生忠見（四一）

### 第三節 晩冬

#### 第九十三話 長い夜

底冷えが、私を足元から殺してゆく。コート二枚マフラー帽子耳当てモモヒキのフル装備の防壁を破ってくる。体の芯に到達しない為に、その場で足踏みをする。なにゆえ私はこんな所にいるのか？ 見知らぬマンションの物陰に隠れ続けて。

夫の綱兵（綱兵）の、浮気の証拠をつかむ為である。

ここに住む女と浮気していることを、私はついに突き止めた。ラインのやり取りなんて生ぬるい。現行犯を仁王立ちで待ち構えてやる。どんなポーズが効果的だろう？ 仁王立ちか、包丁を構えるか、中指を立てるか。私は物陰で練習していた。

タクシーがやって来てマンションの裏口へ回った。綱兵が乗った？ しまった裏口か！ 運よくタクシーが通りかかった。私は「前のタクシーを追って！」と、ドラマでしか聞い

たことのないセリフを言う破目になった。

家に向かう方向とは全然違う。「今夜は仕事で遅くなる」と彼は言っていたが、会社の方向でもない。着いたのは別のマンション。まさかのダブルヘッドだ。

しばらくして綱兵が出てきた。入ったときは締めていたネクタイが、なかった。

三軒目。四軒目。そして五軒目。

この男、すごいのでは、と逆に感心してしまった。出てきた綱兵は流石に疲れの色が見えた。何も一晩に集めなくてもよくない？

彼のタクシーは、ようやく我が家の方向へ走り始めた。私は「どんなことがあってもいいから、前の車を追い越して先に着きたい」と特別料金を積んだ。

すっかり朝だった。

私は先に家の前に立ち、彼の乗った白いタクシーを待っていた。ポーズなんてもう忘れて、ただ冷たい石の門柱に寄りかかっていた。

「どうしたの未道<sup>みのり</sup>」

彼は驚きつつ、平静を装った。

「なんか、眠れなくて」

「……心配事？」

「ネクタイなくしたの？」

彼は一瞬動きが止まる。

「あ。……ああ。あー、ポケットだ。息苦しくなっさ」

コートの右ポケットから、皺にならない為に綺麗に丸めたネクタイが出てきた。そういうところよね。

「お願いがあるんだけど」

「何」

「抱いて」

「……今から？」

「そう」

彼は黙って私にキスをしてくる。

ふうん。なんだかんだいって、まだ体力は残っているんだ。

他の五人の女が知らない、この長い夜のこと。私だけが知ってると思ったら、なんだか興奮してきた。

歎きながら一人寝る夜、明けるまでの間が  
いかに長いものかご存知？

歎きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は  
いかに久しき ものとかは知る  
右大将道綱母(五三)

第九十四話 天気予報、曇り

夢の中に、敏深さんが全裸で現れた。

ごく自然で、恥ずかしがってるとか、こっちがびっくりするという訳ではなかった。ただ敏深さんの長い髪が肝心の所を隠してて、おもむろに俺と敏深さんは夢の中で交わり：  
…生々しいその感触に、俺は驚いて起きた。

敏深さんは、五つ上の白藤先輩の彼女で、俺より三つ上の元モデルだ。白藤先輩は俺を新人の頃から見てくれた先輩で、しかも社のエース。理不尽な上の要求に嘔みつき、突っぱね、そして結果を出す。もう人生の模範解答のような人で、その彼女もイイ女で。

その白藤先輩に急に仕事が入り、いい店を予約してしまったのでキャンセル出来ないから、代わりに席を埋めろと言われた。俺は身の丈に合わない店で彼女と飲むことになった。酔い始めた彼女の話は、白藤先輩の愚痴が中心であった。でも誤解かも知れない。そうだ、それは彼女の一方的な思い込みだ。俺は先輩の弁明を試みた。だって二人は完璧であるべきで、俺の理想で……

「どっちの味方よう」

彼女はすねた。すねた顔も可愛くて、思わず抱きしめたくなる。先輩、この人を離しちや駄目ですよ。

「あー、もちろん、敏深さんです」

「ヨシ！」

彼女は、空になった俺のグラスに並々と酒を注いだ。

「いや、日本酒はヤバイす。酔っ払います」

「酔う為に飲んでるんでしょう、行輝！」

俺は酔うと体温が上がるのか、すぐメガネが曇る。それを見て彼女はけらけら笑い、天気予報、曇り、天気予報、曇りと、ガンガン日本酒を注いだ。

そして気づいたら我々はホテルにいた。

「夢の中よりきれい」

と思わず言ってしまった。

「でしょ？」

「あれ、なんで夢の話知ってるんです？ 俺その話しました？」

「酔っぱらってるの？ さんざんその話して、どっちがいいか試そうってあなたが」

それはその一夜だけで、その後こちらからの連絡は全て無視された。

夜寝るとき、あのホテルの夜を思い出す。泥酔してたわメガネが曇ってたわで、詳細がぼんやりなのが本当にむかつく。もう一回くらい、夢の中に来てくれてもいいのに。

住<sup>すみ</sup>の江<sup>え</sup>の岸に寄る波のような夜

夢の中でさえ、あなたは他人の目を避けて来てくれないの？

住<sup>すみ</sup>の江<sup>え</sup>の岸による波 よるさへや

夢の通<sup>ち</sup>ひ路<sup>ぢ</sup> 人<sup>ひと</sup>目<sup>め</sup>よくらむ

藤<sup>ふじ</sup>原<sup>はらの</sup>敏<sup>とし</sup>行<sup>ゆき</sup>朝<sup>あそん</sup>臣<sup>しん</sup> (二八)

## 第九十五話 監視カメラ

この研究所の宿直室では、ただただ何も起こらない。

スマホでもいじって、寝なきやそれでいいだけだ。何も起こらない監視カメラの映像を、ただ朝まで見ているだけの仕事である。研究所から実験体が逃げ出すとか、未曾有のウイルスが漏れるとかの事故もない。延々同じ映像の耐久レースさ。この映像が実は写真だったと知っても驚かない。死んだ俺の心に、ちょうどいい仕事を見つけたぜ。

だが美人研究員の乃<sup>の</sup>染<sup>ぞ</sup>実<sup>み</sup>さんだけは違った。派手な赤い服、茶髪でいつもフルメイク、ココナッツ系の甘い香水を振りまいて、そこだけスポットライトが当たっていた。

その夜は、彼女の研究室だけ電気がついて、俺は見るともなしにその研究室を眺めていた。だけど急に電気が消えて……始まったんだよ。何がだって？ 皆まで言わせるなよ。

男と女が二人きり。深夜誰もいない。ムラムラ来たら……始まることもあるわな。電気が消えれば誰にも見られないって思ったかい？ こっちには暗視モードがあるぜ？

監視カメラには転送速度というものがある。普通の映像は、一秒間に三十枚撮って動画になる。だがこの監視カメラは容量節約の為に、一秒に一枚の写真しか送って来ない。一秒、次の一秒、その次の一秒……。少しずつ状況が進み、一秒ごとにそれが送られてくる。コマ送りとはまた違う、変てこな覗きになった。

次の金曜の夜も、深夜まで乃染実さんは残っていた。別の男性研究員と二人だった。

そして二人は始めた。二股なのか？ ヤリマンなのか？ 互いの男はこれを知ってるのだろうか？

俺は監視カメラのマニュアルを取り寄せ、一秒に一枚から、一秒に三十枚のフル動画転送に設定し直した。他の二十九台のカメラを二秒に一枚に落とせば、メモリの辻褄は合う。そしてそれをコピーできるように、パスワードを設定し直した。

金曜の夜が来た。また別の男と、彼女は始めた。動画にして初めて気づいた。彼女、カメラをちらちらと見ている。見られて女は興奮するというが、俺も興奮していた。

これで終わればただのポルノ話だった。だけど俺は気づいたのだ。彼女が男から金を受け取っていたことに。

次の金曜の夜、彼女はスーツ姿のおやじを連れ込んでいた。次の週は若い男。ずっとカメラ目線。金銭を受け取り続ける彼女。

ちん。一階に着いたエレベーターの音に、俺はビクツとする。たった今行為を終えたばかりの二人が、守衛室の前を通る。ココナツの甘い香りが風に乗ってきた。

彼女は俺の名札を見て言った。

「いつもお疲れ様です、赤川さん」

「いつも見てます」と喉から出かかったが、俺は会釈するのみだ。

「見られると、女って輝くのよね」

意味深な言葉を残して、彼女は甘い香りとともに去って行った。

次の金曜。彼女がまた別の男を連れて来た。

「先に行つて」と彼女は男を先に通す。

「赤川さんも混じる？ 彼、三人が好きなんだって」

思わず首を振った。そんなこと出来る訳がない。

だが守衛室で録画は開始する。俺は何を見てるんだ。彼女の行為はハードディスクに溜



めまぐった。彼女はカメラ越しにずっと俺を見ている。

次の金曜、彼女は来なかった。男の研究員に聞くと、他の研究所へ移ったらしい。役員クラスの口利きだそう。あのおきのおやじか。

元の設定に戻した監視カメラは、一秒に一回、静止画のような研究所を、むなしく映し続けている。

ぐずぐずせずに、眠ってしまえば良かったのだ

夜が更けて月が傾くまで見てしまった

やすらはで 寝なましものを 小夜更けて

傾くまでの 月を見しかな

赤染衛門（五九）

## 第九十六話 生れ変っても

この歳で、喪主になるとは思わなかった。

「死ね」って時々思ってた旦那が、まさか死ぬとは思わなかった。神様か悪魔が、私の望みを叶えてくれたのだろうか？ 浮気相手の家で心不全。いわゆる腹上死だ。

本望でしょ？ あなたほど浮気な人を私は知らないわ。結婚してから、分ってるだけで十二人。よくそんなに浮気できたものね？ 写真の中のあなたは、何故そんなに笑っているの？ あの写真はまだ幸せだった頃の写真ね。私といて幸せだったから？ それとも十二人のどこかの女といて幸せだったから？ 今となっては、それを問うことも出来ない。

「生まれ変っても夫婦でいよう、七清」

「はい、太輔」

そんな会話を初夜に交わしたことだけは覚えている。生れ変ってまたあなたと夫婦になるかしら？ どんな腐れ縁が、私たちの間にあってそうなるの？

私は眠っているような彼に、最後に言った。

「私はこれから、十二人と浮気をします。その後、まだあなたを好きだったら、来世に夫婦でいましょう」

私は彼への恨みのつもりで言った。だけど不意に涙が溢れて止まらなくなった。今世で

はもう会えないことに、気づいてしまったからだ。

これから長生きすれば、この時も懐かしく思えるだろうか？

辛かったあの時も、今では愛しいのだから

ながらへば またこの頃や しのばれむ

憂しと見し世ぞ 今は恋しき

藤原清輔朝臣（八四）

## 第九十七話 何チョコ

「いや絶対無理でしょ」

私達は学校のそばの土手に座り、脩太先輩のことについて話し合っていた。

脩太先輩は三年生でサッカー部の部長。イケメン、爽やか、彼女さんが超絶美人。私達のようなちんちくりんの、一年の糞雑魚女子が勝てるわけがない。

だけど私は脩太先輩のことが好きなのだ。四月から一年近くも思い続けてきたのだ。そして来週は女子にワンチャンの、バレンタインデーである。

「だから無理だって言ってるでしょ、弐里」

親友の三沙子は冷静に分析する。

「そう思ってる『ワンチャン女子』がその日大量に発生するとしたら？」

「あり得る」

「だから目立つんよ。フライングして渡すか、逆に遅くに渡すかよ」

「でも『タイミング悪い女子』と思われたら？」

「うーん、じゃ、目的よ。弐里はどうしたいの？ 『彼女にしてください』って言うの？」

「そんなの恐れ多くて無理」

「じゃ『義理チョコ』でいいの？」

「あり得ない」

「じゃ何チョコならいいの？」

私は答えられない。三沙子は色々なパターンを出してきた。

「『一回だけデートして下さい』チョコ」

「一回かー」

「『一回だけ抱いて下さい』チョコ」

「生々しすぎる」

「『一回だけ手繋ぎたいです』チョコ」

「アリだけど、一瞬で終わりそう」

「『一回だけカフェでお茶したい』チョコ」

「近い！」

「『一回だけ一緒に帰って下さい』チョコ」

「あ……エモい……」

「『一回だけ同じ空気吸わせて下さい』チョコ」

「死ぬ。尊くて死ぬ」

「『一回だけ目合わせて下さい』チョコ」

「なんで全部一回限定なんだよ！」

私は狂ったように叫ぶ。ここが土手で良かった。周囲の人々には、青春の叫びとして認知されるだろう。

「結局、何チョコなら満足なんだよ？」

「えっと……全部入りチョコで」

「は？」

あと七日。死刑執行を待つ気分。

有馬山ありまやまが見える猪名いなの笹原に風が吹くと

そよそよと音が鳴る

そうよ、そうよ、あなたが忘れられる訳ないじゃない

有馬山ありまやま 猪名いなの笹原 風吹けば

いでそよ人を 忘れやはする

大式三だいしきのさんみ位み（五八）

## 第九十八話 パーティーナイト

「この松の下にいと、カップルの相手が見つかる」という都市伝説が、ウチの大学構内にある。

ものすごい大ぶりな松で、ウチの大学が出来る前から生えていたらしい。松はとても寿命の長い木で、五百年とか千年とか生きるそうだ。マジか、最長、平安時代からここに居る可能性が出てきたぞ。大先輩なんですか、先輩。若々しい緑のトゲトゲの葉を四方八方に張り巡らせてはいるものの、幹や太い枝はさすがにひび割れた老人の肌のように、ジジイが若ぶってイキっているようにすら見えて面白い（あ、ババアかも）。

ウチの大学には卒業パーティーというものがあり、アメリカかぶれの学長が「プロム」なるものを採用している。男女のカップルじゃないと入れない奴で、社交的なダンス的なパーティー的なやつ。これがモテない人種たちに、恐ろしい程のプレッシャーを与える。卒パに出れない奴は、社会に出る資格もないと。

ウジ虫陰キャの俺は、だからこの松の下で待ってみることにした。

テストも終って閑散としたキャンパスは、人っ子一人いない。ここに突然、可愛い子ちゃんが背中まる出しのシャンパンゴールドのドレスでやって来て、「卒業パーティーで踊りませんか？」とか誘ってきたら、幻覚か詐欺だろうよ。

「松、じゃお前とパーティー出るか」

俺は松に話しかけたが、大先輩は答えなかった。ジジイでもババアでもいいよ。松なら異種恋愛愛もはなはだしい。LGBT以上の概念だろ。

腹も減ったし帰ろうと思ったら、向こうから同じサークルの風花ふうかがやって来た。

「何やってんの？ 克興かつおき」

「んー、帰る所」

「めし食った？」

「いいや。学食行く？」

風花は一年の時から同クラスで、ぶっちゃけ親友みたいなもんだ。

「風花は今日テストあったっけ」

「いや。私、ちょっと都市伝説試してたんよ」

「何？ フリーメイソン？ ニューワールドオーダー？」

「『松の下に居ると、カップルの相手が見つかる』ってやつ」

俺は動きが止まった。風花も同じことを？ だが彼女が指した松は、総合館の向こう側だった。俺は爆笑した。

「バカちゃう？ それこの松のことやぞ」

「え？ 『正門の裏の右の松』って……」

風花はその場でグルグル回り、頭の中の地図をグルグル回した。尻尾を探す犬かよ。

「で、カップルの相手見つかったんかよ？」

「違う松なら無理でしょ。あーあ、プロム一緒に行ってくれる男子、見つからなかったわ」

「……」

「え、克興、まさか……この松で……」

風花は俺の行為を一瞬で悟り、俺以上にゲラゲラ笑った。

「克興も都市伝説確認委員会かよ！」

「悪かったな」

「私なんか、松と一緒にパーティー出てよって頼んでたくらい」

「……」

「どしたの？」

「俺も同じことを言ってた」

風花はまたもや爆笑する。

「じゃ松抱えた同士でパーティー出るか！ チクチクするわ！」

「別に松いらなくない？」

「？」

「俺らで出ればいいじゃん」

「私と？ あなたが？」

風花はまたゲラゲラ笑う。

「王子様とお姫様じゃないけど、幼馴染と行くパーティーもいいんじゃない」

「幼馴染、ねえ」

「四年もいたらそんな感覚よ」

風花は少し考え、ドレスの裾をからげるふりをして、片足をちよんと後ろについた。俺

は笑いながら、王子のように右手を差し出した。手袋をつけてるのに気づいて取ったら、

手が滑って彼女にぶつけてしまった。

「それ決闘の合図だろ」と風花はまた笑った。

その都市伝説は、後日ほんとうになった。

誰が自分をよく知ってくれてくれるだろうか？

(長寿の) 高砂たかさごの松ですら昔からの友人じゃないのに

誰たれをかも 知る人にせむ 高砂たかさごの

松もむかしの 友ならなくに

藤原興風ふじわらのむねかぜ(三四)

## 第九十九話 松山で待つ

「逃げる！ 逃げる！ 逃げる！」

轟音と怒号が渦巻いていた。めりめりと家が壊れる音。水の音。叫び声。犬の吠え声。遠くからとてつもない大きなものが来る音。全部混ざっていた。

途中でおばあさんが転んだ。起こしてあげようとしたら、「年寄を助けずに、若い者が助かれ！」と怒鳴られた。私は走り続ける。振り返る余裕もなかった。ただただ大きな音が背中からやって来た。

二〇一一年三月十一日。十四時四十六分。とびきり大きな揺れのあと、遠くから海鳴りがした。「津波が来る！」って誰かが叫んだ。

高台へ逃げた。このへんの高台って？ ビルに上った人もいれば、二階の屋根に上った人もいる。息を切らしながら、私達は上へ上へと走り続けた。丘の上によく着いて、後ろを振り返る余裕が出来て、私は街がなくなったことを知った。TVのニュースで、黒い波や燃える街を見た。避難所にしばらくお世話になって、私は自分の家がなくなり、家族全員が流されただろうことを把握した。家に電話したって、あの黒い水の中だ。

宮城県多賀城市たがしやうの、この高台に生える「末の松山すえのまつやま」は、二本の巨おおきな松である。宝国寺ほうこくじの裏にあり、千年前からある「波はここを越えない」の言い伝え通り、ここまで津波が来ることはなく、それで私たちの命は助かった。

かつてつき合っていた恋人の元はじめと、デートで来たことがある。古今和歌集こきんわか(905)序文に「まつ山のなみ」として記録され、貞観地震じゆんがん(869)の津波を描写していると言われている。「松」は「待つ」と掛詞になり、ここで待つことは決して流されることのない確かな思いですよ、なんて和歌にときめいたものだ。

だけど彼が浮気して別れて、もう何年にもなる。東京で働いていると聞いた。人は流さ

れてゆく。津波が来ても来なくても。

あの一瞬で天涯孤独となった私は、避難所にずっといるのも気が滅入るので、毎日「末の松山」まで散歩することにした。「どこかへ行き、帰って来る」という日常を、壊したくなかったんじゃないかと思う。

津波の引いた跡は酷かった。何が何だか分からない粉碎されたものが無限に転がっている。家の一部だったり、車の一部だったり、人や動物の一部だったりした。避難所のお年寄りたちは身寄りもなく、「生き残ったけど、死にたい」と言っていた。彼女達の絶望を、私達は救う術がない。瓦礫と御遺体に分別されたそれは、毎日片づけられてゆく。「犬が人の手を啜えて走ってた」なんて話はしょっちゅう聞いた、お坊さんが毎日お経を上げていた。宝国寺にお参りする。神様仏様、どうかお助け下さい。急にこんな沢山の人の願いを叶えられないだろうね。しょうがない。順番でいいんで。私は後回しでいいんで。この性格のせいで、浮気されたのかな。もつと食い下がるべきだったかなあ。

今日も「末の松山」に行くと、東京に行った筈の元が立っていた。

幽霊かどうか、思わず確認してしまう。あれだけ沢山の遺体を見ている。抱きついて本物の人間だと分ると、私はわあわあと泣いた。

彼はニュースを見て電話したが、繋がらないので車で東北へ向かったのだそうだ。だが通行止めにあっていた為、ボランティアチームに入り、ようやく内陸まで来れたらしい。

「輔波、あの女とは別れたから」

彼はそう言って私を抱きしめた。私は自分を後回しにしている場合ではない。生きなきや。あのおばあさんが、私を先に行かせてくれたんだ。

まず彼の頬を張って、浮気を清算した。

約束したよね？

お互い涙で濡れた袖を絞ったあの日

末の松山を波が越えない位、確かなものだと思ったのに

契りきな かたみに袖を しぼりつつ

末の松山 波越さじとは

清原元輔 (四二)

人は何の為に生きるのだろう。

中二になるとそんな哲学的な問いに取り憑かれると、大人たちはいう。

人は何の為に生きるのか。何の為に死ぬのか。私は一時期猛烈に死体写真をネットで漁り、廃墟の写真集をたくさん買ってたことがある。中でも長崎の軍艦島ぐんかんじまの写真集は、ひときわ私を惹きつけた。かつて栄えた、島ごと全部炭坑だったもので、廃墟化して五十年。昭和の団体生活がまるごと死んだ廃墟になっている。廃墟は建物の死であり、システムの死であり、生活の死であり、文化の死である。車に踏み潰された動物の死体を、私は子供の頃ずっと見ていたことがあった。とてつもなく精巧で、侵してはならぬ神秘をそこに感じていた。

「軍艦島ツアーに行ける」と両親から聞き、私は飛び上がって喜んだ。父の実家が近くにあり、法事で家族ごと行くことになって、父がツアーに申し込み当選したのである。

巨大炭鉱の死骸、軍艦島。私は巨大な死を、見ることが出来る。

春も間近の九州の日射しは強く、海は青く波は高かった。長崎港から観光船で四十五分。もともと波の高い、厳しい海流の場所に軍艦島はある。だからぐるりとコンクリの護岸壁で固めてある。労働から逃げた炭鉱夫が海に飛び込んで逃亡を図ったが、陸地まで三キロとはいえ、複雑で強い海流に飲まれ、ほとんど助からなかったらしい。私は泳ぎはそんなに得意じゃないが、このうねる波を乗り越えて三キロも泳ぐ自信はない。ていうか、ちょっと船酔いしてきた。ガイドさんが配った酔い止めの飴、効いてくない？

「大丈夫？ 順子じゅんこ」

母が心配してくれる。大丈夫、たかが船酔いで、私の軍艦島への憧れが消せるもんですか。もうすぐあそこに上陸できるんだ。

軍艦島は通称で、端島はしまが元の名だ。地下に良質な石炭層があり、三菱が島ごと買い取って埋め立てた人工島で、軍艦「土佐」に似ている所からその名がついた。南北に長い島を一周護岸壁で取り囲んだのが船に見え、炭鉱夫と家族五千人が暮らした九階建てのマンション群や、三本の塔からもくもくと黒い煙が出続けている様は、過去の写真を見る限りたしかに軍艦によく似ている。

目の前に迫ってきた現在の軍艦島は、三本の精鍊塔は倒壊して既になく、黒い煙など出



していなかった。だがコンクリむき出しの住居群や護岸壁が、かつての軍艦姿を私達に物語っている。建物は外壁が落ちてコンクリと鉄筋がむき出しになり、樹木が覆っていた。大自然の緑が少しずつ文明のグレーを呑み込んでいく、その途中である。あと百年、千年経てば、完全にジャングルの勝ちになるだろう。

今や世界遺産となった軍艦島は、予算がついたのだろう、小綺麗なデッキと手すり整備され、観光客が歩きやすいようになっていた。崩落した赤レンガの事務所も見れたし、第二堅坑坑口栈橋だいにたいこうこうちせんしほしはかろうじて原型を留めていて、あそこから昇降機リフトで六百メートル地下に降り、続く斜坑で一キロ深まで挑む炭鉱夫たちを想像できた。

だけど観光客が行けるルートは安全で、だからつまらなかった。私はパッケージの死には興味はない。ほんとうの死を見たい。私はガイドの目を盗み、手すりを乗り越えた。

そこは廃墟の街。コンクリと廃材と生活跡の迷路を、奥へ、奥へと進んだ。

古新聞の切れ端が、風に乗って飛んできた。難しい漢字が時々あるが、『長崎日日新聞』ながさきにちじちしんぶん『大音響を発して発火』『端島炭坑大爆発す』『死傷者三十余名』の文字は読める。『密閉壁を吹き飛ばし火焰は猛烈に噴出す』の文字がエグい。当時の新聞だろうか？ 爆発事故の号外のようなだった。丁寧な切り抜きで、誰かのアルバムから飛んできたのだろうか。私は沈黙する廃墟群を見渡した。ここに五千人が住み、三交代制で二十四時間眠らず、エネルギーに満ち満ちていたことが信じられない。それが何故死んだのか。死とは何か。私はくらくらしてきた。船酔いのせい？ 強い日差しひさしのせい？ それとも中二病ちゅうじびょうのせい？ 傍にあった、朽ちかけた大八車に腰掛けた。

頭が痛い。目をぎゅつと瞑った。火花が飛ぶような感覚がある。

目を開けると、私は軍艦島に立っていた。

「ええ。」

どやどやどや！ ざわざわざわわ！

そこは密度の高い活気に満ちていた。炭鉱夫たちが行き交う。買い物客のお母さんや子供たちが走り回る。建物には「生鮮」「商店」「事務所」「酒」などの看板が出て、灰色だった街が、色とりどりのペンキやタイルで覆われていた。

「( )は……軍艦島？」

遠くに煙突が見えた。もくもくと黒い煙が出て、ベルトコンベアーが黒い砂を運んでい

る。

「どいたどいたどいた！」

声が出て、大八車が勢いよくやって来た。

私は咄嗟に避けようとした。間に合わず、私達はぶつかってしまった。

ガラガラガラン。沢山の鶴嘴くわみたいな道具がひっくり返り、土埃が立つ。少年は私に怒鳴った。

「ッてーな！ 何なんだよお前！」

「ごめんなさい！」

私は落ちた道具を拾い始める。少年も慌てて拾う。

「あー、これじゃ親方にどやされちまう！」

「ごめんなさい、私のせいで」

「鈍い女を避けられなかった俺のせいだ」

「同じ方向に避けちゃったし」

「くっそー、また丁半博打に負けたのか俺ー」

少年はてきぱきと拾い終え、まとめて大八車に乗せた。

「痛ッ」

私は刃物のどこかで指を切ってしまった。

「大丈夫か！」

少年は私の手を取り、血を舐めた。

「ツバつけときゃ治るぞ、これくらいなら」

少年は手をはたいて大八車を持つ。

「遅れた分急がなきゃ！」

「私が後ろ持つよ」

「ありがてえ！ 第二ダイニまで走るぞ！」

「第二ダイニって、第二堅坑抗口？」

「よくそんな難しい正式名称知ってるな！ そこ！」

少年と私は大八車で、ガタガタの道を転がるように駆けた。

「おせえぞ徳治！」

「すいません親方！」

「ごつい男たちが、かんかんになって待っていた。天也組という集団らしい。炭坑の仕事は二人一組で計五組、十人単位で仕事をする事が多く、鳶のように「何々組」と呼ばれる事が多かった。天也親方は特にがっしりした体格で、贅肉がほとんどなかった。」

「徳治のせいでもないだろうよ、親方」

親方を、背の高い男がたしなめた。

「そもそも道具を隠したのは、皇城組のやつらに決まってるぜ」

「……クソッ！」

親方は、煙草の灰皿代わりの缶を蹴飛ばした。坑道にはガスが出る事があるため火気厳禁で、炭鉱夫たちが最後の煙草をここで吸うのだ。

徳治くんは、私たちが運んだ道具を渡してゆく。

「徳治イ、これじゃ俺には短けえよ」

「すいません、事務所にあるだけかき集めて来たんですけど……」

「じゃ守にはオイラのを貸すからよ。短けえのでいい」

「親方にそれは使わせられねえすよ。これで十分でさあ。あーあ、今日の稼ぎは皇城組のやつらのせいで少ねえぜ？ 六番坑道のオイシイ場所、先乗りされたろうな」

男たちはぼやきながら二階建て昇降機に乗り込む。入れ替わりに、真っ黒になった炭鉱夫たちが上がってきた。一日三交代制の、交代の時間なのだ。

辺りはモーターの機械音、ベルトコンベアの動く音で満ちている。掘られた黒い砂（軍艦島は粉炭が多かったらしい）はすり鉢状の原炭ポケットで振るいにかけてられ、粉状の良炭と石状の硬に分けられて、ベルトコンベアで貯炭場へ運ばれてゆく。

「クソッ！ やっぱ道具を隠したの、皇城組のヤツらだよなあ！」

徳治くんは親方の蹴った缶を更に蹴って、悔しがった。

「ごめんなさい。私がぶつかってせいで」

「オメエのせいじゃねえよ。大きくは皇城組の嫌がらせのせいだ。あれ？ お前、まだ血止まってねえぞ」

「えっ」

私は肘からまだ血が流れているのを確認した。

「病院、連れてってやる」

そう言って差し出した徳治くんの腕もすりむいていた。

「そっちの怪我のほうがひどい！」

「大丈夫大丈夫！　こんなんで参ってたら、立派な炭鉱夫にやなれねえし！」

徳治くんは、私を大八車に乗せて走り始めた。

「俺、徳治！　ここらで見ない顔だけど、名前は？」

「順子」

「順子か！　新しく島に来たの？」

「えー、まあそんなところ」

「そっか！　よろしくな！　この島はさ、狭い所に上も下もひしめきあってるからさ、みんな家族同然なんだよ！　中には嫌なやつもいるけど、基本仲良しさ！」

大八車は軍艦島のメインストリート、山やまじお通りに入った。

「ここが山通り！　あそこにもともと岩山だった山が残ってて、その上に端島神社がある！　ほんであれがそこに上る為の『地獄階段』。罰ゲームさせられたら、大抵ここだ！」

私は上を見上げる。八階建て、九階建ての建物があり、渡り廊下で建物同士が網目のように繋がっている。神社の山と階段がエッシャーの絵のように接続されていて、立体的な蟻塚の中にいるような感覚になる。洗濯物が干され、窓にはサボテンや観葉植物が植わっていて、狭い廊下には屋台がひしめいていた。

「どけどけどけい！　怪我人だア！」

大人の足で七、八分はかかる南端から北端までの移動を、徳治くんの大八車は三分で駆け抜けた。

「イデデデデ！」

「これしきでイテエとか言ってんじゃないよ徳治！」

お医者さんのオキシドールは随分しみているようで、徳治くんは跳ねあがって痛がった。私の怪我は絆創膏で済んだけど、徳治くんのは消毒しないと膿んじやうって。

「一応ほかも診るから上脱いで！」

「……」

「はやく脱いで！」

「だって……女の子見てるし……」

「バカ！　見ないし！」

徳治くんは意外な所で恥ずかしがって上着をめくりあげた。へその横に大きな赤いアザがあり、それを恥ずかしがってるのだと理解して、私は慌てて後ろを向く。

「えっ？ この島に迷い込んだって？」

家まで大八車で送るぜ、65号棟ならすぐだ、と言う徳治くんに、私は事情を話した。

「じゃあ……船着き場に連れていこう！ 今日には長崎港からの定期便が飲み水を持ってきてくれる。事情を話して、乗せてもらうんだ。そしたら長崎に……」

「違うの」

「？」

「私、多分……あなたたちから見て、未来からやって来たの」

「？」

「今何年？」

「昭和十年」

「でしょ？ 昭和は終わって、平成になって、令和になるの」

「??？」

「西暦で言うと昭和十年って何年？ ……あ、新聞持ってた」

私は拾った古新聞をポケットから出した。長崎日日新聞、昭和十年、一九三五年。

「今一九三五年でしょ？ 私、二〇二三年から来たの！」

「??？」

私はその新聞に載っている、爆発事故を思い出した。

「ねえ！ 今日は何月何日？」

「えっと、三月二十五日」

新聞を確認する。事故は三月二十六日、午後十時。

「大変！」

「何？」

「明日の夜十時、爆発事故が起きる！」

「は？ 神のお告げか何か？」

徳治くんが「未来から来た」とか信じる訳がない。私ですら今起こっていることが信じられていないのだ。でも『死傷者三十余名』があることは確かなんだ。

「神のお告げでも何でもいい！ 死ぬの！ 明日夜十時、爆発で三十人が！」

と、山通りが騒然としはじめた。皆が同じ方向に駆けてゆく。

「喧嘩だ喧嘩だ！」

「天也組と皇城組が、風呂場で喧嘩だぞ！」

半裸の男同士が、銭湯で大乱闘をしていた。

天然の水が出ない軍艦島では水は貴重品で、炭の粉がついた炭鉞夫たちはまず海水を沸かした第一風呂で汚れを落としてから、真水湯の第二風呂に入ることになっていた。その真つ黒な第一風呂で、大乱闘だった。

「親方！ 助っ人に入るぜ！」

徳治くんは真つ先に加勢する。

私は棒を探した。掃除用のデッキブラシ。これなら「剣」になる。

「あなたたち！ 喧嘩はやめなさい！」

「ハア？ うるせえ！ 引っ込んでろ女！」

カチンと来た私は切れた。私は剣道部で二段である。男の人でも、武器を持ってないなら叩きのめせる。頭に血が上った男たちを一発で伸ばさないと、組みつかれたら力負けする。足元は滑る。踏み込みは小さく。

「メン！」

一発でのす。次も、次も。

「なんだ？」

「胴！ 小手！」

竹刀や木剣とはバランスが違う。気を付けて次も。

気づけば騒ぎはおさまり、私だけが肩で息をしていた。

「ガッハツハ！ 順子ちゃん大暴れだったな！ 俺の驕りだ、飲め飲め！」

「いや……未成年なので、酒は……」

「そうだよ親方！ 酒の強要はよくない！」

徳治くんが援護射撃をしてくれる。屋台の連なる65号棟と16号棟の間、通称「屋台通り」で、私たちは勝利の宴を催していた。

坑道にガスが出て今日の作業は中止になり、皆一端返されたいらしい。そこで「お前ら道具を隠したろ」と、天也組が皇城組にちよっかいを出して、喧嘩に発展したのだそうだ。

「でもまた、皇城組が返り討ちに来るかも知れねえぞ」

と背の高い守さんが心配する。

「その時はまた順子ちゃんが追い払ってくれるよ！ ガハハ！」

皆は外海で獲れた、寒ブリの刺身をつまんでいる。東京で食べる刺身とは段違いのぷりぷりで、ゴマ醤油とネギが利いてて、ご飯がとにかく進んだ。

「順子ちゃんは、帰んなきゃなんないんです」

徳治くんが言う。

「どこに？ 家にか」

「彼女この島の人じゃないんです。迷い込んだようで」

「迷い込む？」

「船便に乗せて、長崎港まで運んでもらおうかと思って。でももう船便出ちゃったし」

「泊まる所がねえのか？ 25号棟の清風荘せいふうそうは高いしなあ。よし徳治、今晚俺んち泊まって、順子ちゃんはお前の部屋に泊めてやれ」

「親方いびきうるせえんだよなあ」

「我慢しろよ。明日も早いし、送ってってやれ」

徳治くんは私のボディガード代わりに、徳治くんの部屋、66号棟まで送ってくれることになった。

「せっかくだから、軍艦島の一番の景色見せてやるよ！」

徳治くんは私の手を引き、複雑な連絡団地の階段を駆け上ってゆく。屋上は、ジャングルのように植物が満ち満ちていた。

「屋上庭園？」

「よく知ってるね！ 日本初だってさ！ 人工物だらけで緑がないからね。そして……」

徳治くんはその上の給水タンクによじ登り、私の手を引いた。海風が私の髪を靡かせる。

「きれい！」

夜の漆黒の中に、街が浮いているような感じだった。建て増し建て増しでつくられたコングリの街にはすべて明るい電気が灯り、歓楽街には映画館昭和館しょうわかんやスナック白水苑はくすいえんがネオンを瞬かせ、二十四時間休まない煙突は、夜でも煙をもくもく吐いている。

「なんせ島中で発電してるからな！ 夜は全家庭に電気がつくんだぜ？ しかも！」

屋上庭園の向こうには、電線だらけのアンテナ群があった。

「東京ですらテレビは一丁目に一台だったのに、ここじゃあテレビの普及率は百パーセントだぜ！」

ずっと低い音が鳴って、島全体がひとつの生き物のように感じられた。大きな軍艦に乗って、夜の海を進んでいるような気分だった。私たちは給水タンクの上に座って、しばし風を浴びた。

「ウチの家族は離婚して、俺親父の連れ子なのね。でも親父はガスで死んだんだ」

「えっ？」

「それで親方の所に世話になってる。将来立派な炭鉱夫になって、親父を超えてえ。母ちゃん顔はもう忘れちゃったけど、薙刀の達人だったんだってさ」

「へえ」

「さっきの順子ちゃん、母ちゃんに似てるって思った。ちょっとカッコ良かったぜ」

徳治くんは剣を振る真似をして、屈託なく笑った。

「あのね徳治くん。……言いくいんだけど」

「なに？」

「今は石炭がナンバーワンかも知れないけど、じきに石油の時代が来て、原子力が始まるのね」

「？」

「この軍艦島は、戦争が終わってしばらくしたら閉鎖するの」

「戦争のせい？」

私は首を振った。

「石炭がいらなくなるから。どんなに良質な石炭が出て、それが世の中から必要とされなくなる時代が来るの。あと二十年くらいで」

「嘘をつくな！」

突然、徳治くんは烈火のように怒り出した。

「じゃあ何だよ！ この軍艦島は用済みになるってのか？ こんなにピカピカに光って、こんなにみんなが働いて、ガスに飲まれて死んでも、それが全部無駄になるって言うのか？ そんな馬鹿な！ 炭鉱夫を馬鹿にするのもいい加減にしろよ！」

「馬鹿にしてる訳じゃないよ！」

私は興奮する徳治くんをなだめようとする。彼の大事にしてる所に、土足で入ってしまったことを後悔していた。

「たとえば工業の時代になって、農業は馬鹿にされるようになったでしょ？ でも農業は人が生きていくのに絶対いるから、お百姓さんは大事、って残ったでしょ？ 炭坑は石炭



のときには一番大事よ？ でもそれは……移り変わる時が来るの」

「じゃあ、親父は何の為に死んだんだよ！」

「あなたを食べさせる為。親ってそういうものではないか？」

「……分ったようなことを言いやがって」

私は何も言えず俯いた。

「……ごめんなさい。言い過ぎた」

ここに住む人たちの運命を思う。これだけの人たちが、いつかどこかへ散ってゆく。私は、ポケットから未来の新聞を出した。

「私は爆発事故を止めたい。徳治くんみたいな子を増やさないために」

「……その新聞が、本当に未来の新聞なら」

「夜十時に、大きな爆発がある。救助隊が入って二回目の爆発。それで三十人が死傷」

私はふと思った。死ぬべき運命だった人を助けると、未来は変わってしまうのではないかと。でも目の前に死ぬことが分っている人がいて助けられないのは、人として正しくないと思う。

「帰ろう。明日親方に話すよ。……あ、傘一本しか持ってきてねえや」

「傘？」

満天の星で、雨なんて降りそうにないのに。

「相合傘で行くか！」

徳治くんの部屋は独身者の住まう66号棟で、島の西側にある。西側は外洋で波が高く、コンクリの岸壁が消波し切れずに波しぶきが高く上がる為、「潮降り街」と呼ばれるのだ。二人でその潮降りを相合傘で避けながら、私達は独身寮名物 エックス X 階段を上った。

徳治くんの部屋は何もなくて、男の子の部屋って感じだった。テレビをつけたら白黒で、はじめて白黒テレビを見た。内容はバラエティ。昔の人も同じことに笑っていたんだな。

布団に入ってスマホを充電しなきゃと思ったけど、充電器も何もあるわけないじゃん。

電池切れたらただの板。私、帰れるのかなあ。二〇二三年の日付をじっと見た。

翌朝、徳治くんが迎えに来てくれて、私たちは天也親方に話しに行った。家族用のマンモス棟65棟の廊下には朝市が立ち、魚や野菜や服やタンスを売ったりしている。

「天也組は、今日は朝一番の一番方だ。いちばんかた 爆発が仮に起こるとしても夜だろ？ じゃあ天也

組は関係ねえ」

親方は首を振って断った。

「そんな！」

「俺オイラが守れるのは、天也組までだ」

「親方がそんな人だとは思わなかったよ！」

徳治くんが切れた。

「じゃあ、総合事務所へ掛け合ってくる！ 三菱の人ならこの話分ってくれるだろ！」

「やめとけ」

親方は徳治くんの肩をつかみ、止めた。

「どこからガスが出るか分るのかい？ 順子ちゃん」

私は首を振った。そこまでは新聞に書いてなかったからだ。

「じゃあ無理だ。どこからガスが出るか調べるために、全部を止めなきゃなんねえだろ。

何日止める？ この炭坑が一日いくら稼ぎ出すか、知ってるのか？」

私は首を振る。

「三十人集まっても、この島の半日分も稼げねえよ。つまり金だけ考えりや、続行だ」

「そんな！ じゃあ三十人が死んでもいいの？」

「そう上は判断するってことだ。だが天也組までは、守れる。組長が出来るのは、そこま

でなんだよ」

「……」

「徳治、順子ちゃんを船着き場まで送ってやれ。順子ちゃん、もうこんな所に迷い込むん

じゃねえぞ。昨日の大活躍は徳治の母ちゃん並だったな！」

親方は大きくて分厚い手で、私の頭を撫でてくれた。

船着き場に定期船が来た。徳治くんが掛け合ってくれて、私は船に乗れることになった

けど、それで？ 私は昭和十年の長崎港には帰れるが、令和五年へ帰れる訳ではない。

「待って徳治くん」

私は言った。

「船に乗るのは、明日まで待って」

私は赤レンガの総合事務所に入り込み、三菱の人に説明を試みた。長崎日日新聞も見せたが、よくできた偽物だと信じてもらえなかった。そして仮に信じたとしても、と背広姿

のお偉いさんは、親方の言った内容をオブラートに包んだ言い方で説明してくれ、「文明の発展に犠牲は付き物である」と、美辞麗句で締めた。

「……徳治くん。木刀ある？」

実力行使しかない。私は二番方（夜番）の入り時間、夕方四時まで待つことにした。

「昨日のガキじゃねえか！ 俺達が返り討ちに行く前に、そっちから続きをしに来てくれるとはなア！」

私は木刀を青眼に構えて、二番方の皇城組の人達の前に立ちはだかった。だけど二百人が鶴嘴を持っている。この人数を木刀一本でどうこう出来るとは思えない。

「わ……私は巫女です！ 昨晚、端島神社のお告げがありました！」

「？」

「今夜十時、坑道でガス爆発があります！ 入っちゃダメです！」

きよとんとした皇城組の人達は、直後に大爆笑した。

「はーっはっはっ。天也組も、手の込んだ嫌がらせを考えてきたな徳治！」

彼らは徳治くんに言った。

「天下の皇城組がそんなものにビビるとでも？ 事故が怖くて炭鉱夫がやれるかよ！ 俺

らがビビッている間に天也組がいい鉱脈確保しようなんて、セコイ作戦だぜ！」

「？ 天也組は一番方で、そろそろ帰ってくる筈だろ」

「聞いてねえのか？ 番手の変更になって、天也組は今日の二番方だぞ？」

「えっ」

「噂をすれば、だ」

天也組の人々も、鶴嘴をもってやって来た。私は彼らの前に立ちはだかり、両手を広げた。

「天也組の人達を守るって、約束してくれましたよね！」

「順子ちゃん、船で帰ったんじゃないのか」

「爆発があります！ 坑道に入らないで！」

「それが、守のヤツが丁半博打で大借金こさえてよう。みんなで今晚中に返さねえとなんだよ」

「命があれば働いて返せます！ みんな死ぬのよ！」

親方は私の目を覗き込み、守さんに聞いた。

「どう思う？ 守」

「嘘をついてる子の目じゃないです」

「徳治」

親方は徳治くんに尋ねた。

「この子はオメエが連れてきた子だ。お前が責任持て。この子の言ってることは、本当だと思うか？」

徳治くんは私の目を見た。私は真剣に彼の目を見返した。

「俺も、嘘をついてるとは思えないです。天也組の皆を、親父みたいに失いたくないんだ。みんな俺の、親父代わりになってくれた」

「……そこまで言うなら信じるよ。爆発がなかったら、今夜の飲み代はお前につけるぞ」

天也親方は徳治くんと私を信じ、屋台通りへと踵を返した。

「天也組は弱腰組かよ！」

皇城組の人達は、腹を抱えて笑った。

「オイ徳治！ 皇城組に入らねえか？ お前が道具持ってくんの遅かったおかげで、いい鉦脈取れたし、もう俺達が道具隠すまでもねえな！」

「やっぱり隠したのはお前らだったのか！」

皇城組はそれに取り合わず、ひらひらと手を振りながら、二階建て昇降機で地下の世界へ向かった。

納得がいかないまま、私は徳治くんと天也組の食事へ合流した。

運命の夜十時。

どん、と低い音がした。

コップや皿や電灯が、びりびり震えた。

私は皇城組の人達が悪い人達とはいえ、運命を変えられなかったことを後悔した。

みんなさっきまで酒に酔って真っ赤だったのに、その音を聞いた瞬間、急に冷めた顔になって立ち上がった。皆黙って食べ物を一気に食べ、飲み物も一気に飲んだ。

「何？」

「助けに行く」

徳治くんが言った。

「えっ？ 皇城組の人達は、嫌がらせした悪い奴らなんでしょ？」

「それは地上の話だろ？ 地上でいがみ合いは好きにやればいい。だが地下の危機は助けあう。それが炭鉱夫だ」

皆、第二へ向って走り出す。私は新聞記事を思い出す。『係員急行し目下救出中』……  
「待って！ 救助隊が入って、もう一回爆発があるの！ 行っちゃ駄目！」

地下に入る準備をした天也組の人々に、私は再び木刀を構えて立ちはだかった。

「力づくでも通るぞ順子ちゃん」

「何で分んないの！ 死ぬのよ！」

どうしたら分つてくれるだろう？ 「神様の巫女」じゃ足りない？ 私はとっさに嘘をついた。

「神様の巫女なんて嘘よ！ 私は実は巫女じゃないの！」

「は？」

私はポケットにある未来の道具を思い出したのだ。スマホ。私はカメラを立ち上げ、フラッシュを焚いて親方の写真を撮った。

「うわっ！ なんだ！」

「私は悪魔の使いよ！ 魔女なの！ これは魔女の道具よ！ 見て！」

私は今撮った写真を皆に見せた。

「白黒写真しか見たことないでしょ！ これはカラーよ！ しかも4KHDR！ 写真って魂を抜くって言うわよね！ 親方の魂を抜いたわ！ 動画も撮ってやる！」

4K高画質の鮮明な親方の驚く顔の動画を見て、皆信じた。

「あなたもあなたも！ 魂を抜く！」

皆の写真を次々に撮る。守さんも、徳治くんも。

「これで腰が抜けて、救出作業は出来なくなったわよ！」

「ホントだ！ ……体に力が入らねえ……！」

それはさっきのお酒のせいではないかと思っただが、黙っていた。皆次々に大人しくなる。徳治くんなんか「魂が抜けたあー！」って泣き出してへなへなと崩れている。

坑道を振り返った。すでに救助隊が入ったあとのようだった。

私は目を瞑った。

二回目の爆発が、地下一千メートルで起こった。

船着き場まで、天也組の皆が送ってくれた。徳治くんの大八車は私を乗せ、かわるがわる皆が引いてくれた。

「あ、みんなで記念写真撮りたい」

私はスマホを出したが、みんなまた魂を抜かれるとビビった。もう、あれは嘘だし、一応「魂を返した」って言ったでしょ？

今日の天気は良く波は風で、船は予定より早く着くだろうと徳治くんは言った。私はひと息ついて、大八車に腰かけた。

このままこの島に住めたら？ そしたら徳治くんと別れなくて済むかも。そう思った瞬間はげしい頭痛が来て、真っ暗になって火花がチカチカと光った。

「順子！ 順子！」

母の声が聞こえ、私の身体を揺さぶっていた。

「アレ？」

私は体を起こす。

ガイドさんと父が、心配そうに私を見ている。

「今令和？ 昭和？」

「何言ってるの！ 令和に決まってるでしょ？ 勝手に立ち入り禁止エリアに入るから、変なことになるのよ！」

私は辺りを見回した。

そこには、巨大な廃墟が荒涼と広がっていた。あのもくもくと煙を出す煙突は一本もなく、赤い煉瓦の事務所は半壊し、第二堅坑抗口も崩れて錆びついていた。みんなが住んでいたマンションはコンクリがむき出しになり、植物に覆われていた。私と徳治くんが見下ろした、あの屋上庭園と給水タンクがあった空間には何もなかった。

何より、私が腰かけていたこの大八車は、徳治くんの押していたものが、朽ちて土に還る途中のものだった。

私は、生まれて初めて死を理解した。

涙と大声が、止まらなかった。

帰りの四十五分のクルーズは、とても疲れた。波は相変わらず荒く、これを泳いで渡る

のは無理だよなと同じことを思った。ようやく酔い止めの飴が、効いてきたようだ。

長崎港につくと、観光客である我々を、土産物屋の人達が取り囲んだ。

「どいたどいたどいた！ 一番安い軍艦島土産はここだよ！」

私と同年くらいの少年が勢いよく大八車を引いてきて、私は言葉を失った。

「徳治くん？」

その大声に彼は驚き、そうして大八車と私はぶつかった。

「何で死んだじいちちゃんの名前知ってるの？」

彼の名前は徳磨<sup>とくま</sup>くんと言った。徳治<sup>とくぢ</sup>くんと顔がそっくりで、私はまだ徳治<sup>とくぢ</sup>くんと話してる気分になる。

「ひよっとしてそのおじいちゃん、へその横に赤いアザあったでしょ？」

「何でそんなのまで知ってるの？」

私はスマホに、天也組のみんなの写真があったことを思い出して、彼に尋ねた。

「すごい不思議な話があるんだけど、聞く？」

人は何の為に生きるのだろう。何の為に死ぬのだろう。

たかが中二の私には、まだ全然分らない。いつか大人になったら「分った！」という日が来るのだろうか。私は死ぬ運命だった天也組や徳治<sup>とくぢ</sup>くんを助け、未来を変えてしまったかも知れない。あるいは、仮に事故の中にいたとしても徳治<sup>とくぢ</sup>くん達は助かったのかも知れない。目の前の徳磨<sup>とくま</sup>くんは、存在したかも知れないし、存在しなかったかも知れない。生きるってなんだろう。全然分らない。

私はもう少し徳磨<sup>とくま</sup>くんと話したい。

今言えることは、それだけだ。

百の屋敷の古い軒に、しのぶ草が生えている

かつての栄華を思うと、偲んでも偲びきれない

百敷<sup>ももしき</sup>や 古き軒端<sup>のきば</sup>の しのぶにも

なほあまりある 昔なりけり

順徳院<sup>じゅんとくいん</sup>（百）

第一百話　東京のダルメシアン

孝太郎こうたろうと私は、北海道から飛行機に乗って東京にやって来た。

東京の大学を受験する為である。私達は同じ大学を受け、なるべくなら同じ春を迎えたいと考えている。

東京はめちゃくちゃ人が多くて、私は人酔いしそうになった。「渋谷のスクランブル交差点が見たい」なんて言うんじゃないかった。前から、横から、斜めから人が一斉にやって来て、みんなぶつからずにうまくすれ違う。何これ？　現代芸術？

「こんなのお祭り以外に見たことないよ！」

「おっ。出たねベタな田舎リアクション！」

孝太郎は笑って、私を迷子にならないように手を握ってくれていた。

いよいよ受験当日の朝。昨晩から降り始めた雪は大雪になり、交通機関は大混乱だった。私達は道民だから雪ごときには動じないつもりだったが、異変に気付いた。

「どうしたの？」

「なんか東京の雪、へん」

「？」

「べしよべしよしてる」

「ああー。北海道の雪はさらさらしてるよね。東京の雪は地上着くころ半分溶けてるんだよね。だからべちよべちよになるんだよね」

孝太郎は元々東京にいたから慣れてるけど、こんな雪降るのは十年ぶり、と空を仰いだ。

「あー大学落ちたらどうしょー」



「バカ、落ちる滑るは受験生に禁句でしょ、孝太郎！」

「そうだった。試験受ける前にそれはやべえわ」

「仮に駄目だったとしてもさ、別々の大学に行ったり、浪人したりすればいいだけじゃん。私達が変わっちゃう訳じゃないし」

「そうだよな」

「そうだよ。どう転んだってさ……」

と、私はその瞬間べちゃべちゃの雪に足を取られて、思い切り滑って転んでしまった。孝太郎は「言った端から」と大爆笑しながら私を起こしてくれ、腰についた雪を払ってくれた。まるでダルメシアンのような模様になっていて、初めて彼と出会った頃を思い出す。「これで験担ぎオシマイ。俺達、逆に受かるぜ」

私は彼と出会って、毎日が楽しくなって、笑ったり、泣いたり、気持ちが懐かしくなったり、はげしく落ち込んだり、手に触れた瞬間きゅんとなったり、髪の毛が跳ねてたら撫でてあげたくなったり、どうして分ってくれないのと怒るようになったり、ちよつとした言葉で深く傷ついたり、やさしくなったり、意地悪になったり、これを教えてあげよう！と思ったり、絶対謝るもんかって意地っ張りになったり、安心したり、不安になったり、力が湧いてくるようになった。知らない感情を沢山知った。知ってる感情も濃くなった。つまり私は、孝太郎と過ごして人間になった。

だから孝太郎。どう転んだってさ。私は君とずっといたいんだ。

四季めぐり 百通りの好きを君は言う

私は百一の 答え返して

東京の雪がやみ、少し日が差して来たスクランブル交差点。

孝太郎と光子が、統と桃持恵が、一平とベレー帽の子が、貫治と真紀が、愛璃好と忠士が、奈防と周二が、匡子と良房が、大河と左人志が、照と遍音が、侑右子と文近が、式島と小峰が、高稀が、最上川と八重が、昌が、入花と道翔が、手話で話す夫婦が、スーニヤとトクイルが、忠が、沙也河と彼氏が、式子と甲子雄が、後藤と羽鳥が、然田と丸本が、兼人と平梨が、伊織と看護師が、小町と小野が、徳沙が、参月と母が、大輔と兼奈が、能里

と宜雄が、ミッチーと左野京のスター夫婦が、嘉澄が、寺ちゃんが、清原と深町が、大帆がトランクを転がして、方正と希実が、儀弘と司が、康行が、貴皇と竹葉が、泉がカズを抱いて、法継と由道が、義生と孝夏が、三葉と条二が、黒川と良乃が、二加と九条先輩が、公瑛と任美と納緒が、少和と清孟先輩が、穂乃家と隆が、定絵と納人が、S A R と M A R I A のテスト信号が、紫織と式高が、撰奈と敏喜が、千里と貴大が、慶香と恵太が、恭輔と頭乃が、康一と朝子が、天道と万智が、俊哉と成乃葉が、条路と三央と是貞が、素子と夫が、因美と慎能介が、暹務と良月が、菅一と家暖が、屋康と文が、蓮と寂子が、極と京子が、経政と信子と孫たちが、雅史と経子が、智行と西蘭が、信平と貞子が、列依と大樹が、友基子と俊樹が、恵倍とアレックスが、道緒が、聡俊が、千登勢と伊久真が、忠加と朝生が、陽介と葉成が、忠香と敦惺が、頼子と良定が、山吾と部子が、于子と宗篤が、幸持と家恵が、終則と是也が、寛慈と円香が、久家伊吹が、模恵と光が、光俊と恵が、忠嗣と悠見が、未道と綱兵が、行輝が、赤川が、七清と若者が、式里と三沙子が、克興と風花が、輔波と元が、順子と徳磨が、それぞれの方向からやって来て、信号とともに歩き出し、それぞれに行く方向へ去って行った。

【百人一首別 索引】

1	秋の田の 飯庵の庵の 苦をあらみ 天智天皇	# 60 帰り道……………	116
2	春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 持統天皇	# 2 レーザービーム……………	7
3	あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の 柿本人麻呂	# 14 伝説のプリマドンナ	37
4	田子の浦に うち出でて見れば 白妙の 山部赤人	# 84 ホワイトクリスマス	155
5	奥山に 紅葉踏みわけ 鳴く鹿の 猿丸太夫	# 53 奥の山に踏み分けて	105
6	かささぎの 渡せる橋に おく霜の 中納言家持	# 86 橋の上……………	157
7	天の原 ふりさけ見れば 春日なる 安倍仲麿	# 76 最も遠い二人……………	140
8	我が庵は 都のたつみ しかぞすむ 喜撰法師	# 55 修羅シテイ……………	110
9	花の色は うつりにけりな いたづらに 小野小町	# 28 満開のあとに……………	62
10	これやこの 行くも帰るも 別れては 蟬丸	# 25 大坂ダツシュ……………	55
11	わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと 参議篁	# 42 天狗の花嫁……………	86
12	天津風 雲の通ひ路 吹きとぢよ 僧正遍昭	# 10 フェリー付き場……………	30
13	筑波嶺の 峰よりおつる 男女川 陽成院	# 81 ボディブロー……………	149
14	陸奥の しのみぢずり 誰ゆゑに 河原左大臣	# 9 ジャガー……………	28
15	君がため 春の野に出でて 若菜つむ 光孝天皇	# 1 道央のダルメシアン	4
16	たち別れ いなばの山の 峰に生ふる 中納言行平	# 41 まぼろし団地……………	82
17	千早ぶる 神代もきかず 龍田川 在原業平朝臣	# 3 四十九日のレッスン	11
18	住の江の 岸による波 よるさへや 藤原敏行朝臣	# 94 天気予報、曇り……………	173
19	難波潟 みじかき芦の ふしの間も 伊勢	# 79 第九節……………	147
20	わびぬれば 今はた同じ 難波なる 元良親王	# 47 みをつくし会見……………	94
21	今来むと いひしばかりに 長月の 素性法師	# 63 扉越しの攻防……………	120
22	吹くからに 秋の草木の しをるれば 文屋康秀	# 67 神の一手……………	126
23	月見れば ちぢにものこそ 悲しけれ 大江千里	# 56 夜行バスと月……………	111
24	このたびは 幣も取りあへず 手向山 菅家	# 66 背面プロポーズ……………	124
25	名にし負はば 逢坂山の さねかづら 三条右大臣	# 46 内緒の出張……………	93
26	小倉山 峰のみみぢ葉 心あらば 貞信公	# 73 もみじのような手……………	136

27	みかの原	わきて流るる	泉川	中納言兼輔	#31	ドブジャンプ	68
28	山里は	冬ぞさびしき	まさりける	源 宗于朝臣	#85	スタック	156
29	心あてに	折らばや折らむ	初霜の	凡河内躬恒	#4	白菊	18
30	有明の	つれなく見えし	別れより	壬生忠岑	#21	耳の赤い店員さん	49
31	朝ぼらけ	有明の月と	見るまでに	坂上是則	#87	無音	159
32	山川に	風のかけたる	しがらみは	春道列樹	#74	新作ダンス	138
33	久かたの	光のどけき	春の日に	紀友則	#19	静かな春	45
34	誰をかも	知る人にせむ	高砂の	藤原興風	#98	パーティーナイト	178
35	人はいさ	心も知らず	ふるさとは	紀貫之	#5	闇の中の梅	21
36	夏の夜は	まだ宵ひながら	明けぬるを	清原深養父	#37	ロックよ、静かに明けよ	76
37	白露に	風の吹きしく	秋の野は	文屋朝康	#59	リス	115
38	忘らるる	身をば思はず	誓ひてし	右近	#11	最前線	31
39	浅茅生の	小野の篠原	しのぶれど	参議等	#30	おとうちゃんが消えた	67
40	しのぶれど	色に出でにけり	わが恋は	平兼盛	#26	桜のような一カ月	57
41	恋すてふ	わが名はまだき	立ちにけり	壬生忠見	#92	人生受付嬢	168
42	契りきな	かたみに袖を	しぼりつつ	清原元輔	#99	松山で待つ	181
43	逢ひ見ての	のちの心に	くらぶれば	権中納言敦忠	#82	ポテト食え	151
44	逢ふことの	絶えてしなくは	なかなか	中納言朝忠	#80	ガラス越しの体温	148
45	あはれとも	いふべき人は	思ほえで	謙徳公	#12	二百年の孤独	32
46	由良の門を	わたる舟人	梶をたえ	曾禰好忠	#6	港町行方知らず	22
47	八重葎	しげれる宿の	さびしきに	恵慶法師	#57	或る喫茶店で	113
48	風をいたみ	岩うつ波の	おのれのみ	源 重之	#15	女将さん女将さん	38
49	御垣守	衛士の焚く火の	夜は燃え	大中臣能宣	#32	蜃気楼	69
50	君がため	惜しからざりし	命さへ	藤原義孝	#45	小指の入ってるタコ焼き屋	91
51	かくとだに	えやは伊吹の	さしも草	藤原実方朝臣			

5 2	明けぬれば 暮るるものとは 知りながら 藤原道信朝臣	# 77 霊安室で寝る女	144
5 3	歎きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は 右大将道綱母	# 93 長い夜	171
5 4	忘れじの 行末までは 難ければ 儀同三司母	# 40 並木道の青	80
5 5	滝の音は 絶えて久しく なりぬれど 大納言公任	# 49 転向	97
5 6	あらざらむ この世のほかの 思ひ出に 和泉式部	# 43 カズから君へ	88
5 7	めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に 紫式部	# 54 尾ける	108
5 8	有馬山 猪名の笹原 風吹けば 大式三位	# 97 何チヨコ	177
5 9	やすらはで 寝なましものを 小夜更けて 赤染衛門	# 95 監視カメラ	174
6 0	大江山 いく野の道の 遠ければ 小式部内侍	# 13 カンニングペーパー	35
6 1	いにしへの 奈良の都の 八重桜 伊勢大輔	# 27 八重の花	58
6 2	夜をこめて 鳥のそら音は 謀るとも 清少納言	# 50 先輩の手口	99
6 3	今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを 左京大夫道雅	# 33 七十二時間のパラダイス	71
6 4	朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに 権中納言定頼	# 83 白の朝	153
6 5	恨みわび ほさぬ袖だに あるものを 相模	# 90 泥棒猫	164
6 6	もろともに あはれと思へ 山桜 前大僧正行尊	# 17 ヘッドライト	43
6 7	春の夜の 夢ばかりなる 手枕に 周防内侍	# 7 肌寒い花見	24
6 8	心にも あらでうき世に ながらへば 三条院	# 62 岬エッジ	119
6 9	あらし吹く 三室の山の もみぢ葉は 能因法師	# 64 嵐の子	122
7 0	寂しさに 宿を立ち出でて 眺むれば 良暹法師	# 65 一人の旅	122
7 1	夕されば 門田の稲葉 おとづれて 大納言経信	# 70 初体験	132
7 2	音にきく 高師の浜の あだ波は 祐子内親王家紀伊	# 89 プライド	162
7 3	高砂の 尾上の桜 咲きにけり 権中納言匡房	# 8 棒の上のサンクチュアリ	25
7 4	うかりける 人を初瀬の山おろしよ 源 俊頼朝臣	# 78 向い風の競技者	145
7 5	契りおきし させもが露を 命にて 藤原基俊	# 75 Y字路	139
7 6	わたの原 漕ぎ出でて見れば 久かたの 法性寺入道前関白太政大臣		

77	瀬を早み 岩にせかるる 滝川の 崇徳院	# 36 海底の君……………	74
77	瀬を早み 岩にせかるる 滝川の 崇徳院	# 20 国境のパン屋さん……………	46
78	淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に 源 兼昌	# 16 紫いろの朝……………	41
79	秋風に たなびく雲の 絶え間より 左京大夫顕輔	# 58 暗くなるまで待つて……………	114
80	長からむ 心も知らず 黒髪の 待賢門院堀河	# 22 髪を切る……………	51
81	ほととぎす 鳴きつる方を 眺むれば 後徳大寺左大臣	# 29 不如帰……………	64
82	思ひわび さても命は あるもの 道因法師	# 44 命綱……………	89
83	世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 皇太后宮大夫俊成	# 61 鳴き声……………	118
84	ながらへば またこの頃や しのばれむ 藤原清輔朝臣	# 96 生れ変つても……………	176
85	夜もすがら もの思ふ頃は 明けやらで 俊恵法師	# 91 隙間風の夜……………	166
86	なげけとて 月やはものを 思はする 西行法師	# 72 三日月に飛ぶ……………	135
87	村雨の 露もまだ干ぬ 檣の葉に 寂蓮法師	# 68 プレイボーイ、プレイガール	128
88	難波江の 芦のかりねの 一夜ゆゑ 皇嘉門院別当	# 35 その汗は誰のもの……………	73
89	玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 式子内親王	# 23 玉千切る……………	52
90	見せばやな 雄島の 蟹の 袖だにも 殷富門院大輔	# 38 推しの視線……………	77
91	きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに 後京極摂政前太政大臣	# 69 猫になった二人……………	130
92	わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 二条院讃岐	# 48 海の上の遊園地……………	95
93	世の中は 常にもがもな 渚こぐ 鎌倉右大臣	# 34 血を浴びた女……………	73
94	み吉野の 山の秋風 小夜更けて 参議雅経	# 71 憧れのクリーニング屋さん	133
95	おほけなく うき世の民に おほふかな 前大僧正慈円	# 88 区間最速……………	160
96	花さそふ 嵐の庭の 雪ならで 入道前太政大臣	# 18 吹雪の記憶……………	43
97	来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに 権中納言定家	# 52 なにもない海……………	103
98	風そよぐ ならの小川の 夕暮は 従二位家隆	# 51 プール付き……………	100
99	人も惜し 人も恨めし あぢきなく 後鳥羽院	# 24 カナリア……………	54
100	百敷や 古き軒端の しのぶにも 順徳院	# 100 軍艦島の魔女……………	183

※「小倉百人一首」の歌番号は年代順です。本編は季節順としました。